
TEN-ROBO.-天才少女とロボット執事-

ツキミキワミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T E N - R O B O ・ 天才少女とロボット執事 -

【Nコード】

N 2 7 4 1 X

【作者名】

ツキミキワミ

【あらすじ】

世紀の天才少女、雪洞・F・ケイマは精神を肉体から離脱させる新システム『簞-KAGARII』を発明した。彼女の執事を務めるのは、開発をタブーとされていた人型ロボットのフランス・ド・フィニステール。謎に包まれた少女の過去、そして青年と引き換えに破られた禁忌の意味とは――近未来を舞台に繰り広げられる 異世界×SF×恋愛×知能バトルストーリー E エブリスタで同時連載中

P r o l o g u e

春はあけぼの

やうやう白くなりゆく山ぎは 少し明りて紫だちたる雲の細くたな
びきたる

夏は、夜

月の頃はさらなり 闇もなほ 螢の多く飛び違ひたる

秋は 夕暮

冬は つとめて――

ずっと昔の凄い人

あなたはどんな気持ちでこれを書いたのですか

その時誰を想っていましたか

あの日貴方が消えた時から

私の心に夜明けは無く

四季も無いのです

あれからどれだけの夜が過ぎたのでしょうか

泣いて泣いて泣き疲れて

私は眠れなくなりました

今はただただずっと遠くの方で

篝火が灯っています

暗闇の中

遠くに

手の届かない

遠くに

いつの日か風の便りで

私の事情を知って

慰めに来なくても良い

少し同情してくれたら
いいと思います

相変わらず私は

貴方を探して

此処にいるのだから

「交渉は決裂ね。」

今日はこれにて失礼」

街の中心部にそびえる200階建ての最高裁判所
その一室に集まった群衆が、弱冠18歳である少女の突飛な行動に
度肝を抜かれた。

黒皮のコートに不釣り合いな桜色の長い髪をかき上げ、少女はおも
むろに席を立つ。

ガタン、と真つ赤な椅子が音を立てたのを合図に
後ろに控えていた少年が慌ててドアを開けた。

「ケイマ！雪洞・F・ケイマー！！逃げるおつもりですか！」

どよめきと共に金切り声があがる。

重く大きなドアを支えるフットマンの少年が、怯えたように主人の
少女、改め雪洞^{ほんぼり}の顔を見た。

原告席に居た中年男性が、ひび割れた声で怒鳴った。

「あなたの作った機械、篝^{かがり}のせいで、
うちの息子がおかしくなってしまったんだぞ！」

雪洞は少しだけ首をずらして横を見遣る。

男の指差す先では、ほろほろと涙を流す女性に肩を抱かれた少年が
呆けたように口をぽかんと開けて天井を見つめていた。

そうだそうだ！

さっさと慰謝料を支払え！

観客、ではなく傍聴者からも痛烈なヤジが飛ぶ。

古代ギリシャの円形闘技場のような裁判室を、
雪洞はぐるりと見渡した。

そしてくすりと笑って後ろを振り返ると

宣戦布告する武将のごとく高らかに腕をあげて言い放った。

「なんとも言ったら良いわ。あんたたちの魂胆は分かっているのよ」

——おいおいおいおい！

少年が顔を青ざめる。

幸いその声は更に高まる群衆の声にかき消された。

「ニコ、行くよ！」

「は、はい！」

もはや半べそ半笑いと言った顔の少年を一喝すると、
雪洞はざわざわと何かを言い合う傍聴席の前を堂々と歩いて出口に
向かった。

法廷から予定時間外の退場を試みる人間に反応し、出入口に立つ
警備ロボットがガシヤリと槍を交差させる。

しかし雪洞の顔を識別すると、ピピピツという音と共に機械的な礼をして

『ドウゾ』

と道を開けた。

「わかつてるじゃない」

ふふん、と笑って髪をばさりと後ろにやると

凱旋門を抜けて帰国するナポレオンさながら颯爽と金縁のドアを通り抜けた。

「お静かに！被告は速やかに席に御戻り下さい」という裁判長の言葉を待たずして
ばたん、と扉が閉まる。

「お、表は報道陣が居るかもしれないから、裏から出よう」

震える手でボタンを押す少年に促されるままエレベーターに乗り込むと

雪洞はようやくけたたましい喧騒から遮断された。

チーン

という古典的な音がして、
数十メートルほど落下したエレベーターのドアが開いた。

開く扉と同時に雪洞はゆっくりと目を開ける。

目の前に飛び込んでくるのは、美しく広がる25世紀の街並み。
全て白で統一された建物の間を
車輪の無いカラフルな車がヒュンヒュンと飛びまわっている。

街の向こうには真つ青な海があり

その向こうには赤く色づき始めた木々が混ざる森が見える。

体を満たしていく空気も、先ほどと一転して
実に爽やかで柔らかい。

「——何にも無かったかのように、相変わらずそこにいるのね」

街に向かってぼそりと呟くと、

雪洞は建物の裏口から地上に続く長い階段に敷かれた
赤い絨毯にヒールを落とした。

約5時間ぶりの外だった。

——ああ、やっぱり太陽は良い。空は良い。
偽物より本物はずっと良い。

雪洞は両手をあげて思い切り背伸びをすると、大きく息を吸った。
ばきばきと凝り固まった身体が軋む音がする。

胸一杯に膨らんだ空気を一度止め、少しずつ吐き出しながら

「ああー疲れた。やんなっちゃうわ、もう。しょーじきしんどい。」

と唸った。

フットマンの少年ニコラ（Nicolas）が「雪洞様おっさんみたい」と笑う。

仰々しいほどに磨きあげられた建物を背景に

明らかに不釣り合いな少年と少女が並んで歩いている。

「でもとりあえず、これで一通りの裁判は終わったんだ？」

「終わらせたのよ」

雪洞は銀色の手すりに映る強ばった自分の顔を見る。

「まあ、ちょっと強引だったけどね」

同年代は恋に御洒落に、と花盛りを楽しんでいるだろう年齢なのだが自分の顔は会社の経営と謂れのない顧客の苦情に追われる一経営者の苦渋に満ちた

なんとも色気も味気も無いものだった。

人より幼く見られがちの童顔が、さらにちぐはぐに見える。

雪洞はふうつと重いため息をついた。

「雪洞様、すげえかつこよかったぜ！」

一足で雪洞の数段先まで降りると、ニコラが振りを輝かせて言った。

「集まったオヤジ達の青い顔。ふふっ俺、笑いこらえるの必死だった」

「泣きそうな顔してたのは誰よ、ニコ」

雪洞が片方の眉をあげて意地悪そうにニコラの顔を覗き込むと、ニコラはバツが悪そうに顔を赤らめ

「あ、あれはあくびが出たんだ」と目をそらして弁明した。

そんなニコラを見ていたら、久方に顔の筋肉が緩まった。

「ふふ、まあそういうことにしておいてあげるわ。…ありがと、ニコ」

雪洞に微笑みかけられ、少々照れたようにニコラが頬をかく。そしてごまかすように言葉を続けた。

「あー、でも、ダイタイセイの無い精神的平穩の損害のメンセキとバイショウを求める訴訟だから
会社のコンカンに関わる…コトは大変なんですよ?」

「ニコ、誰から聞いたのそんな難しい言葉」

明らかに意味を分かっているじゃないでしょうお前は、と苦笑しながらまたニコラに適当なことを吹き込んだ
張本人の顔を思い浮かべる。

聞かなくてもわかるでしょう？

と言った顔でニコラが首をかしげて雪洞を見た。

案の定だ。

ふんふん、と興味深々に頷くニコラと

可愛がるようないたぶるような、相反して至極どうでもよさそうな
笑みを浮かべて

朗々と雪洞の仕事ぶりを評価する「彼」の姿がありありと浮かぶ。

やれやれと肩をすくめると、雪洞は
さも今思い出しました、という様に

「フランス。フランスはどこなの？」

と辺りを見回した。

実は建物を出た時から、ずっと気になっていた。

遅い。

裁判の終了時刻なら把握しているはずだ。
いつもなら、仕事が終わったら誰よりも真っ先に私を迎えに現れるはずである。

「フランスさんは片づけしてから来るって」

一人百面相をしている雪洞を横目で見ながら、ニコラが言った。

「片づけ？また恵永が皿棚でも倒したの？」

「ううん。雪洞様の車を狙った刺客だって」

雪洞の足が止まった。

余所見をしてつるつるの床に滑ったニコラが「おっと」とよろける。

——また、か。今度は何かしら。

…怪我してないと良いけど。

しばし何かを考えるようにじつと下を向いている雪洞に気付き、
ニコラが訝しげに覗き込む。

「雪洞様？」

が、間もなく雪洞はぱつと顔をあげると
遠くで散歩中のご老人が振り返るほどの大声で叫んだ。

「シカクでもサンカクでもいいわ。

私より優先する価値が、そいつらにあると言っの？

フランス・ド・フィニステール！」

反響する声が消えるにつれ、階段が終わった。

その先に目を向けると、まっすぐ続く道の先に白く長い車が停まっているのが見える。

その傍らで、定規で測ったかのように完璧な角度で頭を下げた燕尾服の青年が佇んでいた。

待ちわびた、「彼」だ。

かすかな風になびく銀色の髪が水面のように光を反射している。

左胸に手を当てたまま、フランスはゆっくりと顔をあげた。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

秋を纏った風が二人の間を通り抜ける。

黒いコートが舞い上がり、中から柔らかな白いワンピースが顔を出す。

銀色の瞳に手を引かれる様に

雪洞はそっと足を早めた。

Prologue (後書き)

このときはまさかこの話が少年誌モードに入るなど知るよしもなく…

review ・ advice 常時募集しております。

ツキミキワミ

23世紀――

それは今よりもっと
科学が世界を浸食する世界。

この時代では、人を人たらしめるものという、極めて非科学的な命題を
科学的に解明しようとする動きが起こり始めていた。

まずは彼らが取り組んだのは、素粒子レベルでの肉体の研究。

しかし科学者たちは、肉体のみでは
極めて雄大な人間の体系を解明できないと知る。

そこで彼らが強い興味を持ったのが

精神である。

精神――それはこれまで、確かに存在が認められながらも
極めて曖昧な解釈のまま、時代に放棄されてきた。

それまでの常識とえば
「精神とは非科学的なもの」

であり、

強いてそれらしく言うなら、肉体を統括する脳の情報の収集と信号の発信という動き、というくらいにして

科学的な説明、定義は未だ確立されていなかった。

一方で、

この世の理へ理解を進めていく科学者たちの注目を集めたのが異次元空間の存在であった。

「新たな世界」という

矛盾するような、なんとも非科学的なものにも

21世紀以降、一層の関心がよせられた。

現在我々の世界は、4次元 我々の肉体が置かれた3次元に時間軸を加えたもので成り立つとされている。

その外にある異次元の存在は21世紀からも示唆されていたが22世紀の終わり、その新たな次元の存在がとある科学者集団によって正式に発表されたのだ。

果たして異次元はどこにあるのか――

脳の中である。

正しく言えば、脳の動きを規定する世界というものが我々の知覚する世界と同時に存在するというのである。

そしてその世界こそ

脳を動かす「エネルギー」

即ち「精神」の存在場所であることが分かった。

精神と称されるそのエネルギーは、どこまでも自由に速く

広範囲に

そして己の意思を持って動き回った。

精神の存在が、初めて科学的に認識された瞬間であった。

科学者たちは、この全く新しいエネルギーの存在に到達し「科学が非科学を凌駕した瞬間」と世界中が歓喜の渦に包まれた。

こうして精神は、証拠が理論を追いこして存在するものとして

23世紀に鎮座する。

世界中の科学者たちが、今度はその発生源について血眼になって探索する一方で

23世紀の初頭、一人の少女が現れた。

世紀の天才と言われる、雪洞・F・ケイマである。ほんぼり

彼女が目をつけたのが、

この脳内に定着し、活性化させるエネルギーの動きそのものである。

彼女は科学者でありながら、類稀なる非科学的な感覚、いわゆる直観を有していた。

彼女はその直観により——もちろん意識の上では様々な裏付け理論を組み立てたのだが
原因は分からずともエネルギーは確かに存在すると分かったのだから
その跡を追うことは可能であると考えた。

そして、

精神の動きを素粒子レベルで写し取ることができれば

それは「異次元における精神乖離になるのではないか」と。

科学者として気負いなのか

はたまた何かよっぱどの理由があるのか

何が彼女をそこまで突き動かしたのかは誰も分からなかったが
まるで何かにとり憑かれたかのように

雪洞は全生命力をかけてその体系化に取り組んだ。

そうしてついに、それまで理論にすぎなかったこの「第三ネットワーク」を

雪洞はたった一人で、現実ものとして完成させる。

このとき、弱冠16歳であった。

写し取った精神の動きを

理論は分からずとも確かに存在する新たな異次元に移す。

その世界を【かがり簞】と名付けると

雪洞は新たな「旅行先」として、人々に「有料で」開放し始めた。

肉体から開放された精神世界で新たな生活を楽しむ

そんな新世紀の高級レジャースポーツは無論一大センセーションを巻き起こし

雪洞は世界の納税者TOP10に入る大企業社長に史上最年少でのし上がったのである。

そうして雪洞は、未だ未完成と称される【簞】の更なる発展とその経営に奮闘する日々を送り始める。

彼女の執事、フランススとともに――。

「フランスス、遅かったわね」

雪洞は腕を組むと、飄々と立っているフランススを見上げた。自分よりずっと青年を見下そうと、懸命に顎をあげる。

「時間通りとおっしゃって下さい」

フランススは淡々と切り返し、車の後部座席を開けた。

数世紀前の新型ポルシェ911カレラをモデルにした真っ白な小型リムジンは

「そもそもスポーツカーをリムジンに摸することが無理なのです」と文句を言うフランススを押し切って、無理やり作らせた雪洞のお気に入りだった。

おまけに現代仕様で、空も飛べれば水にも潜れる。

さすがに光線はでないけれど、車とはなんなのかもはよく分からない代物には違いない。

しかし今の雪洞の関心は、愛車よりフランススの悪びれぬ態度である。

「予定外の時間で出てこられたのはお嬢様です」

「う、まあそうだけど。でもいつも30分前には来てと言ってるじゃない」

——というか、ちつとも悪びれぬその態度がなんか嫌。

一度で良いからその飄々とした態度を壊してみたい。
いつも完全無欠な彼が慌てふためいた姿を、雪洞は見たことが無いのだ。

雪洞がぐずぐずと駄々をこねていると、フランシスがボタンとドアを閉めた。

「あ！なんで閉めるの！？」

「ドアとはそこに入るために開けるものです。お入りにならないのなら閉めるのが妥当でしょう。」

ついでに御乗りにならないのならこの車も車庫に戻して参りましょうか」

フランシスは意地悪く、ニヤリと笑った。

——この…

何か言い返してやりたいが、今回は明らかにこちらが悪い。

「あなた、また変な表情覚えたわね」

ロボットゆえなのか、人に近いゆえなのか
フランシスはまだ少女である主人に対しても容赦が無かった。

いつも口論をしては、負ける。

- いつか絶対、負かしてやるんだから

と数百回目の決心をして

雪洞はしぶしぶ車に乗り込んだ。

続いてニコラは少し離れたところに停まる深緑色の小さな車に向かい、

フランシスは雪洞の乗る反対側のドアを開ける。

それを見た雪洞はきょとんとして

「フランシス、今日はこっちに乗るの？助手席じゃないの？」
と尋ねた。

この時代の車には、自動の運転モードは無論、21世紀より更に発展した防御装置が施されている。

しかし、いきなり道端から射撃されるような事態には対応しきれない。

一方フランシスは、そこらの旧型兵器よりよっぽど戦力になり得る身体能力を有している。

執事に加えボディーガードの役目も果たす彼は、

後を絶たない雪洞の財産を狙った奇襲に備え

いつも助手席に座っていた。

つい先日、遠方からの射撃を直前で察知したフランシスが

すんでのところで運転席に跳び移り、回避させたばかりであった。

「大丈夫です。最悪の場合はここからでも運転席に行けると先日分

かりましたので」

「…ならいいけど」

リムジンの運転席と後部空間は仕切りで隔てられている。
わざわざ一度降りて乗りなおすのだろうか、はたまたそこを突き破るのだろうか。

「そういえばフランスス、ニコに聞いたわよ。」

『片付け』はどうだったの？」

「問題ありません」

刺客に狙われた時点で問題がないわけない。

今度は一体どんな片付け方をしたの、と雪洞はフランススを見る。

爆破、釣り首、四肢切断…

殺生は禁じていたけれども、それでも余りあるほど彼は敵に対して容赦がなかった。

完膚無きまでに、再起不能なまでに叩き潰す。

「何度も来られたら迷惑でしょう。一度で分かせてあげるのが優しさです」

と、どこかの映画を見て覚えてきたらしい台詞を
俳優の様な顔立ちで述べるフランススを見て、雪洞はぶるりと体を震わせた。

「出発してよろしいでしょうか？」

「うん」

「屋敷へ」

合図と同時に、自動で車のエンジンがかかり
「リヨウカイシマシタ、シュツパツ、シマス」
と、車が動き始めた。

その時だった。

どどおっ　と地響きの様な音がして、車が小刻みに揺れた。
「何！？刺客！？」

雪洞が慌ててドアに手をかける。
フランススはピクツと何かに反応する。

「お嬢様お待ちください、出ては駄目です」

バシャバシャバシャッ！！！！

けたたましい音と共に
目が眩むような光が一斉にたかれた。

「ただいま、雪洞・F・ケイマ氏が裁判所から出て参りました！」

マイクを持った女性が、25世紀仕様の巨大なカメラを担いだ男性
たちを引き連れ

車の周りを一斉に取り囲む。

どこから湧いてきたのか大量の記者たちもそれに続いて
半開の窓をこじ開けるように、車内にマイクをねじ入れた。

車内にまで届く稲妻のようなフラッシュの中
記者たちは口ぐちに何かを叫んでいる。

「裁判に決着は着きましたか！？慰謝料は払われるのですか！？」

「家族への謝罪は！」

「やはりシステムに異常があつたことを認めたのですか！？」

慌てて窓に黒いスモークをかけながら、雪洞がちつと舌打ちする。

「刺客よりタチ悪いヤツらが来たわね……」

「変ですね。わざわざ時間を変えて出てきましたのに、こうもあっさり嗅ぎつけられるなんて」

「もう、何そんな悠長に構えてるの！
あ、ちよつと、車壊さないでよ！？」

バーゲンにつめかける主婦たちのように、記者たちは我先にと車に詰め寄る。

人の圧力でミシミシと車が悲鳴を上げる。

しかし突如、ぶわっ と

数名の記者が勢いよく背後に飛ばされた。

フランスがその怪力で、記者ごと車のドアを開けたのだ。

「これは失礼」

フランスは後ろ手でドアを閉めると、カメラに向かって優雅にほほ笑んだ。

ふっ飛ばされた同僚を見て呆然としていた女性記者が、はっと我に返ると再び声をあげる。

「こ、これは、雪洞・F・ケイマ氏の執事ロボット、フランス・ド・フィニステールさんですね。

ケイマ氏の発明した、精神異次元輸送システム【簞 - KAGARI -】の利用により精神破綻者がたということですが

訴訟が起こっていたとのことですが

ケイマ氏は過失を認めたのでしょうか！？」

フランスは女性を一瞥すると、涼しい顔で答えた。

「わが社の解答は、今まで通りでございます。」

【簞】では一切のシステムトラブルも発生しておりません」

「ですが現実的に、精神破綻者がでているのではないですか！」

「現実的に、誤作動の履歴は残っておりません。」

これは検察側の調査によって正式に認められたもの。

それは貴女も、ご存知でしょう？」

フランスに見つめられた女性記者は顔を赤らめ、ぐっと言葉に詰まる。

代わりに隣の男性記者が、街のチンピラのような勢いでまくしたてた。

「それでもあんたらの作った機械が原因で被害が出たことには変わりないだろう！」

責任を放棄するのか!？」

男の眼鏡が冷たく光る。

「フランス、やっぱり私が行くわ」

黒くスモークをかけた窓の向こうから、雪洞が声をかけた。
しかしフランスはそれを手で制すと、なおも言葉を続けた。

「責任の放棄。」

責任の放棄と申しますなら、御話は早い。

そもそも、わが社で提供しておりますのは、精神を肉体から解放し、共存させる新たな世界【簞】へとお連れする『方法』に過ぎません。

もちろん最低限の安全は保障しておりますが

そこから何をするか、何が起こるかということとは全て利用者様の責任にございます」

したたかな、しかし下腹部を押し上げるような強い声が響いた。辺りは一瞬 しん、として一同はフランスを見つめる。

「もしそれすらも、こちらで保障しなければならないというのなら選択は二つ」

フランスは端正な細長い指を二本、瞳の前に掲げた。

「一つは、【簞】内における利用者様の全ての行動を、こちらで監視・統制させて頂きます。

これまで提供してきた『自由』を代償に、全ての責任を負わせて頂きましょう。

そして二つには、【簞】利用の全面停止」

指の間から覗く瞳が、少しつりあがったかと思うと鋭くきらりと光った。

「ですがそれは、全世界に何万と居られます利用者様を納得させられたらの話になります」

細めた瞼から覗く銀色の瞳は
柄から抜かれた日本刀を想わせるほど冷たかった。

——ああ、やはりこれは人では無い
主人を守る

その義務を遂行するただけに存在を許された
ロボット なのだ

女性も男性も、カメラのレンズからそれを見ていた報道陣も
その並々ならぬ迫力にごくり、と唾を飲んだ。

そんな張りつめた空気を弾くように、フランスはぱっと表情を変
えると

一転して柔らかない笑みを報道陣に向けた。

「それでは、詳細は追ってお知らせしますので、今日はこれにて失
礼いたします」

深々と頭を下げると、真っ白な車のドアを開けて優雅に乗り込む。

同時に ガーツ と黒い窓が開き
中から雪洞が顔を出した。

「そついうことだから。じゃね」

にここに手を振る雪洞を隠すように
再び窓が閉じられていく。

魔法にかけられたように呆然と立ち尽くす報道陣たちを地上に残して
真っ白な車と、それを追う小さな深緑色の車は悠然と空中に上がっ
て行く。

くるりと旋回して見上げる人々に影を落とした後
雲一つ無い真っ青な秋晴れの空へと消えて行った。

1 - 0 (後書き)

後ろの車内ではニコラがそんなフランス劇場を涙目（恐怖）で見つめています。

フランススは恐ろしく美しい顔をしていた。

陶器のような白い肌に、滅多に変化しない顔色は
ガラスケースに仕舞われたフランス人形を見る人に髣髴させる。

二人で歩いているとすれ違う女たちのほとんどが振り返った。

そんな時、雪洞は自分より頭一つ分高いフランススの顔を盗み見る
のだが
時折機械的に瞬く睫毛は雪洞の2倍はあるのではと思われて、嫉妬
心を忘れまじまじと見つめてしまふのだった。

フランススはロボットである。

精神の科学的研究発展に伴い

25世紀では人工知能——いわゆるロボットの研究も進んでいた。

精神たらしめるエネルギーの解明が遂げられていない以上、その能力は未だ

人間のそれにはるか及ばないものであったが

家庭用、業務用、軍用、娯楽用と、人間の様々な目的に応じ多くのロボットが作られては、

日夜世界の潤滑な進行に貢献している。

そんな中、天才発明家兼【簞―KAGARI―】社長として多忙を極める雪洞・F・ケイマの執事として、

彼女自身により作られた人型ロボットがフランス・ド・フィニステール（Francis de Finistere）であった。

それは実存するどのロボットより、

極めて人間に近く

考え

笑い

動く

超高性能ロボットであった。

科学的な精神研究者として時代の先端に立つ彼女だからこそ
それほどの人工知能をいち早く開発できたのかもしれない。

実際のところ、どのような技術で、どういう経緯で彼が作られたのかは
誰も知らなかった。

ある日突然、雪洞はフランスを連れて現れたのだ。

人々はただその美しすぎるロボットを見て

・二つの意味で・驚嘆したが

彼女を迎えたのは、その技量への称賛に加え痛烈な批判であった。

人型ロボットの発明は、その開発が進む一方でタブーとされる傾向にあった。

技術とコスト上の問題、また倫理上の問題からである。

雪洞は、この禁忌を犯して、フランスを作った。

「世界の秩序を乱す気か!？」

「お子様のお人形遊びとは違うんだぞ!」

巻き起こる批判の渦の中、雪洞は突き付けられたマイクに向かって
「量産はしないわ」とだけ答えた。

【簞—KAGARI—】を筆頭とし、雪洞は数々の社会活動を行ってきた。

——もちろんそれは止まぬ批判に対する雨除けにすぎなかったのだが
雪洞はフランスを彼女の執事として用いることで
間接的に社会貢献に従事する平和維持型ロボットと位置付けること
でようやく事を収める。

一方で、フランスにはもうひとつ、少し厄介なこともあった。

その外観ゆえに引き起こされる
倫理上外の問題である。

「どちらがご主人か分かりませんわね」

ある時、世界工学発明者という俗にいう『天才』たちが集る会議で、ライバルのアリエル嬢に言われたことがあった。

「まるで気晴らしに散歩にでかけた貴族が
気まぐれに村の平民を引き連れているようですわ」

そついう彼女も、雪洞の後を追うように作った超高性能人型ロボットを引き連れていた。

フランスより一回り小さなその男性型ロボットは、性能の面でも外見の面でもフランスより劣っている。

女の嫉妬であつた。

「そついうあなたのロボットは、もう少し装飾を施した方がいいんじゃない？」

「お、御二人とも落ち着いて。世紀の天才と言われる少女同士が争つては、世界がいくつあつても足りませぬ…」

ばちばちつという音が聞こえそうな火花のぶつかりあいに周囲が戦慄する中

フランスは有変わらず涼しげな顔で雪洞の後ろに立っていた。

雪洞はしばしば、似たような子供じみた嫌がらせを特に女たちから、幾度となく受けることとなった。

しかし

主人より美しい執事――

雪洞にとってそんなことはどうでも良かった。

例え、彼の銀髪が雪洞のひそかに自慢としていた長い髪よりはるかに綺麗な艶を持っていたても

例え、色めかしくも男性的に響く彼の声がしばしば事業の交渉相手を発情させ商談を中断させられても

例え、ひどく冷たい銀色の瞳で痛烈なダメ出しを繰り返す彼の冷淡さに幾度となく心の傷を抉られても

あの日『彼』が消え

『世界』が消え

心を照らす全てが遠ざかったあの瞬間から

フランスと簞だけが

雪洞の生きる、唯一の理由であったからだ。

【簞】

それは彼女にとって

まだ未完成で

不十分で

それでも狂おしいほどに

焦がれる世界だった。

その完成を目指してフランスと歩く道のりは
彼女の願いに辿りつくまでの

旅に他ならないのである。

二人で夢見た

世界を追って

彼が残した

言葉を負って

雪洞の発明した精神異次元輸送システム【箒―KAGARI―】

その運営における不祥事をめぐる裁判から数日が経った。

あの後、システム上の異常は起こっていなかったという調査結果を
検察側も正式に発表し

そして何よりフランスの提示した「二つの条件」が世界中で3D
映像で発信されたてから

雪洞たちをを糾弾する声はぴたりと止んだ。

【箒】の過剰滞在から神経に傷を負ったとされる少年は
和解成立と同時に驚異的な速度で回復し、

現在は学校への復帰を控え、自宅で療養中であると

朝一番のニュース番組で、局名物の女性キャスターが報じていた。

「結局慰謝料目当ての、いちゃもんだったのよ」

フランスの用意したモーニングセットを食べながら

雪洞が言った。

「いちゃもん」

「濡れ衣ってことよ」

「なるほど。」

ジャムは苺になさいますか？マーマレードになさいますか？」

「苺」

赤い小瓶を雪洞に手渡しながら、フランスは頷いた。

「これでようやく、通常の仕事に専念なさることができますね。
それでは本日のスケジュールなのですが、まずは世界ロボット工学
研究者会議の…」

御経のように読み上げられる分単位のスケジュールを聞き流しながら、

雪洞はたつぷりと苺のジャムを乗せたスコーンを、いざ食べんと口
を開ける。

と、その時だった。

「ただいま、新しいニュースが入って参りました」

何やら女性キャスターが神妙な面持ちで言葉を続けると
手渡された紙を見て顔をしかめた。

雪洞は久方に、世界ロボット開発者会議に出席していた。

「ええ、今日の議題はですね

前回に引き続き、障害者支援福祉ロボットの新型発表につきまして

…」

ステージの上に立つ肥満気味の司会者は、
ライトの熱に照らされ汗をしきりに拭っている。

会議と言っても、200人もの「天才」たちの出席するそれは
ホテルのエントランスにありそうな壮麗なシャンデリアの飾られた
コンサートホールのような場所で行われていた。

そのシャンデリアの真下にある席で
雪洞はステージ上で映し出されるロボット模型の3D映像をぼんやりと眺めていた。

【簞】を發明してから約2年。

【KAGARI】を起業してから約一年。

飛ぶ鳥落とす勢いで成長する会社は幸い大きな事故に見舞われることもなくやってきた。

それもひとえに、雪洞の類稀なる頭脳と、時として人間よりはるかに合理的かつ効率的な判断を下すフランスの努力の賜物である。

それがここのところ、どうも調子がおかしい。

雪洞は今朝のキャスターの言葉を思い出していた。

キャスターはどこかの国で戦争でも起きたのか、と言いたくなる様な表情で眉をひそめると
幾分か声を低めて言った。

「ただいま、【簞】の利用者であった数名が都内の病院に搬送されたとの情報が入って参りました。

先日の訴訟と同様、今回も過剰滞在による神経回路の損害が原因とみられています」

雪洞は頬杖を付いて、面倒くさそうにステージを眺める。

「障害を持った人間の手足となるロボット」とやらの顔を見ながら頭の中では白いカプセルに入れられ救急治療室へと運ばれていく男たちの映像が繰り返し流れていた。

「それでは次回までに、新型家事補助ロボットの模型について各々のレポートを…」

真っ白な髪と口ひげを生やした会長が会議の終了を告げるとがやがやと一気に会場が騒がしくなる。

車を用意して参ります、というフランススの声に手で応えたと雪洞はその日配られた電子資料に目を通す。

「また大量な資料を簡単に出しやがって。ええと5、10…うわっ70ページもあるじゃない」

ぶつぶつと文句を言いながらポーチから眼鏡を取り出そうとしていくと、

ふと甘ったるい講師の香りが漂ってきた。

短いスカートから覗く細い足が見える。

顔をあげると、すらりと伸びた身長にショートヘアがよく似合うライバルのアリエル・アンダーザシー（Ariel・Under the sea）であった。

「お久しぶりでございます、雪洞さん」

「…まあ。お久しぶり、アリエル」

くつきりとした二重の瞳に大きな睫毛を瞬かせ
巷で大人気のカリスマモデルでもアリエルは、にっこりと雪洞に微笑みかけた。

「一連のニュース、拝見致しました。

とても大変だったご様子で、私何もお手伝いできなくて心苦しかったですわ」

「お気づかい有難う。そうなのよ、ちょっとね」

雪洞は電子資料をタブレットに保存すると、
鞆にしまった。

「行きましようか」

「ええ」

二人の少女は肩を並べて部屋を出ると、ロビーへと向かう。

世紀の天才少女と言われる二人のツーショットはしばし周囲の注目を集め、

ロボット開発者会議の一つの名物と化していた。

ひそひそと話しながらこちらを指差す人々などまるで気にせず
アリエルはいつものようにゆっくりと、幼なそうな高い声で話し始めた。

「そもそも今回相次いで発生している精神破綻の原因というのは
利用者の過剰滞在ということでしたけれど、
これまでそんなことはありませんでしたのに、何故こうも突然？」

さも心配そうな表情でアリエルは雪洞の顔を覗き込む。

「さあ分からないわ。

何故かこのところ、こちらで規定した時間を超えて
滞在した人たちが出るみたいなの。

先ほど家族と電話で話したのだけれど

今回は、こちらが治療費の一部を負担することで早急に落ち着きそ
うよ」

「…まあ、それでは無事に和解できそうですね、良かったです
わ」

アリエルが胸に手を当ててほっと溜息をつく。

「私、心配しておりましたの。
ニュースを見ましたら、執事さんを矢面に立たせてご自分は出ていらつしやらなかったの。
先日の裁判は上手くいかなかったのでは無いかしらって」

——よく言っわ。

しつかり傍聴席に、関係者を忍び込ませていたくせに。

あの日、広い裁判室の傍聴席で
しきりに電話で何かを報告している不審な男が居たのを雪洞は見逃さなかった。

変装はしているが、それがアリエルの周囲にいつも居るSPである
ことにも気付いていた。

雪洞はにつこりとほほ笑み返すと、アリエルを見上げて言った。

「そうなのよ。あの時は何故か急に報道陣が詰めかけて来たものだから困ってしまったわ。

だって、早めに切り上げたはずなのに、何故かドンピシャのタイミングだったのよ。

まるで誰かに教えられたかのように」

「まあ。それはアンラッキーでしたね。

私もよく報道陣の方々に囲まれて、困りますの」

ふふふ、と少女たちは顔を見合わせて笑いあう。

「そう言えば、いつも貴女の周りを徘徊しているあのSPは今日居ないのね」

「まあ、どの方のことかしら。

私を守ってくださるSPの方々はたくさんいるので、分かりませんわ」

二人は警備ロボットの合図に合わせ、建物のエントランスを出た。

「これからは、私でよければいつでもお手伝いいたしますので困ったときには是非読んで下さいな」

すれ違う男たちが思わず見とれるほど可愛い笑顔で
アリエルが雪洞に微笑む。

「それは有難いわね。

でも悪いわ、そちらも会社の経営や芸能活動で忙しいでしょうに」

「まあ、他でも無い雪洞様のためですもの。
私たち、学生時代からの付き合いじゃなくって？」

「どうです、是非一緒に簞の経営を…」

そんな雪洞の姿を見つけ、たたたと小さな少女が走ってきた。
そして思い切り飛び上がると、がばりと抱きついた。

「ぼんぼりたま！お疲れ様！」

雪洞はわつと声をあげてそれを抱きとめる。

抱きついてきたのは、幼女型ロボットのシャナ（Shana）であった。

ほつと顔をほころばせる。

「シャナ！」

シャナはフランスの妹分にあたる、超高性能人工知能人型ロボットだ。

知能指数は兄より格段に劣るが、彼女の役目である主人の“癒し”

効果は十分に果たしてくれている、セラピー用ロボットであった。

大きなリボンを頭につけ、白に近いブロンドの髪が丁寧に巻かれている。

やや垂れ下がった目尻が可愛らしく、フランスの妹にふさわしいフランス人形のような風貌であった。

「シャナ、ごめんね仕事が長引いて。良い子にしてた?」

「んふふー」

答える代わりにかりと笑ってシャナは雪洞を見上げた。

ところどころ泥のついた洋服が、彼女のやんちゃぶりを物語っている。

——やれやれ。

また何かいたずらしたわね。

まあ、何をしたって良いわ。

可愛いから許す。

雪洞はニヒルに笑う。

「あら、この子が例の?」

アリエルがシャナを見て目を丸くする。

「ええ、そうなの。
去年、孤独死撲滅連盟から例外的に許可をつけて作った
フランシスの妹よ。
人間で言えば3歳くらいかしら」

「…これはこれは、可愛いお嬢さんね」

アリエルはにつこりと笑うと、視線を合わせるようにしゃがみこんで
手を差し出した。

「初めまして。雪洞さんのお友達の、アリエルと言います」

シヤナはぎゅっと雪洞のスカートを掴むと、隠れるように顔をうつ
めて

横目でアリエルを見た。

「まあ、どうしたのシヤナ」

雪洞は驚いてシヤナを見る。

「…」

「駄目よ、御客様にはちゃんと挨拶なさっていつも言ってるでしょう。」

ごめんさいね、アリエル。

いつもはこんなに失礼な子じゃ無いのだけど。

子供ってほら、素直だから」

アリエルの口角がぴくつとひきつる。

何がおっしゃりたいの？と目が語る。

言葉通りよ、と雪洞が勝ち誇ったような顔で笑う。

「…急に有名人が現れたものだから、少しびっくりさせてしまったのかもしれないね。」

子供は教育者に似ると、申しますから。」

「悪かったわね」

「とんでもない」

二人の間に火花が散る。

「それではフランススが待っているので失礼するわ」

フランスス、という言葉にアリエルはまたもや顔をひきつらせた。

「おたくのセバスチャンによろしく」

ふふん、と鼻で笑うと、雪洞はシャナの手を引いて建物の裏手にある関係者駐車場へと向かって行った。

「シャナ、どうしちゃったの？さっき」

「あのお姉さん、怖い」

シャナはまた雪洞のスカートを再びぎゅっと掴んだ。それをきょとんと見ると、雪洞は声をあげて笑う。

「あはははは！そうかそうか、やっぱり分かるか。さすがロボットは敏感ねえ。」

「そうよ、あの人は危険だからね」

「キケン？」

「きけん。気をつけなさいってことよ」

そう話しているうちに、フランススが車を引き連れて現れた。

「お待ちせしました」

手慣れた動作で車のドアを開ける。

雪洞がそれに合わせて乗り込むと、
シャナも続いてよいしょと座席に手をかける。

と、ひょいとシャナの体が宙に浮いた。

「お前は向こうだ」

シャナの背中をつまみあげたフランススは
その後ろに停まる深緑色の車に向けて
ポイツと投げてしまった。

遅れて着いたその車から出てきたニコラが
慌ててシャナを受け止める。

「あわわ、フランスさん危ないって」

「なんで、兄さまのバカ！

シヤナもぼんぼりたんと同じ車に乗る、いやあ！」

そんな抗議をまるで介せず、といったように
フランスは車に乗り込みドアを閉めた。

「行ってくれ」

「リョウカイ、ウンテン、サイカイシマス」

わわわわん、と電気モーター音が鳴る。

雪洞はそれでも何か言いながら追いかけてくるシヤナに手を振りながら

フランスに言った。

「乗せてあげればよかったのに」

「シヤナを乗せたら何をされるかわかりません。

先日あの怪力で特注のバスタブを破壊されたのをお忘れですか！

この車はメンテナンス代も馬鹿にならないのですよ」

日々ケイマ家の家事や財政管理に追われるフランススが悲壮な声をあげる。

「はいはい、分かったわ。優秀な執事を持って本当にた・す・か・る」

ひらひらと片手を振ると、雪洞は窓を開けて外の空気を吸い込んだ。

「ヒコウモード、ユレニゴチュウイクダサイ」

車がゆっくりと高度を上げ、空中道路を滑走し始める。

「さっきアリエルに会ったわ」

「アリエル様に。お久しぶりですね」

「やっぱり、この間報道陣に情報を流したのは彼女だったみたいよ」

「やはりそうでしたか」

気付いてたの？と雪洞がフランススを見る。

「…まあ、いいわ。今日はシャナが仇を取ってくれたから」

窓から地上を見ると、除々に小さくなっていく街並みの中でようやく諦めたシャナがニコラと車に乗りこんで離陸するところだった。

雪洞はふつと笑った。

「シャナが。アリエル様に」

「そうなの。随分悔しそうな顔してたわ、実はね……」

と雪洞は一連の話をフランスに話し始めた。

「アリエル様、車のご用意ができました」

アリエルの執事ロボットであるセバスチャンが近づき、冷えて参りましたのでこちらを、とカーディガンを渡す。

アリエルは黙ってそれを受け取ると、

小さくなっていく車を憎々しげに見上げながら

「…妹、ね」

と呟いた。

「仕返しと言えば」

スケジュール帳をめくりながらフランスが言った。

「先日裁判所の前で仕掛けてきた刺客ですが、身元が判明しました」

「そう」

雪洞はパノラマの様にゆっくりと流れる景色を眺めて呟いた。

「数ヶ月前に破産した小規模会社の元経営者と会社員数名、
企業を立て直す資金を手に入れないか、という話を
どこぞやの大企業から持ち込まれたとのこと」

ふうん、と興味なさそうに雪洞は答えた。

「今月で30人目だっけ？」

「正しくは36人目、団体数で言えば11個目です。

生憎、その大元の企業については確認はできておりません。
申し訳ございませんが、今しばらくお待ちください」

「別にいい……。でも誰なんだろう、思いつく人いる？」

「はい」

「言ってみて」

「全部…で御座いますか」

「全部」

フランスは顔をあげると、しばし静止して記憶を手繰り寄せた。

「…アルファベット順でよろしいですか？」

「…いや、もういい」

雪洞は手を額に当て、ため息をついた。

いつの時代も、権力に敵はつきものだ。

雪洞の経営する会社は彼女が一代で築き上げたばかりの脆弱なものだ。

その上雪洞はまだ18という、小娘となめられて仕方ない歳でもある。

自分の敵を作りやすい言動も相まって、

自分に敵が多いことは彼女自身重々承知していた。

起業を決意してから予想はしていたことだったけれども、

さすがに毎日他人から死を望まれる生活にはいい加減うんざりする。

「はあ」

思わず投げやりなため息をついた主人を見て、フランスはぱちくりと目を瞬かせた。

「お嬢様、御安心を。お嬢様のお命は私が御守り致します」

珍しくフランスが優しい言葉をかけてきた。
驚いて飲んでいたホットココアが口からこぼれそうになるのを慌ててこらえる。

「フランス…」

「お嬢様は私達にとってとても大切な方なのですから」

——何事かしら、槍でも降るんじゃない…

あ、酷使しすぎてどこかショートしたかな。

なんて心の声とは裏腹に、思わず涙腺が緩む。

「ありがとう」

「お嬢様が居らっしゃらなくなれば、私とシヤナは引き離され、データを初期化、全ての感情回路を切断され、どこかの屋敷でこき使われることでしょう。」

ニコラは路等に迷いホームレスに逆戻りでしょう」

「…」

砂浜の波が引くように雪洞の感動が薄れていく。

「こんな主人に仕えたばかりに…。あまりに不憫です」

今度はフランススが涙ぐむ真似をした。

雪洞の表情から学習したらしい。

「ちょっとねー！」

「お嬢様。どうせ亡くなるのでしたら、御子息ができてからにして下さい」

フランススが雪洞の手を取り切実な眼を装って訴えた。

——イラッとする…しかしここは抑えよう。

雪洞はフランススの方に向き直ると

「へえー。じゃあフランスス私に夫を探してきてくれるの？」
と詰め寄った。

冷静を装っているものの眉はつり上がっている。

「いえ。それは無理というものです」

主人の様子など気にも留めずに執事はサラッと答えた。

「じゃあどうやって子孫を残すの？」

怒りを増した雪洞の語尾が震える。

「別に男は必要ありません。どうしても御自分のDNAを残したいというのであれば精子バンクという手があります」

「…私に、産めと」

予想外の解答に雪洞は啞然として口をあんどり開けた。

思わずマグカップを落としかけ、フランシスは「おっと」とそれを支える。

「代理母を用意しましょうか」

——夫は無理でも代理母は用意できるのか。

「他にいくらでも方法があります。養子などはいかがですか」

「それは手っ取り早くていいわね」

——嫌味を言いたくなってきた。

「全くです。お嬢様の面倒な性格を受け継ぐ可能性がないだけに寧ろよろしいかと」

「どういう意味よ」

雪洞の顔色など気にもせず、フランシスはつらつらと言葉を続ける。

「ニコラなどはどうでしょう？」

お嬢様の息子としては少々歳が行き過ぎていますが、あれは貧民街から救われた恩義を常に感じておりますから裏切る心配が無いですし、数少ないお嬢様臍元ですよ。

まあ、頭が悪いのが玉に瑕ですが」

フランスは端正な顔立ちをわずかにゆがめると、腕を組んで考え始めた。

珍しく真剣な表情だ。

全く持つて皮肉極まりない。

「…考えておくわ」

——心配されてるのかされてないのか。

そもそのプログラミングを間違えたな。

いや、教育の仕方が悪かったかしら。

かすかな期待がもろくも崩れ去るのもいつものことである。

そんなことを考えながら雪洞は再び窓の外へと視線を戻した。

爽やかな空気を見にまといながら宙を進んでいた車が
オレンジ色の花々の横を通り過ぎる。

と、風とともにふわりと甘い香りが車内に香ってきた。

せわしなくスケジュール帳に何かかきこんでいるフランスの隣で
雪洞はすっかり空になったホットココアのコップをくわえたまま

「キンモクセイ…」

と呟いた。

「花言葉は、『真実』『初恋』…」

何かを懐かしむように、言葉をこぼす。

フランシスはそんな雪洞の横顔をちらりと見た。

しかし、哀愁とも憧憬とも取れぬ表情を『分析不可能』と認識すると手もとの手帳に再び目を落とした。

1 - 3 (後書き)

二人の後ろではニコラとシャナが助手席をめぐって喧嘩中。

市街地を囲む海を越え、更に一つ小さな山を越えると
中性のヨーロッパを想わせる長閑な田園地帯が現れる。

その中に古びた洋館がただ一つ、悠然とそびえ建っていた。
黒ずんだレンガがその歴史を物語っている。

それこそが雪洞・F・ケイマ邸だった。

近隣―と行っても一番近い家でさえ屋敷から徒歩10分ほどかかる
のだが―の人々は、

かの有名な雪洞の邸宅の名にふさわしいほどの大豪邸を指差しては

『実は地下に遺跡が眠っている』とか

『家中にからくりが張り巡らされている』とか

『地球の危機が来ると変形してロボットになる』とか

思い思いの噂話をして楽しんでいた。

そんな近所の奥様方のかっこうのネタになっているとはつゆ知らず
壮麗な屋敷の主人を乗せた真っ白な車が、バロック調の壮麗な庭園
にゆっくりと降り立った。

車が止まったのを確認すると、フランススがドアを開ける。

庭で風に揺られる花々もびっくりの、しなやかで無駄の無い動きだ。

促されるままに立ち上がった雪洞は、差し込む昼間の太陽に目を細
めた。

車に車庫へと戻るよう指示を出したフランススが、
雪洞に声をかける。

「お疲れ様でございました」

この日、雪洞は朝から例の被害者家族らとの
示談に向けた非公式な会議に出席していた。

「本日は御同行できず申し訳ありませんでした。
お話は滞りなく進みましたか？」

「うん、和解は正式に成立したわ。
でも思ったより、慰謝料を取られた。
向こうがなかなか腕の良い弁護人を抱えていたの。」

「詳しくは後で話すわ、今は少し何も考えないで散歩したい」

かしこまりました、と頭を下げるフランススに先立って
雪洞はゆっくりと庭園を歩いていく。

まだ昼前と言うのに、少し肌寒くなった秋の空気を吸い込みながら
雪洞は綺麗に整えられた花壇を眺めていた。

ふと、その中でひっそりと咲く
秋桜が目に入った。

「お前、今年も咲いたの」

雪洞はしゃがみこむと、そっとピンク色の花弁に触れた。

疲労のせいかぼんやりとした視界に

いつかの映像が映し出される。

—— ああ、あの日もちょうど、こんな晴れた日だったな。

真っ白な道をいつも二人で歩いた。

あの人は歩くのが少し遅くて
私は振り返ってばかり居た

あの人は花壇に咲く花を見るのが好きだった。
そして、咲いたばかりの秋桜を見つけると
囁くように言ったの——

「ここにも居た…私の雪洞。

儚くも、強い花」

「お嬢様」

フランススの声で雪洞ははっと顔をあげた。

「呆けておられましたか、大丈夫ですか？」

「ええ…少し、花を見ていたの」

フランススは雪洞の手元にある秋桜に目をやった。

「コスモス、ですか」

「うん」

「菊科の一年草でメキシコ原産。観賞用として花壇に栽植するのに好まれ、現在は品種改良により20種も色がございますね。」

別名アキザクラ、秋の季語として用いられ、花言葉は『少女の純真』『真心』」

「…」

「しかし、お嬢様に似ていらっしやいますね」

「え？」

思わずどくんと鼓動がする。

「ご覧になってください」

フランスは秋桜の葉を一枚手に取った。
葉の上には青虫が乗っている。

今日の雪洞は、桜色の髪に若草色のピンをさしていた。

- - - 捻り潰したるか

雪洞はふてくされた様にスタスタと歩き始めた。

「軽食をお持ちしましょうか？」

何食わぬ顔で微笑みかけるフランスを横目で見ながら、

「いや、いい。それより早く恵永の料理が食べたい」

とぶっきらぼうに答える。

「では早急に恵永^{えなが}に料理を作らせましょう。
何をお召し上がりになりますか？」

「何でもいいから美味しいもの」

「ではそのように伝えましょう」

フランスは胸元から携帯電話を取り出すと、『屋敷へ』と告げた。
しばしクラシック音楽が流れた後、空中に三次元化された屋敷内の

映像が現れる。

しかし、しーんとして何も聞こえない。

「故障か？」とフランススが顔を近づけたときだった。

「ガッシャーン……！」

辺りに不快な音が響き渡った。

「またか……」

ちっという舌打ちとともにフランススが呟く。

多分、というより確実に犯人は恵永だろう。

——今度は何を割ったのかしら。何にせよ、今月はこれで三回目ね。片付けに時間がかかりそうだ、少しゆっくり行つてやろう。

正門から屋敷まで5分ほどの道のりを歩きながら、フランススの隣で雪洞が苦笑する。

何か騒ぎながらがちゃがちゃと陶器を片付ける音がして
今度は男の映像が現れた。

いかにも人のよさそうな顔立ちの東洋系の男である。

「あつあの、お呼びでしょうか」

「…総料理長の恵永、お嬢様がお帰りだ。お食事を用意してくれ」

フランスがいかにも苛立たしげに言った。
つられて恵永の顔も恐怖でひきつっていく。
いつもの光景だ、見なくても分かる。

「は、は、はい。何を作ればよろしいでしょうか」

「とにかく美味しいもの！」

すかさず雪洞が答える。

「あ、お嬢。わかりました！」

雪洞の顔を見た恵永の顔がぱつと安堵で輝く。

しかし、それもつかの間

「…にしても恵永。今度は何を壊した!？」

主人の肩をぐいとどけてフランススが再び顔を出した。

——こいつ、仮にも主人を。

「皿を…」

「どの…!」

お前は先日、ヴェネツィアから取り寄せたガラス皿を壊したばかり
だろう、と思わずフランススが身を乗り出すと、

「片付けは後でいいから、食事の用意をお願いね！」

とだけ言っつて雪洞は回線を切ってしまった。

「お嬢様!!」

「ふ、あははは」

血相を変えて怒るフランスを見ていた雪洞が、腹を押さえて笑いだした。

フランスは不思議そうに雪洞を見る。

「だって、銃器を持った大の男たちに襲われても微塵も動じないあんたが、こんなことでこんなに怒るなんて…」

その長閑さがなんだか可笑しくて、雪洞は久しぶりに声をあげて笑った。

「お嬢様…笑いごとではありませんせぬ」

「まあ、今に始まったことじゃないでしょう」

雪洞は目尻の涙をぬぐって言った。

たかが数十万の皿の一枚や二枚。

それよりも今、彼の料理が食べたいのだ。

そしてなにより、ご飯を作って待ってくれる人が居る。帰りを待ってくれる人がいる。

それが嬉しいのだ。

やっと手に入れた
大切な「家族」。

少しだけ

今だけはここで羽を休めても、良いよね――

まだ何か言いたげなフランスが言葉を探していると
「おかえりなさい！」
と、シャナとニコラが屋敷から走ってくる音が聞こえた。

「おいしーい!!」

20畳はあるかと思われる広い食卓のこれまた一際大きなテーブルに色とりどりの食材で彩られた料理が並べられていく。

ホウレン草のキッシュに甘く煮詰めたオニオンのスープ、フレッシュハーブを練り込んだバケットに鶏肉と8種の野菜を使った恵永特性ブルー・バスケーズ…

雪洞は歓声をあげ、一面に広げられた料理を次々と口に運んでいた。

「やっぱりこの味は料理ロボットじゃ出せないわ。」

これはどこの料理？恵永、またレパートリーを増やしたのね？」

たまらん、と言った顔で雪洞が思わずフォークを振り回した。

仮にも『お嬢様』としてはしたなすぎるその腕を黙ってフランスが掴むと、そっとテーブルに落ち着かせる。

「お誉めにあずかり光栄です、お嬢。西の方にある国の地方料理でして…」

と、厨房から白いタオルで手を拭きながらコックが出てきた。黒髪を後ろで束ねた長身の男である。

「私は田舎料理の方が好きなの。よくわかってるわね」

満足そうに雪洞が頷くと、

バタバタと遅れてニコラとシャナが部屋に入ってきた。

「うわあ！おいしそー」

「シャナもご飯するー！」

どやどやと席に着くと、合掌してから争う様に皿にかぶりつく。

普通従者は主人と共に食事をとらないのだろうか

「こんな広いテーブルで一人ぼつねんと食べるっていつの？」

との一声により、ケイマ家ではこれが通例の光景となっていた。

「恵永さん、天才！」

パン屑を頬につけたニコラが言った。

「そ、そうかな…へへへ、いやでも、まだまだレシピが足りなくてね。」

それでお嬢、また新たに食材を取り寄せたいんですが、これがまた高価で…」

「いいわよ。お金ならいくらでもあるから」

「へへへ、いつもすいません」

人より下がった眉をさらに下げながら、恵永が会釈する。

もうすぐ三十路に差し掛かるこの男こそが
美食家の雪洞が厳選に厳選を重ねて雇ったケイマ邸の総料理長であった。

恵永が屋敷に来たのは今から二年ほど前のことだ。

「世界一大きなレストランで、世界中の料理を出すことが夢なんです！」

数々の名立たる有名料理家たちが集まる試験会場で

大して目立った履歴も無く、今田舎から出てきましたと言わんばかりの風貌の男が

審査席に向かつて頬を紅潮させながら訴えた。

「お金がなくて旅行に行けない人が、海の方この料理を食べられる店にしたいんです！」

突如声を張り上げた男を見て、会場内からくすくすと笑いが起こる。

雪洞は黙って恵永の作った料理を口にすると、当時気に入っていた黒ぶちの眼鏡をくいとあげた。

そして

「あとは帰して良いわ」

と、まだ大量に残っていた料理人たちの履歴書を執事に投げて席を立った。

会場内がざわざわと困惑の空気に包まれていくなか
恵永の背中を冷や汗がつたる。

——どうしよう、怒らせてしまった。
もはやこれまでか…

と、恵永が諦めたときだった。

雪洞は半身だけ振り返って恵永を見ると

「夢を持つ男は嫌いじゃないわ」と言った。

いつものようにニヤリと笑って――

「お嬢様の我儘に応えるのは大変ですよ。辞退するなら今のうちです」

「こらそこ!」

ぶんぶんと怒りながら審査会場出ていく少女と、それを追う美しい執事をただ呆然と見つめる。

その日から、恵永は見事ケイマ邸の総料理長へと就任したのだった。

あの時のご恩は一生忘れません、と涙ぐむ恵永の隣で、雪洞が次々と料理をたいらげていく。

「いやあ、お嬢の食べっぷりを見ると、作りが甲斐があります」

「だって美味しいんだもの」

雪洞が答えた。

「しかしお嬢様、こちらが残っておりますが」

「うつ…」

フランスの指差した先にあるピーマンを見て、雪洞は思わず手を止めて顔を歪ませる。

「だから、き…嫌いなのよ」

「子供ですか」

「うるさいわね！嫌いなものの一つや二つ、誰にだってあるでしょう」

冷やかな視線を送るフランスに向かって雪洞が顔を赤らめる。
すると、隣で特性エナジードリンクをごくごく飲んでいたシャナが言った。

「シャナのことは好きー？」

雪洞はにっこりと笑って

「好きよ」と答えた。

「そりゃあピーマンに比べたらなんだって好きでしょう」

空いた皿を片づけながらフランススがぼそりと呟いた。

思わずぴきつと顔にすじが入ると、雪洞は

「あんたは嫌い！」

と、ぷいつと顔をそむけてしまった。

「キライキラーイ！兄さまキラーイ！」

きやつきやとシヤナが声をあげて笑う。

ニコラも笑い、恵永も口元を隠して笑った。

フランシスは二、三度目を瞬かせると

「嫌われてしまいました」

と、雪洞を指差してニコラを見た。

「駄目だよフィニステールさん、雪洞さんはガラスのハートの10代なんだから」

「誰がガラスのハートよ、どっから仕入れてきたのよその死語は」

「お嬢様の場合、例えるならガラスというより青銅器でしょう」

「いい加減にしないでフランシス！」

はしやぐ顔も、声も、いたいけな少女そのままである。

——日夜大の大人達と肩を並べて

あんなに勇敢に戦っている人とは思えないな…

ニコラはスプーンを加えながら、そつと雪洞を見つめた。

そんな一同の様子を窓辺に影を落とす大きな栗の木にとまる
一羽の小鳥が見つめていた。

くるっくるつと首をかしげると
時折ちちちつと可愛らしく鳴き声をあげる。

その足元には、小型の真っ黒なカメラが括りつけられていた。

ジーッ と機械音がする。

ちちちつ

ジーッ

ちちちつ
…

と、小鳥は部屋からふと空に視線を移した。
真っ青な空を浸食するように、灰色な雲がもくもくと迫っている。

動物の直観で何かを感じたのか
鳥は翼を広げてばさばさつと羽ばたかせると、
空高く飛び立って行ってしまった。

こぼこぼこぼ…とポットが沸く音がする。

近頃の雪洞は様々な紅茶にはまりだしていた。

今日はかつてのドイツ地方から取り寄せたカモミールティーだ。

部屋中に、甘い香りが漂う。

「ふう、落ち着くなあ。ね、やっぱり蜂蜜の味がするでしょ？これ」

「えー、そうかなあ」

部屋の外では、ぱらぱらと雨が降り始めていた。
窓に顔をくつつけてシヤナが空を見ている。

「さっきまで晴れてたのにね」

真っ白なカップを手元で回しながら、雪洞もふと外を見た。

ぱらぱら…

ぱらぱら…

ざああああ…

そんな平和なケイマ邸を取り囲むように
雨脚は段々と強まって行った。

一方で優雅に食後の紅茶を注ぎながら、フランススが口を開いた。

「時にお嬢様、被害者家族の方々とはどのようなお話をなさったので？」

雪洞の手が止まる。

「もう。休憩中ぐらい仕事の話はやめてよ」

「申し訳ございません。」

ですが、最も合理的かつ効率的にお仕事が進むような補助をプログラムしましたのはお嬢様でございます」

フランススはポットを置くと胸を張り、紅茶にも負けない甘い笑顔を浮かべる。

「あーもう、すぐそれね。そろそろ本気で止めるわよ？」

「あなたごときに止められる私ではありません」

雪洞は肩をすくめると、諦めたようにカップを置いた。

「それもそうね」

「向こうの言い分はね、今回発生した精神破綻者7名の発病原因は
篝のセキユリティミスにあるって言うの」

先ほどまでとは打って変わって、雪洞が天才発明家兼若手社長の顔
つきになって話はじめた。

「ねえねえ、篝って実際どういう仕組みなの？」

ニコラが恵永の裾をつかんで聞いた。

「俺、この屋敷に来て1年たつけど詳しく聞いたことはないんだよ
ね。」

「それはね、ええっと。篝というのは自分の神経回路を流れる電流
をデータ化して…」

恵永がうーんとうなる。

助けを求めてフランスを見た。

「あれほど繰り返し繰り返し100回以上も説明してきたのに、恵
永の頭はレシピ以外の知識を入れる要領は無いようだね。」

言葉とは裏腹にとびきりさわやかな笑顔が、怖い。

ひいっと恵永が身を強張らせる。

「一般人には理解できなくて当然よ、恵永」

くすりと笑って雪洞が助け船を出した。

「そうね、簡単に言うとな。」

篝はこの世界と別の、新たな世界のことよ。」

ふんふんと恵永が頷きニコラは首をかしげる。

「なんとなくわかるけど、どこにあるの？それは」

「この世界はいくつもの層が重なりあつてできているの。
死後の世界、なんてよく聞くでしょう。

人間は体という入れ物に魂を入れて動いているの。

篝は、その魂の動きを電子的にコピーして、一つの世界で共存させるのよ」

ニコラはふーんと言うと腕を頭の後ろで組んだ。
あまり深く追求しない性格の様だ。

「要は、別の世界で第二の人生を送れる道具なの」

「にやるほど」

ニコラは納得したように頷いた。

「つまり『夢』のような世界なんだね」

「そう、『夢』のような『世界』なの」

「でもそんなに簡単に、タマシイって抜き出せるものなの？」

「正しくは取り出すのではなく、写しとるのです」
フランシスが言う。

「もちろんリスクはあるわ。人の精神が体から分離して、平均3日で影響が始める。

もちろん篤では、そんなことが起こらないように20時間以上の連続滞在を禁止しているけどね。

やはり肉体を一時仮死状態にするわけだから、自然なことではないの。

自然じゃないということは、何らかの不具合が生じて当然ということ」

雪洞は頬ずえをついてしばし瞳を伏せた。

「…この世の理から外れたものは、かならず壊れるようになっていくのよ」

雪洞が何を言っているのかよくわからなかったが、その仕草が何故か妙に大人っぽくて、

ニコラは何だか見てはいけないものを見た気がした。

慌てて話をずらそうと話題を探していると、突如シャナが

「ぼんぼりさんは、良いことしてるんでしょ!？」

と声をあげた。

「え？」

雪洞がきょとんとシャナを見る。

「かがりは、みんなが楽しい世界！みんなが喜ぶ世界！」

「ま、まあ……」

「そうですよお嬢！」

恵永も加担する。

「簞のモットーは、『あの日の幸せを、再び』、ですよね！」

『幼き頃、誰もが一つ二つの夢を持っていた、なりたい自分を描いていた。それを宝物として確かに持っていた。』

時が経つにつれて、現実が過ぎ去っていくにつれて、この世界はそれを叶えてくれないと知る。

そして自分はそれを叶える力が無かったのだと、肉体の限界の前に諦めるしかなかった。

だけど違う、精神は無限、誰もがまだ心には確かな願いを持ち続けている。

心の世界なら、人はどこまでも夢を見続けることができる――そう、幸せだったあの頃のように……』」

恵永がうつつと咽び泣き始めた。

「私は、私は初めてこれを聞いたときお嬢はなんと素晴らしい理念を、と感動して、感動して……うつつ」

「ちょっと恵永さん、何泣いてるの？」

ニコラが目丸くする。

フランススが手を叩いた。

「おお、わが社のコンセプトをよく覚えましたね恵永。泣き落としまでつけて、客受けはばっちりですよ」

フランススは心からの賞賛を送っているようだ。

「そうです、簞は皆様が現実で諦めた夢を再び叶える場なのです」

「なんかすげえなあ、さすが雪洞様」

そんな様子を見ながら雪洞は「ははは」と笑った。

少し困ったように――

「誰もが、幸せに…夢を…」

と呟いた。

「…参ったわねえ、シャナ？」

「まいったの？ぼんぼりたま、まいったの？どこか痛いの？」

「本当参りましたね」

フランススが代わりに答えた。

「こちらは皆様の『現実逃避』をお手伝いしていますのに、あろう

ことが簞の顧客だと名乗る数名の男たちが

『簞の利用によって家族に精神異常が起こった』などと高額な慰謝料を請求してきたわけですから。
呆れて物も言えません」

「現実逃避って、フランススさん」

ニコラが苦笑する。

「で、でもお嬢の作った機械ですから、そう簡単に間違いが起こるわけではないですよ？」

「もちろん常に過剰滞在が無いように監視アバターでチェックしてあったわ。

よつぼどのハッカーかウイルスが無い限り、そのシステムに異常は来されないはずなのよ。

：まあ、証言上はそれが起こったということだけど。
私のセキュリティソフトを越えるような、何かがね」

「ふんふん」

明らかによく分かっていない顔付きでニコラが、いっちょ前に相槌を打つ。

「ぼんぼりたまより頭良い人なんているのお？」

フォークを握りしめたシャナが苺を挿そうと身を乗り出して言った。

「世界は広いのよ、シャナ」

「ふーん」

淵まで転がった母が皿から落ちると、赤い染みがじわあっとクロスに広がって行く。
わあっとシャナが声をあげた。

「彼らの滞在時間は？」

フランスが真剣な顔付きで、手を顎に当てている。

「1週間以内が3名、残りは約10日」

「…集団発生というのが気になりますね」

「そうなのよ」

雪洞は髪をかきあげて言った。

気持ちを落ち着かせるときの癖なのだ。

「黒幕がいるでしょうね。」

恐らく簀の長期滞在による精神異常は本当に起こった。

だけど、それはあくまで能動的なものよ、自然発生的なものではないわ。

何かしらの手段で監視をかくぐって、自ら、または他者によって強制的に滞在させられたんでしょう。

今回の訴訟者なんて金で雇われた一般人に過ぎないわ。
いくら積まれたのか知らないけど…家族を売ったのよ」

「なるほど」

フランススは苺をつまみ上げ、クロスを拭いた。

「今回はなんとか、最低限の慰謝料に収めたわ。本当はびた一文払いたくなかったけど。」

その代わり、関係者の篝居住権を永久剥奪してやったの。だから、篝依存者による慰謝料目的の真似事は牽制できたと思うわ。もちろんもうこんな馬鹿な真似は私の篝でさせないつもりだけど、それでもまだまだ、似たような騒ぎが続くかもしれないわね。大元を早急に締め上げない限り……」

もはや会話についていけないニコラが目を白黒させている。

「分かりました」

フランススは手についた苺の果汁をぺろりと舐め、にやりと笑った。

「対処、できそう？」

「ええ、お任せください。」

いかなる時もあなたの剣となり、盾となれるようプログラムされています」

そしてポケットから取り出した小瓶の液を数滴たらし、魔法のようにクロスから赤い染みが消え去ってしまった。

シヤナが顔を輝かせる。

「兄さま、すごい！」

「見事なものですねえ」

恵永も感嘆する。

雪洞の顔にも、ようやく不敵な笑みが戻った。

「そうよね。私の執事だもの」

デザートのをシャナの前に置き直し、フランスは付け加えた。

「私の計算で行きますと、そろそろ第二波が来るころでございます」

その言葉を待っていたかのように
コンコンコンコンッ

と、突如ドアを叩く音が部屋に響いた。

1 - 6 (後書き)

ツキミ『…シャナが莓を食べるって、ロボットなのにどつやって消化するの?』

キワミ『ΣΣそこ!?!?』

review ・ advice 常時募集しております。

ツキミキワミ

「お休み中失礼します!」

ニコラが食卓の大きなドアを開けると、メイドのシャーロット（Charlotte）が息を切らせ立っていた。

青いショートヘアが深緑色のメイド服によく映える、活発そうな女性である。

「やあシャーロット、どうしたの？そんなに慌てて」

片手をあげるニコラには目もくれず、シャーロットは一礼してすぐさま口を開いた。

「大変でございます、お嬢様」

「もう、シャーロットまで。今度は何の騒ぎ？」

ちえつ無視かよ!と呟くニコラを「空気読みなさい!」と言わんばかりに一睨みすると

シャーロットは広い廊下の先を指差した。

「箒で騒ぎが…」

「騒ぎ。また都市改造計画に反対するデモか何か？」

それなら放っておいて良いわよ、と雪洞が手をふる。

「いえ、先日の騒ぎとは違って、変なのです」

真剣な顔のシャーロットを見ながら、ニコラが恵永に耳打ちする。

「トシケーカクのデモなんかあったの？まるで現実世界みたいだね」

「簞の原則は自由な生活だからね。人々が好きなように街を作ったり、改造したりできるんだ」

「自由なのにデモ？デモってオウボウな政府に怒るやつでしょう？」

口ごもる恵永に代わり、雪洞はシャーロットから視線を逸らさぬまま答えた。

「自由は自由でも、共同生活であって一人の世界ではないもの。」

そこには必ず相互作用が生まれるのよ。それによる意見の食い違いもね。

つまり衝突は多様性ゆえのもの、人が自由である証拠であり自然なことなのよ。

で、シャーロット、どう変なの？」

「それが…赤くて変なのです」

「赤い？」

「変と言えばもともと存在が変ですがね」

フランススを見捨て雪洞が尋ねる。

「どう赤いの」

「なんとなくか…私が見たときには、画面一面が真っ赤で。カメラが故障しているのか、それ以上の解析もできないんです」

そう、と言うと雪洞はしばし何かを考え始めた。

こここのところ続く一連の事件が頭を過る。

——関係ない、わけ無いでしょうね。

「いいわ、とりあえず見てみましょう。フランスス」

はい、と言う前にフランススは壁に貼られた薄型モニターのスイッチを入れた。

細長い指の動きに合わせて画面が変わる。

『C·e·s·t·l·a·v·i·e！T·u·n·e·d·o·i·t·p·a·s…』
ピッ

『アリエルカンパニーの魔法のスティック！限定色で本日発売…』

ピッ

『午後のニュースです。今日未明世界ロボット工学博士の…』
ピッ

一連の娯楽番組のあと、篝の中継モニターに切り替わる。
そして現れたのは、真っ赤な画面。

それは背後から光で照らされているかのように明るく鮮やかであり
まるで一枚の赤い紙が壁に貼られたようであった。
所々汚れたような毒々しい黒ずみがあり、
風に吹かれているかのように時折揺れている。

「きゃあ！シャナこわい！」

シャナが声をあげて雪洞にしがみつく。

「なんだこれ？気持ち悪…」

「え、これ篝ですか？？カメラのこ、故障じゃないですか？」

ニコラと恵永も気味悪そうにそれを眺める。
そんな中、フランススが淡々と言った。

「火事ですね」

「火事！？」

恵永がすっとんきょうな声をあげた。
雪洞は黙って目を細める。

「こちらの影をご覧ください。恐らくこれは先日サウスエリア第3都市に立てられた高層ビルです。

そしてこちらの左端にあります影は、サウスエリアを囲む海岸部の曲線と一致しています」

フランスは振り返り雪洞を見た。

「サウスエリアにて大規模火災が発生していると見て間違いないでしょう」

「っ、これが火災って規模なの？俺には町の影すら分らないけど……」

ニコラが肩を縮める。

「恐らくサウスエリア内部の中継映像回路は遮断されています。その証拠に他の都市なら、ほら」

フランスが指を動かすと、パッと画面が切り替わり一面の銀世界が現れた。

優しい灯りが灯る可愛らしい家の周りで、白い息を吐きながら人々が談笑している。

ノースエリアの風景だ。

「災害は行政システムで自己処理されるはずよ。こんな規模になるまで消防隊員は何してるの？」

「それが、何故か全く危険信号が鳴らなかったものですから、気づ

いた時には既に中枢部と連絡がとれない状態で…
作動履歴を見ましても、作動した形跡はありませんでした」

雪洞は眉をひそめると、しばし思考を巡らせた。

——またこれは面倒そうね。

セキュリティソフトの異常と言い、治安維持機能の不調と良い
ただの事故が偶然に続いた、という可能性は低いわ。
かと言って辻褄を合わせるには、証拠が足りなさすぎる

ちらりとフランスを見やると、長い睫毛を瞬かせ黙って前を見て
いる。

相変わらず何を考えてるか分からない顔だ。

主人の視線に気づいてか、執事はにこやかに「紅茶の御代わり、お
つぎしましょう」とカップをとった。

「…そろそろ本格的にハツカーの可能性が出てきたようね。
滞在者の安否確認は取れてる？」

「ええと、ログイン者数が一気に減少していました。ですので、恐
らく簞外へ、現実世界へ逃げたのかと思われます。
その情報もどこまで信用できるものか分かりませんが…」

「どちらにしても、これだけ大規模にやられてしまったりリセットし

ありませんね」

フランススが赤い画面を眺めながら言った。

「リセット？ゲームみてえ」

ひゅいつと口笛を吹いたニコラの頭を、シャーロットが「この馬鹿
っ」とはたく。

前述の通り簞では、行政、消防、警察などの自治業務がプログラム
されたバーチャルキャラクターにより行われる。

住民は彼らに一定の提言権利を持つ代わりに、街で何事が起こった
時の責任も自分たちで担わなければならない。
要は、現実と変わらぬ、もしくはそれ以上の民主主義が成り立って
いるのである。

しかし時折、あまりにキャパオーバーな事態が発生した時のみ
仮想世界の特権であるリセット――記録の消滅と再生――が行えること
になっていた。

「無償でリカバーはできないわ。
ルールの無い自由は無い、その原則はなるべく守りたいの。
秩序の無い世界は、混沌に向かうしかないもの」

雪洞はフランス스에言い返した。

「その前に原因をつきとめなきゃ！」

ニコラわくわくした顔で目を輝かせ、その隣でうろたえる恵永が顔を青ざめている。

ざあああつ

ざああああつ

一つ壁を隔てた向こう側では、バケツをひっくり返した様な雨が降っている。

しん、とした部屋の中で、滝のように窓を濡らす雨だけが流動し続けていた。

一同の視線が雪洞に集まる。

- - 不自然な精神被害者の発生
そして突然の治安維持システムの停止
どちらも自然に発生したのではない

誰だか知れないけど、この私に喧嘩売るなんて、いい度胸じゃない。

雪洞は煌々と燃える炎の映像を見つめた。

――これは真っ赤な挑戦状ってわけね…

そんな声に応えるかのように、それはゆらりと袖をゆらめかせた。

覚悟を決めたようにまだ熱い紅茶を一気に飲み干すと

「分かったわ、とにかく行ってみてみましょう。」

ありがとうシャーロット、戻っていいわよ」と立ち上がった。

「え、行くってどこへですか？お嬢」

恵永が慌てた拍子に足を思い切り椅子にぶつける。

「決まっているでしょう、簾に行くのよ。こうなったら直接見てくるわ」

「お、お嬢様が直接ですか？何かあるか分かりませんし、システムの解析をされてからのほうが…」

シャーロットも慌てている。

「大丈夫よ、肉体は置いていくわけだから、よっぽど無茶しない限り死ぬことは無いわ。」

それにこういう場合は、外部より内部の異常であるケースがほとんどなの。

それなら一刻も早く処置しないといけない。私じゃないとできないのだから、私が行くしかないじゃない。それに…」

雪洞は不気味ににやあつと笑った。

「ここまで気合いの入った輩がどんな面してるのか、見てみたいじゃない。」

徹底的に証拠を探し出して、訴訟問題も含めて一気にカタをつけてやるわ。

…売られた喧嘩は売り返さなきゃね」

「い、行つてらっしゃいまし」

シャーロットがか細く言った。

「そうと決まったら計画を立てなきゃ。」

えーと行つてからまず都市部を確認して、整理して、解析してプログラムし直して。一日で足りるかしら。

明日は会議は入ってないはずだから、ああその前に学会にレポート出さなきゃだわ、それは帰ってきてから考えよう」

「シャナも行くー！」

「俺も行きたい！」

シャナとニコラもばつと立ち上がった。

「駄目よ、あんたたちはお・る・す・ば・ん。」

子供にはまだ早いの。

シャーロット、コートを取って。

恵永、腫れないうちに冷やさないね。

ニコラ、留守の間屋敷をお願いね。

そして――」

雪洞は振り返って執事を見上げる。

主人の椅子を引きながら、フランシスは柔らかな笑みを浮かべた。

「それでは参りましょう、お嬢様」

2 - 1

何してるんだろう

こんな些細なことで

あんなに一生懸命かき集めて積み重ねた欠片を踏み碎いている

いつも あと一歩で君を傷つけて

それ以上に僕も傷ついて

結局

逃げてしまおうとしている

僕を許して欲しい――

ばちっ！

という音と共に、フランスは目を覚ました。

目の前に飛び込んできたのは、見渡す限り何も無い草原、と、忘れ去られたような鳥居が一つ。

足元を見ると、直径2メートルもの大きな魔方陣が
なぎ倒された草でミステリーサークルのように形作られていた。

そこが篝の中と気付くのに数秒を要した。

——そうだ、俺は確か、お嬢様が来られる前に、先に篝に入ること
にしたんだ。

彼女の安全性が確保された、世界を作るために。

ようやく意識がはつきりと戻ってきた。

手元に戻る感覚を捕まえるように、フランスはゆっくりと掌を握りしめる。

——なんだ今のは…

なんだあの声は。

これが「夢」というものか

「夢」は人間ならではのものでは無かったのか

そういえば俺は時折「夢」を見る気がする
気がするけれど思い出せない

フランスはぼんやりと、うつろな眼で宙を眺めていた。

胸元につけられた小型無線機から雪洞の声がした。

フランスははっと我に返った。

今自分がどれだけ無防備な状態であつたのかに気付いて
しまった、と顔をしかめる。

「申し訳ありません。少々神経回路が混乱しておりましたようで」

フランスはマイクに手を当てると、今度はしっかりした足取りで
歩き始めた。

「めずらしくぼーっとしてたわよ。何かあつたの？」

「いえ。それよりお嬢様、簾の空間超越経路にも不調が無いか、調
べておいて下さい」

「何？どういうこと？」

簗の外、すなわち現実世界の簗管理室からフランススの映像を見ていた雪洞がマイクに顔を寄せる。

「簗に精神が着地するまでの間、第三者の思考が流れ込んで参りました。」

何らかの混線が起こっているのかもしれませんが」

「…ふうん。分かったわ。見ておく」

フランススは「お願いします」と言うと、きびきびと歩き続けて真っ赤な鳥居を抜けた。

しばらく道なりに歩いて行くと、突如下が見えないほど深い崖が現れる。

崖というより、空中に浮かぶ島に乗っていると言った方が近い。

そしてフランススの居るその場所からは、更に四方八方に伸びる吊り橋がかけられていた。

簗には総勢30の街がある。

ここはいわゆる簗の入り口であり
島に繋がれた橋の向こうに、4つのエリアに分けられた各街がある
のだった。

つまりこの吊り橋こそが、簗の世界に続く道なのである。

フランスは迷うことなく『SOUTH』と書かれた看板をつけた橋を見つけ

300メートルはあると思われる長い道のりを歩き始めた。

大人一人が通れるだけの小さな吊り橋は、時折吹く風でぐらぐらと揺れる。

おまけに辺りに立ち込める真っ白な霧のせいで、前も後ろもよく見えない。

小心者はまずこの時点で怖気づくらしい。

しかしフランスは、慣れた足取りで黙々と歩き続けた。

篝の中に入ると、なんとも言えぬ変な感じがする、とフランスはふと思った。

それもその筈か、要は『幽体離脱』をしているのだ。

「ロボットの俺にも魂があるのか」

馬鹿な、と笑う。

「何？なんか言った？」

「いえ。それより、着きましたよ——」

深い霧の中から、頼りなく地面に突き刺さる二つのくさびと、それに繋がれた橋の先端が現れる。

その向こうに広がる光景に、フランススは目を細めた。

「おやおや。これはまた」

街は燃えていた。

第3都市で火事が起こった、というよりも
第3都市が火事になった、という方が正しい。

それくらい、街全体が一つの有機物の様に
煌々と真つ赤な炎を空に突き上げていた。

不思議とそれがとても静かであることにフランススは驚いた。

「見えますか？」

「見てるわ」

雪洞がため息をつく音が聞こえる。

「こりゃあもう駄目ね。財産データも不動産データも
住民には一からやり直してもらいましょう」

「住民は幸い脱出したようですね。
焼死体、いや失礼、データが焼失した匂いありません。

こういう時に穴抜けルートがある仮想空間とは便利です」

「そう。住民が居ないのなら周囲の酸素濃度を急降下させましょう」
酸素が無ければ炎は燃えない。

あくまで『自然』な消火にしたがる雪洞の言動に矛盾を感じながらも
フランスは出かけた言葉をぐつとこらえた。

「中心街はともかく、市街地にも食糧供給用の農作地帯があったはずよ。そこは？」

フランスはこめかみに手を当てると、ぴぴぴと瞳のカメラで炎の勢力を計測する。

「規模と風向から察するに、かろうじてそこまでは回っていません」
「私も行くわ。先に向かってくれる？」

「了解しました」

フランスはくるりと踵を返すと、市街地に背を向け歩き始めた。

それを追いかけるように、

どどどどどおっ

と、背後から地響きの様に建物が崩れ落ちる音が響いた。

フランスはようやく、島の周縁にある小さな村に着いた。

かつてそこは、自給自足の農業生活が営まれていた長閑な町だった。酪農と葡萄の栽培で有名なその村は、主に昔懐かしの片田舎生活を求める人々が集う場所であった。

炎を逃れてばつねんと回り続けている真っ白な風車とそれを囲む色とりどりの可愛い家々がかつての幸せな生活を思わせる。

フランスの予測通り、村は至る所で黒い煙が上がっているものかろうじて原型をとどめていた。

住民も残っているようだ。

しかし先ほどと違い、混乱する人々の声、泣き声、怒鳴り声があちらこちらから聞こえてくる。

——騒がしい。

フランスは不快そうに顔をしかめると、ばさりと上着を脱ぎ捨て「お嬢様、とりあえず消火するので適当に消防車が何か送ってください」と言った。

「わかったわ。はい」

頼杖について画面を眺めていた雪洞が、手元のボードに何かを打ち込む。

すると、

「パッパパー」というけたたましいクラクションと共に、どこからか大きな消防車が数台現れた。

フランスは手慣れた動作でそのうちの一つに乗り込むと勢いよくアクセルを踏み込んだ。

そして車ごと、逃げまどう人混みに突っ込んでいった。

「ちょっと！被害を増やしてどうするのよ」

雪洞が思わず立ち上がって苦笑する。

「失礼、久々なもので足の感覚がどうも」

その後も豪快なハンドル裁きで村中を暴走した後、ようやくお目当てと思われる火の手の強い現場に着いた。

フランスは颯爽と車から降り立つ。

突如現れた消防車を見つけ、小さな男の子がたたたと走り寄るち歓声をあげた。

「うわあ！しょうぼうしゃー！」

高額な料金の発生する簞に滞在する子供など、大方どこかの御曹司か何かである。

「これ、まーくん！」

と彼の祖母らしき人物が駆けつけるが、白髪の間じるそのご婦人もどこか高貴そうな立ち振る舞いだ。

「乗る乗る！僕が乗るって言ったら乗るの！」

まーくんと呼ばれたその子供は、祖母の手を振り払うと地団太を踏んで騒ぎ始めた。

背後には炎が迫っているというのに、案外子供の方が肝が据わっているのかもしれない。

いかにも知能の低そうなお子様ですね、栄養素を脳の活性化にも当てた方がよろしいのでは

と思わず飛び出しかけた言葉を抑えて、
フランスは対女性子供向けの営業スマイルを作って振り返る。

「もう危ないから、行きましょう」

「やだやだ！ここなら何でもできるって言ったじゃん！」

ついに靴を脱いで放り投げ始めた子供を、女性がおろおろとあやし始めている。

そんな二人にゆっくりと細長い影が近づいて行った。

そして すつ と小さな運動靴が差し出される。

海外の香水のような、爽やかだけれど甘い香りが漂い、子供と婦人は顔をあげた。

「ボク、ちゃんと掃いてあげないと、靴がかわいそうだろう」

フランススは跪くと、少年の足に丁寧に靴を履かせた。

「ころころころころ、何してんのよそこ」

と、マイクから聞こえる雪洞の苦情をぴんつと指ではじく。

一丁前にオーダーメイドの革靴が、具現化にも金がかかるだろうに

とは言わずに、

今度はうつとりと腰を抜かして見つめる老婆を向くと

「さあ、ご婦人も下がっておいで下さい」

と手を取って立ち上がらせた。

「あなた様の白い手に黒いすすがついては私の立つ瀬がございませ
ん。

せつかく顔に似合わず小奇麗になさっておりますのに。

箸では恰好だけでなく、顔もオプションで変更することが可能です。

この機会に、是非いかがでしょうか？

100%イメージ通りの御顔になりますよ……」

「なんか最後の方おかしかったわよ。営業入って無かった？」

と騒ぐマイクを再度弾いて黙らせる。

終盤のたつぷり込められた無礼講にも気付く間もなく

フランスの甘美すぎる笑顔に、老婆は握っていた子供の手を離してまで

ぶんぶんぶんつと首が折れんばかりに頷いた。

フランスはニコリと笑うと

「さあシェルターへ」

と二人を促す。

魔法にかけられたようにふらふらと遠ざかっていく二人の背中を見送りながら

フランスは段々とサディスティックな顔に戻る。

元通りに眉と目尻をあげると、炎に向き直って言った。

「お嬢様、空気をお読みになって下さい。

こついう一つ一つの地道な宣伝活動の積み重ねこそが企業の生き残る道なのです」

「地道というよりちゃっかり一番高額なオプシオン売りつけてるじゃない」

そんな会話をしながら、フランススは消防車のトランクを開けた。

そして決して軽くないだろう大きなホースを両手に抱え直すと、

燃え盛る炎に向けて勢いよく水を噴射し始めた。

並ぶ数台の消防車からも次々に水が噴射される。

「おおっ

ざああっ
…

がやがやがや…

いつの間にか遠巻きに人だかりができていた。

突如現れた美しい消防士に、拍手が起こる。

フランススは振り返ると観衆に向かって愛想よく微笑みかけた。

くらくらつと女性たちが倒れる。

貧血だ。

「被害者を増やすなー」

雪洞がメガホンを持って抗議する。

「不可抗力です」

5分、10分と消火活動が続く。

しかし一向に炎が収まる気配は無かった。

「おかしいですね」

フランスは顔をしかめると、どさつとホースを投げ捨てた。

そしてパンパンツと手を払うと

「すみません、お嬢様。やはり面倒なので、土砂降りの雨でもふらしていただけませんか？」

と不機嫌そうに空に呼びかけた。

「あーあ。もうわかったわ。『神の見えざる手』って」

もはや自然な方法では事を進められないと観念した雪洞は、EME

R G E N C Yと書かれたボタンを押した。

突如黒い雲があたりに立ち込めると、スコールのような土砂降りの雨が降り始める。

次第に赤い炎は灰色の煙へと変わっていった。

「あーあ。最初からこうすればよかった」

営業用とは分かっていたても、自分以外に美しすぎる笑顔を振りまくフランスを思い出し
ムカムカイライラしてくる。

ガンツと拳でボタンを叩きつけると
フランスの頭上から落ちる大粒の雨が勢いを増した。

少しきよとんと空を見上げてから、

「もう大丈夫です、完全に火は消えたことを確認しました。

いらして下さい、お嬢様」

と、満足げな笑顔で呼びかけた。

ずぶぬれな体などお構いなしに、珍しく心から嬉しそうな顔だった。

そんな笑顔を見ていたら何も言えなくなるだろコノヤロウ。

恨めしげに画面を見ていた雪洞であったが

「もう、しかたないなあ」

と言うとしぶしぶ立ち上がり、壁にかけてあったコートに袖を通した。

「しょうがない、行つてやるか」

近隣の奥様方の予想通り、ケイマ邸にはいくつものからくりが張り巡らされていた。

一つだけ木目の違う壁を押せば、地下への扉が現れる。

雪洞はセキュリティに虹彩を読ませて倉庫に入り、大量に積みあげられた本の一つを引いた。

ガコン、ゴゴゴゴ…という地鳴りと共に部屋が回転する。

「きをつけてね！お仕事がんばって！」

と走り寄るシャナの頭をポンと叩くと

雪洞は屋敷の奥にある簾管理室の更に奥、

大きな半透明のカプセルが並ぶ手術室のように真つな部屋へ入って行った。

ジーツ

という音とともにドアが閉まり、赤外線が再び張り巡らされる。

同時にゆつくりと開いていくカプセル内に、雪洞はするりと体を潜りこませた。

橙色の液体―のようなもの―がカプセル内に満ちていく。

浮力に身を任せると

雪洞は除々に簞の中へと落ちて行つた。

目をあけると、そこは戦場であつた。

混乱に乗じて起こる窃盗、かろうじて残つた所有物をめぐる争い、有名な権力者、セレブにスターが罵倒しあう声…
それらが渦となつて雪洞を襲つ。

――頭が痛い…

軽蔑と同情の眼差しを彼らに向けながら、雪洞はなるべく目立たぬように村を走り抜けた。

簞に入る際、人々は同意書に押印が求められる。

『簞内で生じる一切の事に、弊社は責任を持ちません。

万が一外部世界、日常生活へ何らかの影響が出た場合も、ご自身による対処をお願いします。

また弊社では万全の安全体制を整えておりますが、簞内における財産所有権の強制的譲渡、理不尽と思われる剥奪行為、疑似自然災害の発生も事前にご理解の上…』

別世界には連れてってやるが、あくまで自己責任。

何があっても文句は言うな、というのが原則である。

しかし理屈と感情は往々にして異なる。

高額な慰謝料や雪洞の失脚を求めて訴訟を起こす者も、実のところ今回ばかりではなかった。

それでも大抵が事なきを得てきたのは、彼らにとって最も恐ろしいのはが簞の利用停止であるからだ。

『簞とは新しいドラッグだ』

以前どこかの社会評論家が、巻き起こる簞現象を批判して言った。

相応のコストさえ払えば、簞内では顔も体も自由に变えて生きることができる。

すなわち、それまでのしがらみや鬱憤から解放された新たな生活を新たな議事世界で試行的に営むことができるのである。

加えて町や物質も、現実のそれより遥かに美しく、便利なものが多い。

それはそうだ、本物では無いのだから

そのため、その高額な料金から利用者層はまだ一部の富裕層に限られてはいるものの

一度その解放感を味わった者は、もう簞無しには成り立たない生活になるのだった。

しかし現在の簞は、掲げられている崇高なユートピア構想とは裏腹に人間の欲望の吐き場と化してしまっていた。

——どうしてこうもうまくいかないんだろう
私が作りたいのはこんな世界じゃないのに。

今すぐコイツらを消し去ってしまいたい…

そつだ、本当なら要らないんだ、篝にこんな汚いヤツらはいらないんだ

途中で「あっ」と声をあげると、雪洞は大きく体勢を崩した。

慌てて地面についた掌にうつすらと血が滲む。

「いったあ……」

本当の体じゃ無いくせに、と思うと、今度は胸が痛んだ気がした。

雪洞は喧騒を聞きながら、手首を伝う血を眺めた。

……いつまでこうして、空を掴み続けるような真似をしていればいいの

本当に、『夢』が叶う日なんてくるんだろうか

雪洞はしばらく呆然と座り込んで、自分の掌を見つめていたがぶるっと頭を振ると、よたよたと歩き始めた。

フランスは雨に濡れた体を気にもせず、優雅にベンチへ座って状

況を眺めていた。

そんな彼に歩み寄って、声をかける。

「フランス、この状況を説明して」

「見たままです」

表情を崩さずにフランスが答えた。

「どうにかしてっていう意味よ!」

肩をすくめ立ち上がると、フランスは

「武力介入でも?」

と首をかしげた。

「もう何だっていいわ。この胸クソ悪いやつらを黙らせて」

強張った表情の雪洞をまっすぐに見つめ、ふっと笑うと

「お任せ下さい」

と丁寧に頭を下げた。

くるりと体を反転させ、二人の近くで口論している男たちのもとへと向かっていく。

どうするつもりだろう、と雪洞が不安そうに見守っていると
フランスは飄々と男たちに近づいていった。

周囲が振り返るほどの大声で争っていたのは、5・60代ほどのタ
ーバンを巻く黒人と
高級そうなスーツに身を包む白人の男である。

二人は近づいてくるフランスにすら気付かない勢いで口論してい
る。

「お前の家が私の敷地に倒れてきた！だから私のものだ！」

「何をふざけたことを…！それならお前の庭の木だってなあ！」

くつつくのではないか、と思われるほど顔を近付けて睨み合う二人
の頭に、すっと長い腕が伸びた。

フランスは二人の頭を掴むと、

次の瞬間

ガンッ！！

と勢いよく互いの頭にぶつけさせた。

突然のことにさすがの雪洞も驚いて声が出ない。

一人は一国の王、もう一人は名の知れた資産家である。

「なっとなにを…」

「簞内での騒乱は禁じられております。原則通り体罰を執行させて頂きました」

呆然と立ち尽くす男たちに、爽やかな、しかしひどく冷たい笑みを向けると、

今度はその隣で物を奪いあっている老人と若者の元へ向かう。

しばらく若者の腕にすがりついていた老人であったが、ついに力負けたのか

地面に倒れ込むと現れた今度はフランスにすぎるように言った。

「あれは、私がようやく妻のために手に入れた首飾りなのです。

それをあの若者がいきなり…」

フランスは聞いているのかいないのか
表情一つ変えず若者の方へ近づく。

「な、なんだよ……」

突如現れた美青年に気圧されて、後ずさる若者の首を掴むと、

「篝内でも窃盗は禁じられております」

と、思い切り投げ飛ばしてしまった。

老人も周囲の人々も、目を丸くしてそれを見た。

始めは地獄に舞い降りた天使のごとく一人威光を放つ青年に、
思わず目を奪われていた住民たちであったが
獲物を探す鷹のようなその鋭い眼光を射すくめられると、
人々は顔を見合わせ、抱えていた財産を放りだし逃げ出し始めた。

そうしてちりぢりに人々がばらけていくのを
雪洞はぽかんと口をあけて眺めていた。

「はは……」

さすがフランススだ。

彼はいつも、人間の予想のはるか先にあることをやってくれる。

そしてふっと、体が軽くなる。

——ああそうか、簞は精神世界だから、心が暗くなると体も重くなるのか

と思った拍子に、頬を涙が伝った。

「えっ」

と歪む視界に驚いて、慌ててそれを拭う。

もう一度あげた視線の先には、フランスは
それでも残る財産を掴みあつて離さぬ輩たちに向かって
くくく、と不気味に、しかしどこか品のある声で笑いながら歩み寄
る。

「…ふふふ、良いだろう。」

お嬢様の作られた世界を汚す輩を、掃除するのも私の務めさ。
いくらお客様でも、容赦はしない」

バキッとフランスの拳が鳴る。

それに応えるように、いつの間に集まったのか頭上で旋回する鳶たち
がヒューッと声をあげた。

一時退去命令を告げる行政ロボットの声に促され、人々がしぶしぶ現実世界へと戻って行く。

波の様に押し寄せる群衆を掻きわけ、フランスと雪洞は都市の中心部へと向かっていた。

「ずいぶんど派手に燃えてしまったけど、まだ何かあるかしら」

大きな頭巾を被って顔を隠した雪洞が、少し心細げに言う。

「人為的原因であるならば、何かしらの痕跡が必ず残っているはずです」

「そう。徹底的に解析して犯人を見つけ出してやるわ。」

そして私の貴重な昼食時間を削った責任を、嫌というほど取らせてやらなきゃ。

まあ、ちょうど町の改造もしようと思っていたから手間がはぶけたけど」

とその時、目の前のフランスの体が突如止まった。

きゃ！

と思い切り雪洞がぶつかる。

鼻を押さえて恨めしげに顔をあげると、フランスは遠く離れたビ

ルを見ていた。

瞳孔を拡げ食い入るように何かを見つめている。
何らかの視覚映像をズームし、解析しているようだ。

雪洞が同じ方向に顔を向けると、黒い影が窓にゆらりと映り、ふつと消えるのが見えた。

「誰か居た…こっちを見ていた？」

「追いましょう」

フランスは片手で近隣の人々をつまみあげぬいぐるみのように投げ捨てると

雪洞の手を取って走りだした。

雪洞は必至に走る。

しかしここに簗創設者が居るなどとはつゆ知らず、紛争地帯から逃げ出す難民のように

我先にと出口へ向かっていく住民たちに押し流され
上手く前に進めない。

雪洞は運動神経が悪かった。

「お嬢様、失礼します」

そんな雪洞をもどかしく思ったのか、フランスは彼女をひよいと脇に抱えると、するすると器用に人の間を抜けて走り始めた。

そして少し顔を歪めた。

「お嬢様、育ち盛りなのは誠に結構なことですが、3か月前より1・8キロ増量なさっています。

身長が御伸びになったことを考慮しても、少々増量が過ぎていませんか」

「フランス、あなたね。この状況で言うこと？」

「どんな時であろうと、主人の体調管理は重要な執事の役割ですから」

「レディーに体重の事を言うのは失礼よ！」

「おっと、お嬢様はレディーだったのですか。

レディーとはもっとスリムな方々と思っておりました」

「私をレディーじゃなくて何だと思ってたのよ」

「貫禄が出てきた若社長」

「あのねえ」

雪洞はフランスの背中のため息をついた。

この緊迫した空気の中、気を利かせた冗談ではなく本気で言っているのだから腹立たしい。

「とにかく帰ったら、運動メニューを増加します」

「私のことは私が決めるの！」

「それは結構なことでございます。

ですが、スリムなレディーになりませんと婿も迎えられません」

「また、それ！？」

雪洞はあきれた声を出す。

「良き伴侶を迎えることは結婚は子孫繁栄のために必要不可欠なのですよ。」

執事は主人の先を見据えた上で必要な提言をしているのです。

それに度々お嬢様を抱えるの私の労力も削減され、一石二鳥でございます」

なんとか抗議しようと雪洞が口を開いたとき、フランシスがずっと雪洞を降ろした。

「さあ、着きましたよ」

雪洞が見上げると、そこには巨大なロボットの足のような

ずんぐりとした灰色の建物が、空に突き刺さるようにそびえていた。

今にも歩きだすのでは、と思われるような形のそれは

傾いた二つの塔が相互に支えあって建っている、なんとも妙な外観だった。

「相変わらず変な形ね」

雪洞は建物を見上げて言った。

このサウスエリアは様々な芸術で溢れる街として有名であった。特に都市部では、モダンアートに傾倒する芸術家たちが集っては日夜自身の芸術作品を競合する洗練された都市でもあった。

この建物もまさに近代芸術のトレンドである『曲がる石』をモチーフにしている、
と、この作品を作り、更にそれを高級マンションとして一般開放していた大御所建築家が言っていた。

雪洞からしてみれば、同じエリア内に点在する他の不可思議な建造物とこれがどのように違うのかよく分からなかったが
サウスエリアに住む多くの芸術家たちにとってそれは
『一世代遅れた様相で、周囲との調和を乱す』ものであったらしい。

この巨大建造物は、莫大な予算を投じて完成させられたにもかかわらず
数ヶ月前から痛烈な苦情が寄せられた。

この『横暴』な作品の取り壊しを求める芸術家と、
表現の自由を求める芸術家たちの間で数々の論議が行われ、
ようやく先日取り壊しの日時が決まったところであった。

「これ、この間やつと入居者の財産データを保存して、工事前の最終確認に入ったところよね。
誰が、こんなところに？」

包帯のように巻きつけられた『KEEP OUT』のテープをバリバリッと破ると
フランスは無造作に投げ捨てて言った。

「さあ、お嬢様。準備はよろしいですか」

「OK。行きましょう」

カッン、と石で固められたエントランスに雪洞は足を踏み入れた。

もはや周囲にはだれも居なかったが、目撃者が居たならこう言ったかもしれない

「二人の後ろ姿は、体を失くした象の足元に、小さな生き物が無謀にも立ち向かっていくそれに似ていた」
と。

人の消えた静かな街で

埃を含んだ風の唸り声だけが響いていた。

2 - 2 (後書き)

はたして3カ月前はどのようにして雪洞の体重をフランスは知ったのかry

外観にそぐわず内部は意外と単純な作りになっていた。

一階のロビーを過ぎれば、螺旋状の階段がただただ上に続くばかりである。

「あの場所からあの角度で見えたということから分析からして、あの人物が居たのは7階の8号室です」

フランススは声を幾分かひそめて言った。

「エレベーターは何が起こるか分かりません。何かありましたら面倒ですから、階段で参りましょう」

雪洞は黙って頷くと、後に続いて歩き始めた。

すると、フランススは再び立ち止まって

「お嬢様、その前に靴を履き替えて下さい。それでは足音を消せません」

と、雪洞の赤いヒールを指さした。

「でも靴なんて持ってないし」

雪洞が口を尖らせる。

「執事に不備・不可能など許されません」

当然、と言った顔で笑うと、フランススとは胸元からピンクの運動

靴を取り出した。

「どうぞ」

「貴方は秀吉なの」

どこにしまっていたそんなもの、と呆れた声を出しながらも
どこか満足げに雪洞は差し出された靴に履き替えた。

雪洞とフランシスは一段一段静かに階段をのぼっていく。
廃虚ビルの中は勿論明かりも無く、足元も見づらい。
気を抜けばすぐに転んでしまいそうである。

「お嬢様、おわかりでしょうがくれぐれも声は出さないでください
ね」

雪洞は再び黙って頷いた。

二階、三階…大会場のある四階を超えて五階、六階…

ようやく七階にたどり着くと、途中でついに体力が切れフランシス
に負ぶわれた雪洞がそつと降ろされた。

薄暗く絵画の一つも無い無機質な廊下を、
二人はゆっくりと歩いていく。

雪洞は時折背後を確認しながら、壁づたいに部屋を回るフランシスに続く。

彼の合図に合わせ最後の部屋に入ろうとした時だった。

カタン、

と小さな音が聞こえた気がして、

雪洞はふと後ろを向いた。

出口の見えないトンネルのような暗闇の先には、何も無い。

——風かしら

雪洞が再び部屋に入ろうとした、
その時だった。

さつと

視界の隅で何か黒い物が横切って行った。

思わず「あつ」と声をあげる。

顔をしかめて振り向くフランシスのスーツを引っ張ると、
影の主も此方に気づいたのか慌てて走り去る音が響いた。

「追いましょう」

すばやく向き直ると、フランシスは少女を乱暴に担ぎあげ

暗闇に向かって一直線に走り出した。

影は更に長い階段をのぼり、最上階の一室に駆け込むとバンッとドアを閉めた。

それを追うフランシスが、一足遅れて乱暴にドアを蹴破る。

そしてそこに現れたのは――家具も全て取り払われた無機質な空間だった。

人影どころか一切の影もない。

フランシスは居るはずの影を探すように部屋中を見渡すと、雪洞をどさりと降ろした。

「胸が潰れて、苦しかった…」

「強く圧迫するほどの胸はございませんので心配ございません。それよりお嬢様、影が消えました」

胸を押さえながらフランシスを睨みつけていた雪洞であったが、ようやく状況を確認すると

「消えたってどうということ!?!」

と声をあげる。

しっ　と端整な指を口元に当てると、フランスは
「この部屋に入ったところまでは認識したのですが。」
と辺りを見回した。

珍しくどこか腑に落ちない顔をしている。

「私の視覚データミスでしょうか」

「見間違いじゃないわよ、私も見たもの。
仕方ないわね、わかったわ。ここに何か手がかりがあるのかも知れない。
とにかく探してみましよう」

珍しく心細げなフランスを見て気分を良くしたのか、今度は雪洞
が先立って颯爽と歩きだした。

探す、と言っても部屋には大きな窓が一つあるだけで、そこから差し込む光以外に部屋に残るものは何も無い。
それでもわずかな痕跡が残っていないかと、二人は部屋の隅々まで
丁寧にチェックしていった。

しかしやはり、何も見つからない。
足跡の一つも見当たらなかった。

「無いわねえ。そんな突然人が消えるってこと、ある？
ああここは簀だから論理的に不可能じゃないわね」

と、搜索に飽きた雪洞が大きな窓から地上を眺めていたときだった。

「お嬢様、こちらへ」

何かに気づいたのか、フランシスが雪洞を手招きしている。

「ここに何か、跡があります。」

フランシスが真っ白な壁の中央部を指さして言った。

「跡？部屋の装飾や改造はを所有者は許していなかったはずよ」

壁を一面ぐるりと見渡すと、フランシスは手袋をはめた右手をそこに押し当てた。

バコツという音とともに壁が抜け落ち——というよりそれはもとある扉が開かれたように——

大人一人分ほどの大きな丸い穴が現れた。

二人は思わず顔を見合わせる。

中に入ると、そこには一転して雑多な、多くの物が散乱している煩雑な部屋が現れた。

「何よ、これ……」

あるはずのない部屋を見渡して、雪洞はただ驚く。

「こんな部屋、設計図には無かったわ」

雪洞に続き、フランシスが部屋へと足を踏み入れると、

ツルリ

原始的な効果音とともに彼の重心を支える足が滑った。

「っと」

フランシスが猫のように体を曲げて体勢を整える。

「えっ！」と雪洞が振り向く。

良質な革靴は滑りやすい、加えて先程の雨で濡れている普通の人間ならそのまま転倒していた摩擦係数だったな

などと真剣に分析しながらフランシスが床を見ると、

そこにはハガキ大の少し黄ばんだ厚手の紙が落ちている。

フランシスはそれをひょいと拾い上げた。

何も書かれていない。

——ただのゴミか？

不満げにその真っ白な紙を裏返すと、突如カラフルな画像が現れた。

それは、ケイマ家屋敷の居間の写真だった。

「何これ。うちの写真じゃない」

雪洞は背伸びしてフランスの手元を覗き込む。

「厳密には写真ではなく、居間をレーザーで透視した映像を超薄型タブレットに映しているようです」

フランスは食い入るようにそれを見つめ、人で言う虹彩にあるスキャンモードを作動させた。

「何か残ってる？」

「人体データは――それが簞内の指紋となる――は付着していません。代わりに何かの繊維のようなものがかすかに。これは……」

その時だった。

「――動くな」

二人の後頭部にヒヤリと冷たい物が押し当てられた。

ガチャリ、と弾を回す音がする。

銃。

それも、神経回路にそれなりの傷跡を残しそうな、ライフル銃。

「両手をあげて跪け」

背後からひどく冷たい声が響いた。

フランスと雪洞は黙って手をあげると、
寄り添うように動く銃口に合わせ、ゆっくりと膝をついた。

「要求は何？」

雪洞の非日常的な低い声が響く。

「篝創設者、雪洞・F・ケイマ」

「随分と手慣れたようだけど、ここからどうするつもり？」

「その執事兼総取締、フランシス・ド・フィニステール」

ひどく感情の無い平坦な声だった。

微塵の動揺も、焦りも感じさせない。

同じく平静を装いながらも多少強張った雪洞の声と交互に

薄暗い部屋の中を木霊していく。

「町の管理センサーを壊したのは、あなた？」

「…」

「それともただの通りすがりの強盗かしら？
それならここらでやめておいた方が良いでしょう。今なら見逃してあげる」

「…うるさいお嬢様だな。この状況が分からないのか？」

ぐつと銃口が押しつけられる。

「…あなたこそ、もう少し冷静になったらどうかしら。
あなたのような無謀な輩と、こっちは何度も顔を会わせているのよ。
そうして無残にも御縄に掛かっていく姿を見てきたわ」

「…」

「金目当てなら、命があるうちに逃げときなさい。
うちの執事の力くらい、下調べしてあるでしょう」

雪洞はわずかに顔をそらしてフランススを見る。

「動くな。撃つぞ」

「まあ、話だけでも聞いてあげるわ。
どちらにしる褒めてあげる、ここまで私たちを呼び出せたことを」

「普通に呼んでも来てもらえなさそうだったから、少々工夫したま
でだ」

「つまり一連の事態もあなたの仕業には間違いないということね。
そうになると、果たして単独犯かしら…」

雪洞は犯人との接触時の重要性を理解していた。

こういうときは、自分のペースに乘せられた方が勝ちなのだ。

さすが数々の修羅場を経てきただけはあって、危機的状況でも頭はしっかりと冴えている。

——心理戦になら自信があるわ、一気に元締めを暴いてやる。

「誰に雇われたの？これほどの腕がありながら、もっと良い生かし方があって無いかしら」

「お前には関係ない」

「もったいないわ。私ならもっとうまく貴方を使ってあげる」

「…」

「いくら出されたの？それとも脅迫？」

——かかった！

ごくり、と唾を飲むと、

雪洞は言葉を続けた。

「とりあえずその物騒な物を下してもらえるかしら。

篝火内だから撃たれても死なないということは、あなたもご存知かと思っけれど」

「…もう良いか？」

「は？」

銃口がガチャリ、と動いた。

「鍵の場所？」

「なんですって？」

「篝の鍵だ」

「ちょっとあなた」

雪洞は苦笑しながら答えた。

「篝のシステムキーのことを言ってるのかしら。
そんなもの何に使うの？」

手に入れたところで、生憎そこらの人間には扱えない代物よ。」

——篝を狙った犯行か。

なんだ、いつもと同じじゃない。

もう良いわよフランスス、という合図を送ろうと雪洞が手を動かす。
その時だった。

「違う。箒とその先を繋ぐ鍵の場所だ」

「なんですって?」

雪洞の声が部屋に響く。

「もう一度言う。」

箒とその先を繋ぐ、鍵を渡せ」

雪洞が口をつぐむ。

「先って、どういう意味かしら? 箒の拡張システム、なら存在しないわよ。

これ以上広げるつもりもないもの。あってももちろん教えてあげないけど」

「とぼけなくて良い。俺は知っている」

「何を知っているですって?」

「お前が知られたくないことを、だ」

「…言葉遊びが上手いのね」

雪洞が時間を稼ぐ間、フランスはできる限りの情報を引き出そうと

懸命に声の主を分析していた。

——懸命に低めてはいるが、声帯は少年から青年への移行期特有のものだ。

犯人は未成年だ。

そして若干東方なまりの発音がまじっている
中東出身か？

とかく感情の無い声だ、心音に乱れは無い。

こついう状況に慣れている者に間違いない。

それも幼きころから訓練を重ねていると見える。

少女へのぞんざいな扱いにためらいもない。

かといって極端な憎しみも感じられない。

この類は個人的恨みでは無いな。

かといってただの刺激を求めた快楽犯罪者の類ではないだろう。

俺としたことが、お嬢様を危険な目にさらしてしまった。

執事としてはあるまじき行為だ。

まあ、あの方はこれくらいで怖がるような神経では…

と、フランススが横目で雪洞を見ると、いつの間にか主人はひどく
強張った顔をしていた。

「…お嬢様？」

——なんだ、久々で緊張なさっているのか？
無理もない、お嬢様もまだ18だからな

これは悠長に構えている暇は無い、と再び思考を巡らせる。

——さてどうするか

この体制から彼女を抱き寄せその反動で銃を蹴り落とすのに、大体
0.7秒

相手がどんなに俊敏に反応しても、神経信号が動きに繋がるまで最
低0.3秒、引き金から発射されるまでに0.8秒

通常ならなんら危険性を伴うことではない。

しかし問題は…

再び雪洞の横顔を見遣る。

その視線に気づいたのか、雪洞は左手をわずかに動かした。

行っ、の合図だ。

確認すると同時に、フランススは口を開いた。

「お前もロボットか？」

その瞬間、背後でぴくりと体が動いた。

その一瞬の隙をついて、フランススは風のように姿を消す。

わずか1秒にも満たない間、部屋中に極度の緊張が走る。

慌てて少年が銃を抱え直すと、突如懷にフランススが現れた。

鈍い衝撃と共に、銃もろとも腕をたたき落とされる。

バンバンッ！

響き渡る銃声とともに、少年が後ろに跳びのいた。

銃口から上がる煙にも負けない軽やかな動きだった。

フランススはスカートの埃を払って立ち上がる雪洞に手を貸しながら少年を見つめた。

——若いな。14、5と言ったところか。

身長173cm、左利き。

「遅いわよ、フランスス」

「申し訳ありません。」

しかし何分、ここに来た時から銃口を向けるまで彼には人の気配が

ありませんでした。

その分析に少々手間取ってしまいました。

そして先ほどの画像データに付着していたのは人工皮膚特有のもの。
恐らく彼は……」

「俺はロボットではなんかじゃない」

少年はゆらりと立ち上がると、眼光を光らせて雪洞をぎろりと見据えた。

かすかに窓から差し込む月の光が少年の細い髪にそそがれる。

雪洞は目を見開いて少年を見つめた。

灰色の髪をした茶色い瞳

褐色の肌

そして額には煙草を押し付けられたような火傷の跡が残っている。

必死で記憶を手繰り寄せる。

——誰だろう、居ないわ、こんな知り合い。

「多少体を直されただけだ」

少年は自嘲気味に口角をあげる。

その時、窓から差し込む月の光が少年の右腕に注がれた。

先ほどのフランススの攻撃がかすったのだろう
すっかり首元の伸びたロングＴシャツの袖が破け
中があらわになっている。

フランスと雪洞は、それを見て思わず目を見開いた。

少年の腕は、灰色だった。

肘から手首にかけて、鉄の部品が組み合わされたような機械が覆い
それに皮膚を張り付けたような、なんとも異様な掌。

「お前と同じだ、雪洞・Ｆ・ケイマ」

「…なんですって？」

びくり、と雪洞の体が動く。

「失ったものを補いたい。二度と同じ物は戻ってこないとわかって
いるのに。」

要するに繰り返しているのだろう、お前も」

一瞬、雪洞が息を飲んだのが分かった。

「お前に何が分かる…」

雪洞がぎゅうつ、と拳を握りしめた。

「繰り返してなんかない、補おうともしない」

雪洞の感情——おそらく怒りに近いもの——を抑えようと震える声は恐ろしく低い。

「約束を果たそうとしているだけだ。

それ以上は、何も望んじやいない」

「じゃあそれは何だ？随分大事そうに抱えてるじゃないか」

「黙れ！」

——何を言っているのだろう

失った物……？

お嬢様の四肢は生まれた時の姿のままなはず。

フランスは分析しきれないデータ処理に戸惑っていた。

よくわからないが、お嬢様もひどく憔悴している。

とにかくもっとデータを得なければ——

「少年、何を知っている？黒幕は誰だ？」

少年はフランスをちらりと見た。

「これは別件。こっちの依頼主はそこまで考えちゃいない」

少年はくるりと両手の銃を回す。

——二重依頼？

一つの依頼主でつける傍ら、もう一人本当の依頼主がいるパターンだ。

そして、少年はポケットから小型の機械を取り出した。

ボイスレコーダーだ。

かちつとボタンを押すと

『約束を果たそうとしているんだ。それ以上は何も…』
ブツツと言う音と共に、雪洞の声が切れる。

「確かに頂いた。いざとなればそのお人形を壊してでも心のたがを外させてもらう予定だったけど、案外単純だったな」

——しまった、こいつ…声を私の声を！！

雪洞ははっとして

「私の声紋から分析しても無駄よ」
と声をあげた。

「そう、使うのは声じゃない」

少年は胸元に手を当てると
とんとんと叩いて言った。

「篝の力ギはここにあると、あの人は言っていただろう？」

雪洞・F・ケイマ」

鋭い緊張感が

一瞬にして部屋を駆け巡る。

同時に、雪洞が何かにうちのめされたように後ずさった。

「まずいですね。

彼の言動の真意は分かりませんが、精神世界である篝の声紋とは
感情や思考の反映と言いかえられます。なににせよ——」

フランスは声をひそめて言った。
しかし

「……お嬢様？」

雪洞からの返答は無かった。
指示も無い。

——主人の様子がおかしい。

しかし、それを気にする余裕は無かった。

目の前の少年は、一瞬でも目を逸らせば目の前から消えてしまいそうなの

全身から、まさに飛び立とうとする動物のごとき張りつめた気迫が感じられた。

「行つて…」

雪洞がかすかな声でそう呟いた。

「早く！」

その叫びを聞くか聞かないかのうちに、
フランススは地を蹴った。

地に積もった埃が煙の様に舞い上がると
それがゆらめくより早く、フランススは少年の背後を取った。

少年は微塵も体を動かさず、目を右から左に動かしたただけだった。

—— やった！

次の瞬間には雪洞の脳内には、
執事が少年を締め上げるいつもの絵図が鮮やかに浮かんだ。

ぐつと両手を握った雪洞であつたが、

大きく開かれたフランスの腕は次の瞬間、
少年の体に届く前にむなしく空を切った。

「!？」

「甘いな」

崩れる体勢のまま声の方向に顔を向けると
窓辺に足をかけた少年がこちらを見下ろしている。

「敵を捕まえるには、まず逃げ道を抑える。

そんな基本も、習わなかったの？」

表情一つ変えずそう言い放つと

少年は羽を拡げるように腕を拡げた。

そして

ゆっくりと背中から落ちて行つた。

「まさか！ここは20階よ!？」

パンツとフランススが床に腕を付いて立ち上がると同時に
雪洞も窓辺に走り寄る。

ひやりと冷たい窓枠から、落ちんばかりに身を乗り出して下を見る
が――

そこにはただ、灰色の大地が広がるだけであった。

2 - 4 (後書き)

『 簀の健はここにあるとあの人は言っていただろう? 』

少年は自らの足首を指差した。

雪洞・フランシス『 あ、アキレス健・・・! Σ(。Д;) 』

「くそ！」

何も残らない、まっさらな大地を見ながら
雪洞は拳を窓枠に叩きつけた。

「逃げられた…」

逃げられたわ！」

——どこか犯人を、軽んじて見ていた。

これはその甘さが生んだ失態だ。

もう一度、ガスツと鈍い音を立てて掌を打ちつけると
悔しそうに顔を歪ませ、雪洞は膝から崩れるように座り込んだ。

すっかり頂垂れたまま、言葉をこぼす。

「…鍵を、取られたわ」

——簞の鍵

感情と心音を競合させて編み出されるその人特有のリズム、それが

確かに簀のセキュリティキーである。

この世では私とフランスしか知らない筈だ——最も、簀の鍵とは
いわゆるセキュリティキーのこととしかフランスは認識していな
いだろうが

あんな少年が、そんな情報を手に入れているわけが無いとはなから
決めつけていた。

絶対、なんて絶対無いのに。

そして何より…

真っ白な壁に、

うつすらと血のにじんだ手を這わせる。

雪洞は焦点の定まらない目でそれを睨みつけた。

——問題は、あの少年の

まるでその『先』を知っているかのような言動。

まさか簀の経緯を知っている…？

なぜ作られたのか、その本当の目的を

そして何より、

あの人のことを…

「失ったものは二度と戻ってこないのに」

「繰り返しているんだろっ」

耳元で少年の声が木霊する。

抑えていた重く生ぬるい感情がこみあげてくる。

吐きそうだ――

雪洞は髪をかきあげ、ぎりつと歯をきしませた。

もう一度ぐつと

拳を握りしめる。

そしてそれを叩きつけようと、腕を振り上げる。

その時、背後からそれよりもっと大きな掌が
すつとそれを包み込んだ。

「出血しております。

手当て致しますので、お待ちください」

フランスは胸元から白いハンカチを取り出すと、
口にくわえてびりつと破く。

手慣れた動作でそれを雪洞の小さな手に巻きつけると

「今消毒液を出しますので」と今度は逆側のポケットから小さな箱を取り出した。

相変わらず、いつぞやの猫型ロボットが持ったと言われる四次元ポケットのようだ。

雪洞は狐につままれたように

次々と広げられていく応急処置道具を見ていた。

掌から伝わる体温と、除々に収まっていく自分の鼓動を感じる。

「セキュリティキーならすぐに変更すれば済みます」

フランシスは小瓶から数滴をガーゼに染み込ませながら言った。

「声紋を盗まれたところで、それを並大抵の人物が再現できるとは考えられません。」

お嬢様より知能の高い人物なら別ですが、
この世界ではそう多くも存在していないでしょう」

そうして、ガーゼを傷口に押し当てた。

ちりつと焼けるような痛みがする。

「ひとまずは、火事の原因を探りましょう。
それが今、一番合理的で効率的な行動です。」

今夜はこちらに泊まり込みになりますね」

慰めているのか、はたまた何も考えていないのか
特に優しい声色を作るでも無く
かと言って咎めるでも無く
フランスは淡々と言った。

雪洞は黙って、魔法のように巻かれていく
白い包帯を見つめていた。

「こちら、サウスエリア防衛第7小隊、ステイプ・ウォーター大
佐であります！」

栗色の短髪をびしっとワックスでまとめ、金色の肩当てを当てた青
い軍服の男が
雪洞に向かって敬礼する。

「お疲れ様。大佐、街の様子はどうか？」

「イエス、マイロード！
異常、ありません！」

もう一度胸を張ると、男らしい低い声でウォーター大佐は答えた。

「…そう。街ではどうやら、火事があったようなのだけど？」

「イエス、マイロード！」

そのような報告は、届いていません！」

異常、ありません！と彼の後ろに並ぶ数十人の部下がそれに倣って敬礼する。

「…分かったわ。」

大佐、街に破損箇所がたくさんあるみたいだから軍を派遣して復興を手伝ってあげてちょうだい」

イエス、マイロード！

ともう一度大声で答えると、ウォーター大佐はエンブレムの付いた黒い帽子を被りくるりと後ろを向いた。

「諸君！これから街に向かう！

本日の任務は街の復興である！

Aチームはまず西地区に…」

昨日の家事などまるで無かったかのように
街は太陽に照らされている。

サウスエリアの中心部にある駐屯場で
雪洞はウォーター大佐が熱く指示を飛ばしているのを見ながら
首をひねっていた。

—どうやら本当に、自治システムには情報が行っていないのね。

でもシステム自体は故障していない。

どういふことかしら…

ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅ

真っ白な灰が積もった街に向かって
軍は一糸乱れず行進していく。

「大佐！」

と、舞い上がる土埃の中から一人の軍人が走ってきた。

「どうした、ジヨブ少尉！」

ぱたぱたとゆらめく軍旗の下で、

小柄なジヨブ少尉は

ウォーター大佐は雪洞に敬礼すると、

右腕を差し出した。

「異常な電磁波を発生しているものを、発見しました！」

「なんだと！」

危険だ！今すぐ爆発物処理班に……」

血相を変えて飛び出そうとする大佐を制し
雪洞が少尉に向き直った。

「見せて」

はっ！ と差し出された手の平の上には

小さな黒い物が置かれていた。

彼の掌より幾分小さな、歯車だった。

雪洞は目を細めると、それを太陽にすかす。

エネルギー特有の光反応が、起こらない。

「これは…」

—本物だ。

どういうこと？

ここは精神世界、脳を動かすエネルギーの動きを反映させただけの世界。

現実世界の物質が、何故ここにある？

「少尉、どこでこれを見つけたの？」

「はっ！」

繁華街の、遊園地内にあります！」

少尉は胸元から地図を取り出すと、大きなバツ印を指差した。

雪洞はそれを食い入るように見つめると
あつ　と声をあげた。

街の中心に位置するその場所は
フランススが割り出した出火場所にとっても近い。

「少佐、見つけたのはいつ？」

「正午0時、13分、現在より20分ほど前になります！」

「そう…。ありがとう。戻っていいわよ」

イエス、マイロード！と再び敬礼すると

大佐と少尉は肩を並べ軍へと戻って行った。

雪洞はもう一度
掌に載った歯車を見る。

—なんだろう

すごく、重たい…

その時、体に着いた埃を払いながら
フランスが戻ってきた。

「おかえり。一通り自治体システムにチェックを入れたけど
どこにも問題は無かったわ。」

そっちは？あの少年のデータは何か残っていた？」

いえ、と首を振ると

フランスは舞い上がる土煙の中行進する軍隊を眺めながら言った。

「一通り街中を探して参りましたが、それらしきものは何も。」

それよりお嬢様。すっかり忘れておりましたが、このタブレット」

フランスはぴっと

昨夜彼を滑らした写真を取り出した。

「屋敷の写真以外に、何かのデータを保持しているようです。開示しようと試みましたが、何をやっても拒否されます。

強力なセキュリティがかけられているようで」

フランスが言い終わらないうちに、雪洞は

「なんですって！？貸して！」

とひったくるようにそれを奪う。

不可解な火事

あるはずの無い歯車

危険な少年…

私の簞に、何かが起こっている。

敵の言動が予想外だったとはいえ、何にしてもみすみす簞のセキュリティキーを渡してしまった自分の軽率さも相まって雪洞は苛立っていた。

「 $dV/dt = I m \cdot (V a + V b) g N a \cdot \dots \alpha x \cdot \beta \dots$
 $\Psi(t, x) = A \cos(\omega t) \dots$
 ここに公式を…」

雪洞は自分がこれまで得た知識を総動員して
 貝殻のように頑なに閉じたデータの開示を試み始める。

隠れるように背を向けて黙々と解析している雪洞の手元を覗きこむ
 と、

見ないで！と拒絶されてしまった。

主人の命令違反は原則タブーである。

フランスはそれ以上の詮索をやめた。

しかし、

フランスと雪洞の間に、これまで一度も『隠し事』というものは
 無かった。

少なくとも、彼はそう認識していた。

なんだかんだと文句を言いながらも雪洞は自分に対していつも真っ
 すぐ向き合ってきた。

それに対して、昨日からどこか雪洞の様子がおかしい。

- お嬢様は何か隠されている…。

なんだこの不快な感覚は。

そんな主人の様子を為す術もなく見つめながら、
フランスは拭え切れない初めての感情に困惑していた。

どれだけ時間がたったのだろう。

駐屯地にある時計台が、ボンツと一時を告げる鐘を鳴らす。

と、同時に

カシャン…

何かがはまったような音が響いた。

あっ、とフランスが声をあげ
雪洞の手元を覗きこむ。

『コード、カクニン。』

セキュリティ、カイジョシマス』

ガシャガシャガシャンツ

突如かみ合った歯車が回り出したように

縛りから解かれたタブレットが
雪洞の小さな掌の中で動き始めた。

焼け野原と化した町並みは先程まで大規模な戦争が行われていた扮装地帯かのように閑散としていた。

——建物の影に敵が潜んでこちらに銃口を向けている——

自らの足音だけが聞こえる静寂の中、少年はかつての感覚を思い出していた。

少年はポケットから超空間無線機を取り出すとどこかに連絡する。

「終わりました。」

「そうか。報酬はあとでな。」

ブツツという音とともに乱暴に回線が切られた。

「…。」

少年はしばし無線機をじっと見つめると、ぱいっと放り投げ

「ああ、疲れたあ。」

と、ドサツと倒れ込んだ。

「ふああっ」

のんびりとした声であくびをすると、
バサッと両腕を広げて寝転がる。

三日月がたの細くつりあがった目じりがゆっくりと下がる。

少年の顔つきは、先ほどまでとはうってかわった年相応の、もしくはそれより幼いものに変わっていた。

——こっちの方は別にどうでもいいよね。

ターゲットとコンタクトをとれとは言われてなかったから聞いたら
怒るだろうな、

依頼主はヒステリックみたいだから。

さて、行かなきゃ…。

しばし空を堪能した後、歩こうと動いた少年の腹部に
ズキッ…

と鈍い痛みが走る。

どうやら先程のフランスの攻撃を完全にはかわしきれなかったようだった。

——あの執事相手に無傷では済まないか…。

それにしても、あの執事には驚いたな。
まるで同じ顔じゃんか。

少年は眉間にしわを寄せ、痛みに顔をゆがませながらゆっくりと歩いていった。

町はずれに行くと、そこには空に届きそうなほど高く積まれた瓦礫があった。

それは家屋の破片であったり、車のドアであったり、たまにみられる不明な歯車を除いては現実世界のそれと同じものが殆どであったが、一つ異なるのはそれらが無臭であることだった。

――どうせ再現するなら中途半端に手を抜かなかつたらいいのに……まあ、どうでもいいけど。

誰も居ない世界の果てで無機質な山を見上げ少年はぼそりと呟くと、ふと真っ直ぐに銃口を見つめてる先程の少女の顔が思い出していた。

遠くの市街地で修復ロボットが発動されたい、サイレンが鳴った。

雪洞たちが街の修復を始めたのだろう。

その音で我に返った少年は瓦礫の山を仰ぎ、タタンツとリズムよく登っていった。

少年はリズム良く瓦礫の山を登っていく。
が、どうやら足場が悪かったらしい。

がくつと体が回転すると少年はお尻から地面に落ちた。

追って落ちてきた瓦礫が彼の顔に当たる。額から少し血が流れた。

彼は袖でそれをゴシゴシと拭いてみたが、そんなことで血は止まるわけもなく、

顔にくっつきりと赤い線ができてしまった。

——はあ…痛い。お腹も痛い。

お尻もいたい。絶対青くなってる。

顔も痛い。顔は傷になってもいいけど、お尻が一生青かったらどうしよ。

これじゃあ、さっきのワガママな依頼主と一緒に…。
嫌だなあ…。

少年は立ち上がってふらふらと歩き始めた。

と、目の隅に何か黒い物が見えた。

それはミイラ化した遺体であった。

「君は…」

はっと気づいたような顔をし、少年は手をポンとたたいた。

「友人のリオン君？久しぶりだね。

死んだんだね。ご愁傷様。成仏するんだよ。」

少年は膝を抱えて座り込むと、手を合わせた。

「あ、おばさんにお悔やみいわなきゃ。」

彼は座ったまま電話を取り出した。

「あ、もしもし？」

「はい、此方…」

電話にでたのはリオン本人だった。

「あれ？リオン。なんだ生きてるんだ。じゃあね。」

それだけいうと彼は一方的に電話を切ってしまった。
くるっと死体に向き直ると、

「で、君はなんで死んだの？」
と話しかけている。

勿論死体からの返答は無かった。

「ま、いつか。」

膝をポンポンと叩いて少年が立ち上がった瞬間、ポケットの電話が
なった。

ディスプレイを見ると『リオン』と書かれていた。

「なに？」

少年は機嫌が悪そうな声で答えた。

「『なに？』じゃねえよ。
寧ろお前が何なんだよ。」

「はあ……。だから何なの!？」

「いや、だからお前がだな」

「用事ないならきるね。」

サラリというと、彼は電話を電源から切ってしまった。

「バイバイ。」

小さく手を振って死体に別れを告げると、少年はごそごと足場が丈夫そうな箇所を探し再び登り始めた。

ある程度まで登ると、

「ふう」

といったため息をついてから、

少年はおもむろに両手をつっ込みガシャンツと掻き分けた。

ガラガラガラ……

と歯車が落ちていく音がして、現れたのは少年の半分ほどある空間の裂け目であった。

三日月型のそれは、空にぱっくりと穴をあけたようにこちらを向いている。

——相変わらず、変な出口。

途中一度だけ振り返り後ろを確認すると、少年は潜るように亀裂に入ると姿を消してしまった。

青い海に白い砂浜。

カシヤリ、カシヤリ、とシャッターを押す音と、誰に向けるでもなく「きやはは」とはしゃぐ声がする。

その日は夏は海水浴を楽しむ人々で満杯になるはずの海辺が一面貸し切られ

大手企業の広告撮影会が行われていた。

ばしゃつと水しぶきの音とともに振り返る、太陽の様な笑顔の少女。それを囲む人々からは時折感嘆の声がもれた。

ユリシス・セバスチャン（U l i s s y s s ・ S e b a t h c h a n）は電話を切ると、撮影を終え戻ってきた長身の少女にガウンをかけた。

「お疲れ様でございます。アリエル様。」

アリエル・アンダーザシー（A l i e l ・ U n d e r t h e s e a）はテーブルに並べられた飲み物を手にとると、執事の差しだしたサングラスをかけた。

「ユリシス、彼から連絡は来ましたか？」

「はい、たった今セキュリティキーを手に入れたとの報告がございました」

「そうですか。これで準備は整いましたわね」

アリエルはにつこりと微笑むと「あの方に感謝しなければなりませんわね」と言った。

「御言葉を返して申し訳ございませんが、アリエル様、突然現れあのように無礼講な態度の男性を信頼するのは、いささか危険であると思われます」

「まあ、セバスチャン。その様に人を疑ってはいけませんよ」

アリエルはユリシスの顔を覗き込んだ。

「申し訳ありません、アリエル様。

しかし、主人の危険遭遇率が1%でも残る限り安全対処に勤めるのが私の役目でした。

しかし、アリエル様のおっしゃる『人の理』も新たに理解する必要があります。応用能力が高まりますまで今少しお待ちください」

頭を下げるセバスチャンをサングラスに映しながらアリエルは答えた。

「良いのです、セバスチャン。こうして人は学んでいくのですから。そしてもう一つ、あなたの辞書に付け加えておいてください。」

『The ends justify the means.』

目的は手段を正当化する…私はこう解釈しています。

目的には手段を選ばない、利用できるものは有難く利用させて頂けばよいのだと」

アリエルが口角をあげたその時、中年の男が手を擦りながら女に近づいてきた。

「いやあ今日もお綺麗でございます、アリエル様。

この度はお忙しい中我が社のプロモーションにご協力頂きありがとうございます。今日のCMは3カ月後に…」

アリエルは立ち上がると「こちらこそ光栄ですわ」と男の手をとった。

はじけるような笑顔、白いガウンから覗く白い肌、胸元から覗く花柄の水着に男は鼻の下を伸ばしている。

男から夕飯の約束を誘いを受けながら、アリエルはスケジュールを確認する。

そしてユリシスの耳元で

「例の手筈を進めてください、今夜中に」と囁いた。

3 - 2 (後書き)

セバスチャンの髪は赤です、もちろん。

「これは…」

ぶつんと音がして暗くなっただかと思うと
タブレットの画面に再びケイマ邸の風景が現れた。

「同じじゃない」

「お待ちください」

フランスと雪洞が食い入るように見つめていると、突如画面に映る部屋のドアがギイッと開いた。

「動画!？」

いつの間に撮られたの!？」

「これは録画ではありません。

おそらく…」

空いたドアから入って来たのはシャナだった。

パタパタ…と部屋を走り回る音がして、
追いかけるようにシャーロットが部屋に入ってくる。

『もう、どこに行ったのシャナちゃん？

お姉さんお仕事があるのよ、ほら、出ておいで。

お嬢様がもうすぐ帰ってきますよ』

シャナは部屋の棚に隠れると、きよろきよろとシャナを探すシャーロットを盗見て
キャツキヤと笑っている。

シャーロットはそれに気がつかないようであった。

『もう、この部屋じゃないのかしら？

遊び相手が居ないとすぐこれなんだから…。

シャナちゃん！』

シャーロットは部屋を出て行った。

雪洞とフランシスは顔を見合わせた。

「これは、今現在の屋敷の様子ですね。中継映像です。

一体何のために、そしてどうやってセンサーをかくぐったのか…」

しばしの沈黙が流れ、雪洞は思考の渦に懸命に自らを沈み込ませる。

- 精神被害訴訟

篝の不調

社長の訪問

少年の奇襲

屋敷の映像

センサー…

センサー??

ぱきんっ！

と頭の中で、何かが音を立てて動き出した。

その瞬間、すべてがパズルのように

次々と組み合わせれ

やがて一つの地図の様に、言葉の地図を作り上げる。

「やられたわ!!!」

雪洞が突如、声をあげた。

「戻るわよ、フランスス！」

急に血相を変えて走りだした雪洞を慌ててフランススが追いかける。

「一体どういことですか？」

雪洞は走り続ける。

「…あのタブレットが落ちていたのは偶然じゃないわ、必然よ。

普通では開けられないデータが入れていたのも。

一枚目の写真はフェイクよ。

問題は、私がタブレットに触れて、セキュリティのかけられたデータを開示したことだったんだわ。

なかなか開けられないデータ、それ自体が罠だったのよ。

「開きそうで開かないデータ…なるほど」

フランススも雪洞の思考についていこうと必死で頭を巡らせる。

「お嬢様に解析させる、つまり長時間タブレットに触らせるといことが狙いだっただけですね。」

不審な少年との接触後なら尚更、お嬢様は解析に躍起になりますね」

「そうよ。そしてそこには、私の指紋を読み取るセンサーが埋め込まれていたはずよ」

フランスは手元のタブレットを開ける。

かすかではあるが、言われてみればそれらしき物が確かにある。

「そうして私の指紋を読み取って、屋敷のセンサーを解いたの!」

「なるほど…忘れかけていたが、やはりこの人は頭が良い。」

と、心底感嘆しながらフランスは少し尊敬の眼差しを向けた。

しかしそれは、同じく難解な論理を組み立て、かつお嬢様の言動を予測できるほどの

高い頭脳の持ち主で無いと仕掛けられない罠ということだ。

「ですが、そこまでして屋敷の映像を送る目的は?」

「…思い出して。一連の訴訟から始まり、不自然な箸の不調。」

ダメ押しにセキュリティを一時的に壊す、おかげで私たちは」

「まんまと簀に連れてこられたというわけですか」

「そうよ！」

体力の無い雪洞が早くもはあはあと息を切らし始める。

「つまり、私とお嬢様が、一時的に屋敷をあける状態を作るため、ということですか。」

それでは、留守を狙った窃盗ということですか？

それならわざわざ、このような映像を送りつけてくるメリットは？

これではまるで、せっかく出て行った我々の帰宅を促すかのようではないですか！」

フランススが困惑した声をあげる。

「…まだそこまでは分からないわ。」

「ただ、私たちを追いだして、帰宅したてに何かを仕掛けてくるつもりなのは間違いないわ」

「あの少年は？」

簀のセキュリティキーも絡んできましたし、

彼が何やら不可解な言動もしていたのも気になります」

雪洞は一度口をつぐむと、苦虫を噛み潰したように顔をゆがめる。

「…知らないわ。」

とにかく要は、思い通りに踊らされていたわけよ!」

「お嬢様、首謀者の目星はついていらっしゃるのですか?」

「決まってるじゃない!こんな悪趣味なことするやつ、一人しかいないわ!」

と、雪洞がフランスに振り向いたときだった。

画面に映る屋に再びシャーロットとニコラが現れた。

「おい、入れて良かったのかよ?」

「仕方ないじゃない、どうしても会うまで帰らないって言うんだもの。」

大丈夫よ、今回はお一人なようだし。」

ひそひそと話す二人の背後から、若い男が顔を出した。

『よろしいでしょうか？』

『あ！申し訳ございません、どうぞお入りください。』

ただいまお茶をお持ち致します。手伝って、ニコラ。』

『お、おう。』

あゝ、どうぞごゆっくり』

一人になった部屋に入ってきた男は、真中におかれた大きな来客用ソファに座った。

男の顔を見たフランスと雪洞は、思わず息を飲んだ。

男は赤い髪をかきあげ

部屋を見渡すと――

ゆっくりとこちらを見あげた。

『お帰りをお待ちしていますよ。』

フランスス・ド・フィニステール』

「ユリシス…!!」

二人は同時に声をあげた。

「やっぱり、アリエル!!」

あの冷血女、今度は何をする気!？」

画面の向こうで何かを物色するように辺りを見ているユリシスに向かって雪洞が叫ぶ。

「しかしこれで合致しました、常人では組み立てられないようなセキユリテイ、巧妙すぎる罠…」

お嬢様と同レベルの頭脳の持ち主といったらアリエル嬢くらいしか…」

「一緒にしないであんなヤツ!!」

その時だった。

部屋の隅から、ひょこりとシャナが顔を出した。

『お客さん？』

先ほど隠れていた棚に、そのまま入っていたようであった。

シャナはたたたと走り寄ると、ユリシスを見上げた。

『ようこそ！ぼんぼりたんのお家へ！』

ユリシスは一瞬、おつという顔をする、
優しくほほ笑んで言った。

『これはかわいいお嬢さん。』

はじめまして。

ユリシス・セバスチャンと言います。

…あなたが、フランススの妹さん？』

『そうだよ！』

シャナはぼんぼりたんが作ったんだよ！』

ユリスは目を細めると、しばし何かを考えた後シャナを手招きして言った。

『よろしければ、ご主人が戻るまで私と遊びませんか？』

「シャナ！ダメ！！」

雪洞が悲鳴に近い声で叫ぶ。

『いいの！？』

シャナが顔を輝かせ、促されるままユリスの膝に乗った。

ユリスは手袋のまま、シャナの頭をなでる。

「こいつ…何をする気だ??」

そうか、と雪洞は顔を青ざめて呟いた。

「アリエルは学会でシャナに会ってる、

何か仕掛けてきてもおかしくないわ…」

タブレット越しにユリシスを見つめるフランスを置いて

雪洞は再び全力で走り始めた。

3 - 3 (後書き)

その時だった。

部屋の隅から恵永が現れた。

シャナとのかくれんぼの途中、置いて行かれたようだった。

恵永「……………」

ユリシス「……………」

ニコラは屋敷の一室で、精神の抜けたフランスと雪洞の体の番をしていた。

「ちえっなんだよロタのやつ。」

親切心で言っただけだよ」

ユリスに出すお茶を作るのを手伝おうとして、また喧嘩したらしい。

5つ年上のシャーロットが最近どうも気になるらしいニコラは、何かにつけて彼女について回るのだが、

その度に粗相をしては彼女に叱られる日々が続いていた。

「どうせ同じ味なんだから、茶葉なんて大匙も小匙も一緒だろうが。」

あんなに怒んなくても……」

ニコラは椅子に座って足をぶらつかせながら、ぶくつと頬を膨らませた。

「あーつまんない。おれも簞行っちゃおうかなあ。」

ダメって言われてるけど。

…そしたらあいつ探しにくるかな」

何を想像したのか、ニシシシッと笑う。

そして椅子から軽快にピョンッと飛び降りると、

そろりそろりと「Do not touch」と書かれた標識のある
ガラスのドアに近づいて行った。

そっとドアに手をかける。

と、

扉の向こう側後で寝ていた2人がガバッと起き上がった。

「わあっ！」

フランスと雪洞は顔を見合わせ、現実世界に帰ってきたこと確認
するように頷いた。

「あ、御帰りなさい雪洞さん！」

驚いた拍子に転んだ体を起して、ニコラが慌てて声をかけると

「ああニコラ！良かった無事だったのね。

そこで大人しくしてなさいよ！」

と、雪洞はシールドの解除ボタンを押してカプセルを開けるや否や部屋から飛び出して行ってしまった。

続けてフランススがカプセルから出てくる。

「あ、フィニステールさんもお帰りなさい」

ニコラの呼びかけに手で応え、雪洞の後を追う様に走っていったフランススであったが

出口でふと立ち止まってくると振り返ると

「お前はまだ簞に入れないと言っただろう、ニコラ。

後で私の部屋に來なさい、御仕置きだ」

とだけ言って走って行った。

嵐のように去って行った二人の足音が遠ざかるを聞きながらニコラはしばし目を瞬かせていたが、はっと我に返ると

「げえっ、ばれた。

と顔をしかめた。

雪洞が長い廊下を走っていると、厨房から出てきたシャーロットが通りかかった。

「お嬢様、お帰りなさいませ！」

あのう、先ほどお客様が……」

「シャーロット！」

雪洞はシャーロットを見つけると、駆け寄って両肩を力強く掴んだ。

「大丈夫！？ユリシスに何もされてない！？」

「え！？ええ……」

雪洞はほつと息をつく。

・何かされるって……やはりそんなに危険な人なのかしら。

いつも馬鹿にしているように見えたから、少し軽く見てしまったのかも。

やはり勝手に入れてはまずかっただろうか…

少ししゅん、としてシャーロットが主人の顔を見ていると、すぐさま

「シヤナは!？」

と尋ねられた。

「あ、それが、また居なくなってしまったんです。

どこかに隠れていると思うので探し行こうと思っていたのですが…」

それを聞いた雪洞はぐつと口を一文字に結ぶと

「分かった、ありがとう」

と再び走って行ってしまった。

少し遅れて息を切らしたフランシスが現れる。

シャーロットを確認すると、壁に手をつけてほおっと息をついた。

珍しく乱れた彼の姿にシャーロットは思わずドキリと胸が高鳴る。

少し顔を赤らめて、シャーロットは尋ねた。

「あ、フランスさん。簞の方は大丈夫でしたか？」

「ああ、なんとかな」

「それは安心致しました…あの、今お嬢様が血相を抱えて走っていかれたのですが」

何かあったのでしょうか？」

「ああ…厄介な客が来たもんでな。また詳しく説明する。

それにしても…」

ふと立ち止まって、フランスは耳をそばだたせた。

－何かがおかしい

現実世界に戻ったときから、屋敷の異変を感じていた。

まるで何か、目に見えない細い糸が屋敷中に張り巡らされているように、ピン、と空気が揺れている。

通常の人間では感知できないだろうくらいの、ごく微かな高音の電子音が鳴り止まない。

－何かを仕掛けているのか、ユリシス

かすかな悪寒が背筋をなぞる。

シャーロットの視線などまるで気に留めることなく、フランシスは雪洞と同じ道を走って行ってしまった。

フランシスの背中を見送りながら、シャーロットがため息をつく。

・もう行っちゃった。相変わらずお二人とも忙しいなあ。

恐らくユリシス様の居る居間に向かったのだろう。

あれ？でも私、ユリシス様が来たと言ったかしら。

…どうして、ユリシス様が来たとわかったのだろうか？

ちょこんと首をかしげたシャーロットであったが、

・まあ、あの方たちに不可能なことは無いか。

と納得したようにふっと笑うと

「わかりました、とびきりの紅茶をお持ちしますね！」

と二人の背中に向かって声をかけた。

しかし彼女の言葉が、彼らに届くことはなかった。

後に彼らは悔やむことになる。

この時なぜ振り返って一言「来るな」と言っ
てやらなかったのかと。

雪洞が最後の扉を開くと、見慣れた壮麗な廊下が現れた。

――見えた！

あの角を曲がれば、客間だ。

ようやくたどり着いた地上の光にほっとしながら、雪洞は走る。

「はあ、はあ… 広すぎんこの屋敷！誰だ設計したのは」

無論彼女である。

しかしそんなことを考える間もなく、急なカーブに体勢を崩しながらようやく目的地点へと到着した。
ゴシック調の扉を見上げる。

――待っててね、シャナ。

私があなたたちを意地でも守るから、
二度と大切な人を目の前から消したりしないから…

雪洞が、少し錆び付いた金色のドアノブに手をかけようと手を伸ばす。

そのときだった。

ガッ、と、後ろから何者かに腕を掴まれた。

「っ！」

思わず身をこわばらせ振り返ると、大きく肩を上下させてこちらを睨んでいるフランススだった。
ところどころ汚れた燕尾服が、ここに来るまでの壮絶な過程を物語っている。

「なんだ、フランスス。驚かさないでよ」

「ーちつ、もう来たのね。」

雪洞はバツが悪そうに目をそらした。

彼女も今回のユリシスの訪問がただ事ではないことに気づいていた。
フランススのように高周波を感じとることはできなかったが、野性的直観からか屋敷に起こっている異変にも無意識に感じていた。

だから、彼を置いてきたのだ。

「…お嬢様、お待ちください」

「なによ、フランスス！」

フランスは雪洞を無理矢理振り返らせ、息を整えて言った。

「すでにお分かりかも知れませんが、潜在的な危険性が高い状況です。

ユリスからと思われる不審な電磁波が発せられています。

ひとまず私が話を聞いて参りますので、お嬢様様は別室にてお待ちください」

「なんでよ、いやよ！私の客よ！？」

雪洞はフランスの手を振り払った。

「主人が使用人を守らなくて、何を守るの！」

「お嬢様に万ーのことがあったら、誰がこのあと彼等を養うのですか。私が行きます」

「ダメよ、やめて」

「お嬢様、子供の我が儘を言っている場合ではございません」

「我が儘ってなによ！」

「あなたは数兆の金を動かす大企業の経営者なのです。ご自分の抱える責任を自覚なさい」

フランスの鋭利な視線が突き刺さる。

恐らく彼は、本気で”社長”の保身を案じているのだ。

彼の顔はKAGARI取締役補佐そのものになっていた。

そして彼女の非合理的な行動がどうやっても解せぬ、そういう顔だった。

こういうとき、彼が人間ではないことが便利なようで虚しいことだと悉く感じる。

彼の言うことは正しい。

それでも――

「嫌」

「お嬢様……」

「ここは、私の社長としてのプライドなの」

――約束したのだ、誰もが焦がれるような世界一の会社を作ると

雪洞はだらりと下げた拳を、ぎゅうつと握りしめた。

「それに……」

あなたに何かあったら、私はどうすればいいのよ

そう言いかけたときだった。

ドスッ

と鈍い音がしたかと思うと
雪洞は目の前が真っ暗になった。

後頭部にフランススの手刀が入ったのだ。

ガクッと倒れる雪洞の体を支えようと
フランススは近くを巡回する警備ロボットに「医務室にお運びしろ」と命令した。

フランススは立ち上がり、彼の伸長をゆうに超える大きな扉に向かい合う。

バキバキッと拳を鳴らすと
不敵な笑みを浮かべた。

「さあ、行こうか」

ギイッ…と、重い扉が開かれた。

「大変お待たせ致しました」

フランススが部屋に入ると、ユリシスがソファに座って優雅にこちらを見ていた。

シャナはユリシスの膝を枕に寝息を立てている。

「ユリシス様、うちのシャナが大変御迷惑を…」

「いえ、お気遣いは結構です。私もこのような可愛い妹が欲しいものです」

ユリシスはシャナの頭を撫でた。

「ありがとうございます。お誉め頂き私も光栄です。しかし、彼女は遠慮というものを知るべきですね、シャナ、お客様に失礼ですよ。起きなさい」

優しい声でシャナを諭すが、ぴくりとも動かない。

「シャナ…」

そう言つてフランススはシャナを抱きかかえようと近寄った。

「ですから、気遣いは無用だと申し上げた筈です」

ユリシスはお気に入りの伸縮自在のコンパクトステッキを胸ポケットから出し、シュツと伸ばした。

その先端で近寄るフランススを、どんつと押し返す。
鈍い傷みと共にフランススがよろめく。

「おっと、そんなに力を加えたつもりはなかったのですが失礼しました」

ユリシスがポンポンとスティックを叩く。

「懐かしい品をお持ちですね」

フランススも胸元をほろいながら笑みを浮かべた。

「ええ、昔話するにはちょうど良いかとお持ちしました。まあこれは、先日アリエル様が開発されたニュータイプなのですが…」

ユリシスもにつこりと笑うと、朗々とその性能について語り始めた。

手元のわずかな動きを読み取り、しなること鞭のごとし、

指先の微細なタッチから増幅される先端の破壊力はナイフのごとし

…

「ーよくもまあ

とフランススは思った。

その高性能のステッキは、彼の主人であるアリエル嬢の会社から販売された大ヒット商品だ。

変幻自在な機能を持ちながら洗練されたシャープなフォルム、しかし一方でその開発に隠された血塗られた背景を背負うそのスティッ

クは

まさにアリエルの本性そのものを現していた。

雪洞より3つ年上のアリエル嬢は、飛び急を重ねた雪洞の同期かつライバルでもある。

田舎娘丸出しの雪洞の一方で、常に最新のブランドに身を包んだ可愛らしいアリエルはいつも蝶よ花よともてはやされてきた。

雪洞は彼女が嫌いだった。

というのも、色香で周囲を騙しては次々と毒牙にかけていく彼女の本性を知っていたからである。

しかし、「いけすかないヤツ」と思いながらも当初は大して気にも止めていなかった。

一方でアリエルは、常に自分の一歩先で周囲の称賛を集める雪洞をいつも悔しそうに眺めていた。

何故、知能も美貌も併せ持つこの自分よりあんな幼児体型の田舎娘がちやほやされているのか…

異常なまでの嫉妬心がアリエルに沸き上がっていた。

二人の仲が目に見えるほど劣悪になったのは、ちょうどアリエルがこのスティックで一大センセーションを巻き起こしたところからだ。

表沙汰にはなっていないが、その伸縮自在の変幻スティックは、何

を隠そうアリエルの元恋人の発明品であつた。

彼は秀才の集まる雪洞たちの学校で物理学のトップに君臨する期待の星であり

何より、当時から理解者の少なかった雪洞の貴重な友人であつた。

天才には天才同士しかわかりあえないこともあるのだろつ、いつも一人で教室のすみにいた雪洞の隣を、彼はいつからか一緒に歩くようになった。

そんな二人に対し周囲は、「天才同士の最強コンビ」と一層の関心を寄せたのであつた。

そんな彼の様子に異変が起こつたのは、卒業研究の迫る最終学年のことだつた。

「ねえ、雪洞は卒業研究何にするの？」

「…人工知能よ」

「え！？そりやまたなんでそんな壮大なテーマを」

分厚い物理学の本を肩にかつぎ、少年が雪洞を見た。

「ちょっとね、やりたいことがあるの」

同じく分厚い教科書を両腕に抱えた雪洞が答える。

「ふうん。それが何かって、聞いても教えてくれないんだろ？」

「うん。成功するまで、誰にも言いたくない」

少年は笑って雪洞の小さな頭を本でポンポンと叩いた。

「はは、そういうと思ったよ。…お前に俺の手助けなんか必要ないだろうけど、なんかあったら言ってくれよ」

「うん、ありがと。そういうシンレイは？」

「俺は、どこまで機能性を濃縮した小型機器を作れるか、限界に挑戦したいんだ」

シンレイと呼ばれた少年は、分厚い眼鏡の下からまっすぐな瞳で前を見据え、はっかきりとした声で言った。

「そして利益とがなく、社会に普及させたいんだ」

「ははっ、シンレイらしいね。…シンレイならできるよ」

この頃から起業を本格的に考えていた雪洞は、無償で社会貢献を行いたいというシンレイを少し眩しく感じた。

俺も、天下の雪洞に言われたら出来る気がしてきたよー

シンレイも屈託のない笑顔で笑った。

その後、言葉通りシンレイは不可能とまでいわれた100もの機能を僅か10cm足らずの金属に集約するという一大発明を成し遂げた。

おまけに社会性も実用性もあるこの大発明は、学校始まって以来の功績として表彰されるだろうーと、誰もが思った。

各メディアが集まる卒業発表会で、その超高性能機器を手に現れたのはシンレイとーアリエルだった。

一斉にたかれるフラッシュの中、口下手なシンレイをサポートするように、無邪気な笑顔でアリエルは口を開く。

「これは、私と友達のシンレイ君と一緒に考え、協力して作り上げたものです」

ね、シンレイ、とアリエルが彼の指をなぞった。すっかり魂を抜き取られたような顔でシンレイは答えた。

「はい…僕とアリエルの、共同制作です」

数々の質問が飛び交う中、雪洞はただ口をあんぐりと開けてそれを見ていた。

ーそんなばかな！

あの機器は、シンレイが一人で、血のにじむような努力を重ねて作

ったものだ！

そんな雪洞をさらに裏切るように、アリエルは言った。

「私たち、これを新たな生活補助グッズとして発売したいと考えております。ね、シンレイ」

「うん…僕はこれを、商品化します」

うつろな瞳でシンレイが頷いた。

雪洞は耳を疑った。

「――バカなバカなバカな！

利益とか商品とか、あんたの一番嫌いな言葉だったじゃない！

雪洞は出演者席から立ち上がって声を張り上げた。

「どうしちゃったのシンレイ！

崇高な工学発明を金のために行うべきじゃないって、いつも言ってたじゃない！」

慌てて周囲から宥められる手を振り払い雪洞は叫んだ。

「そんな女のために、信念を捨てたの！？そんな馬鹿だったのあなたは！？」

すると、それまでずっと下を見ていたシンレイが顔をあげて雪洞に言った。

「雪洞…僕の気持ちは、君にはわからないよ」

これは後から分かったことだが、アリエルは奥手な彼をあの手この手で誘惑した後、発明家なら絶対口を割らないはずのメカニズムを枕元で聞き出したとのことだった。

ついで、共同起業の話を夢物語のように説いて聞かせ、現在まで続くアリエルの会社を立ち上げさせたのだった。

雪洞の起業に先手をうつての、雪洞への明らかな挑発だった。

シンレイがアリエルに利用されている、それは内部事情を知る誰の目にも明らかだったが

一度捕まえてしまえばもうお手のもので、純朴なシンレイなどひとたまりもなかった。

シンレイはその後、人が変わったように金をアリエルにつき込んだらしい。

全財産と、世紀の発明特許を横取りされた彼は、次第に憔悴し、その後自ら命を経った、と風の噂で聞いた。

苦虫を噛み潰したような顔でフランススに一連の話を説明しながら、雪洞は

「自業自得よ、あの馬鹿…」
と言った。

こうしてこの一件は、アリエルという少女の美しさがもたらした悲劇の一端として人々の記憶の片隅にしまわれることとなった。

これは余談になるが、この話を聞いてフランシスは、なにかしらまだ残っているような主人の表情を不審に思いこの件について極秘に調査を進めた。

そして実際のところ、元々の原因は他でもない雪洞にもあったことが判明した。

シンレイは雪洞が好きだった。

卒業の迫る日、彼は出来上がった発明品を手し、雪洞に想いをつげた。そしてあっけなく、振られてしまう。

気落ちするシンレイのもとに現れたのがアリエルであった。

アリエルは優しい言葉を巧みに操りシンレイの心の隙間に入り込んで行く。

それでも元は堅気な科学者、なかなか心を開かないシンレイだったがアリエルの一言を聞いて呆然と立ち尽くした。

「知ってる？雪洞って、恋人がいるのよ。」

人工知能の研究も、その人に捧げるんですって」

「ところで」

ユリシスの声でフランスははっと我に返った。

「肝心要の雪洞・Ｆケイマ様の姿が見えないようですが？
私は彼女に会いに来たのです」

ユリシスがステッキをくるりと回して縮めると、
胸ポケットに閉まった
。

フランスは左胸に手を当て

「大変申し訳ありません、主人はただいま心身ともに調子を崩して
おりまして

別室にて休養中でございます」

と頭を下げる。

「それはそれは」

ユリシスは何かを見透かしたように、フランスを見つめた。

「確か今日は、裁判の日でございましたね。

学会でも話題にのぼっておりましたゆえ、存じておりますよ。
篝のセキュリティに欠陥がありましたそうで」

「欠陥の有無につきまして目下探索中でございます。

大きな声では言えませぬが、世界規模のわが社ともなりますとあの手この手で莫大な財産に近付こうとする輩が居るものですから。

この世界ではそれも事が単純ではないことを、お分かりでしょう」

お宅のような小規模経営が時折羨ましく思われます、とフランスは微笑んだ。

「…順調に経営が進んでいらつしやるようで何よりです。しかしあまりに多忙なスケジュール、いくら有能社長と言ってもそこは少女、ついに倒れましたか」

ユリシスは憐れむように言った。

「おつとその点は、責められるべきは雪洞様ではございませんね。

私などは企業経営と芸能活動を両立なさるアリエル様の一挙手一投足に細心の注意を払っておりますゆえ、ここ数年我が主人は風邪の一つもひいておられません。

主人の体調管理は、執事の役目でございますよう」

フランスはぐつと言葉に詰まった。

体調管理どころか、先程主人を殴って気絶させた張本人である。

言い返さないフランスを見て、ユリシスの言葉はさらに続く。

「しかしいくら体調が優れぬとは言え、客人が来ているのにたかが

同じ敷地内、顔も出さぬというのはこれいかに。

世界規模の顧客をお持ちな経営者としては、大層な無礼講ではありませんか。

そんな脆弱なトップが率いる会社なら、つぶれてしまつのがオチでしょう」

どうだ、と言わんばかりの顔である。

「申し訳ありません、言付けは私が承りますので」

言葉とは裏腹に強気な態度でフランススは言い返した。

「…この度は誠に申し訳ありません。しかしなにしろ、裁判にしる御訪問にしろ、急でございましたためご了承ください。私で承れない後用事でしたらまた日を改めて、次は双方の都合の良い日に…」

そう言つてフランスは背広の裏ポケットから手帳をとりだした。

「貴方は、言葉が通じないのですか？」

いい加減じれてきたようにユリシスが苛立たしげに声をあげる。

フランスは手を止めてユリシスを見た、

彼は膝に頭を乗せていたシャナを抱え直すと、不気味に笑みを浮かべた。

「シャナちゃんは可愛いですね。言うことも良く聞くし…ふふふ。いや…本当に可愛い」

「シャナを離して下さい。
彼女は今から勉強の時間なのです」

フランススが歩み寄る。

「勉強なんかしたくないよね？女の子は可愛ければいいのだから、シャナちゃんは十分だ」

「シャナ、私は馬鹿な妹は嫌いですよ」

「君のご主人様は、どうしているのかなあ？」

ユリシスは寝ているシャナに語りかける。

「シャナ、フルーツタルトがあるから起きなさい」

「ご主人様に会いたいねえ」

「シャナを、起こして下さい」

「ああ…雪洞様に会いたいなあ
あえなければ私がアリエル様に叱られてしまう」
フランススの伸ばした手がシャナに触れようとした時だった。

ユリシスの右手がゆっくりとあげられた。

そして -

バンバンッ！！

キーン、という耳鳴りとともに
鋭い痛みが頬に走る。

フランススがゆっくりと顔をあげると、
ユリススの右手には微かな煙をあげる、小型の銃が握られているの
が見えた。

ご丁寧に消音機能までついた、エアガンだ。

ということは発射されたのは銃弾ではなく、高圧で圧縮された空気。
しかし、旧時代のそれとは殺傷能力が桁違いでもある。

いくらロボットでも、あたればそれなりのダメージだろう。

フランススは身動きひとつせず、正面からユリススを見据えていた

「気は確かか？」

「ふふ、少しでも動いたら撥ね飛ばしてやろうと思ったものを」

ユリスが再度ゆっくりと引き金に指をかける。

フランスの右耳からうつすらと人工血液が滲む。

「ちっ

ギリギリ逸らすこともできないのか、下手くそが…

フランスがじりつと足を動かす。

「おおっと、動かないでくださいね。可愛い可愛い妹さんを私が頂くことになってしまいますよ」

ユリスは左袖からも銃を取り出すと、フランスに向けた。

「ーこいつ、ついに狂ったか

フランスが思うより早く

ユリスは微塵の躊躇もなく引き金を弾いた。

バンバンバンバンバンッ！！

矢のように鋭い空気の軌道がフランスの髪をかすめていく。

これほどの痕跡を残せば、後から言い逃れはできない。

無論、監視カメラにもしっかりと映像として保存されているはずだ。

突然過ぎる

直接攻撃

――こいつ…何がしたい？

「頭は確かか？

いくら音を消しても、すぐに防犯ロボットが来るぞ。

それとも、ここを死に場所を選んだのか？」

すっかり感情が顕になった顔で

フランススが睨み付ける。

「口の減らない方ですね、私は捕まりませんよ」

全く臆することなく、ユリシスは再度銃口を向ける。

「お前、本気で俺に勝てると思っているのか？」

答える代わりにニヤリと笑うと、

ユリスは

「楽しみにしててください、面白いものを見せてあげますよ」

と、言った。

・面白い、もの。

わざわざ訴訟を起こして篝火に火をつけ我々を呼び出して
更に奇妙な少年を使って屋敷の写真を撮るなんて面倒なことをして
まで

行おうとしている何か

そもそもセキュリティシステムに侵入したのはこいつらか？

仮にも雪洞のライバルと言われているアリエル嬢なら不可能ではな
いかもしれない

しかし何かが足りない気がする

そう言えば、あの不可解な電子音

あれも仕掛けの一つということなら

これだけの愚行も

あながちハツタリでもないかもしれない――

「生憎シヨ―は嫌いだが」

フランシスは言った。

「きつと好きになりますよ。魔法のように消えてなくなりますから」

―消えるだと？
何を？

そして再び、
ユリシスの指が引き金にかかるのが見えた。

バンッ！

という音より早く
フランシスは手元にあつた椅子を引き寄せる。

無惨にも犠牲となった真つ赤な椅子が
紙吹雪のよあに粉々にくだけ散っていく

「そんなもの無駄ですよ！」

ユリシスが再び引き金に指をかけた
その瞬間

飛び散る破片に一瞬気をとられたユリシスの懷に、
フランススが飛び込んだ。

ひゅおつ　と風音が鳴ったかと思うと

地を抉るようなアッパーがユリシスの顎に直撃する。

バキッ

と鈍い音がして、ユリシスはシャナもろとも倒れこんだ。

「こうなったらこちらでも実力行使と行こう」

頭上からフランススの恐ろしく低い声が聞こえるが
体が動かない。

「社会の序列どころか力の差も分らないようだな」

ぴつ、と顔についた赤い破片を弾き、フランススはうずくまるユリスを見下した。

「そんなに少女が欲しいなら、主人に作ってもらえ」

更にユリスの腹部を蹴りあげる。

ユリスの両手からカランカランと銃が落ちた。

「かはっ！」

「何を企んでるかしらんが
ネタばらしの時間まで待つてやるつもりはない。
さっさと吐いてもらおうか。

これまではまだ可愛いものと目を瞑ってきてやったが
少々おいたが過ぎたな。

「ここらでお灸を据えといてやる」

フランススが袖もとに忍ばせた短刀でユリスの肩を突こうとした

ときだった。

ユリシスは自分の下敷きになっているシャナをガシツと掴み
胸元まで乱暴に引き寄せた。

そしてフランスに向き直ると

「これが見えませんか！」

と叫んだ。

「なっ、！」

フランスの動きが一瞬止まる

ユリシスはかさず胸元から新たな武器を取り出した。

ばちばちつと青い電流の走る棍棒である。

「…っ」

「ははははは！」

目の前にシャナの体をちらつかせられるたびにどうしても一瞬行動の遅れるフランススは

ユリシスの怒涛の攻撃を避けるので精一杯だった。

「ほらほらほらどうしましたか、先程の勢いは！」

ユリシスはいくらフランススに劣る機能と言えど腐っても世紀の天才と言われるアリエルの作った超高性能ロボット
そこらの人間よりはよっぽど戦闘能力も高い。

ハンデがあるとは言えかのフランススを追い詰めるほど俊敏に、

右へ左へと棍棒を振り回していく。

「で、社長には会わせていただけ…」

ユリシスは体勢を崩したフランススの手を蹴りあげる。

短刀が空を切り、はるか向こうでカシャンと落ちた。

「ますか？」

ユリシスは顔を近付け、フランススに笑ってみせた。

しかし目は笑っていない。

フランススはユリシスを睨みつけた。

「…無理だと言ったら？」

「貴方の妹君がどうなっても知りませんよ」

ユリシスは彼の左腕の中で、だらりと両腕を下げ眠っているシャナを見遣った。

「くそ、防犯ロボットは何している
監視カメラは？」

苛立たしげにフランスが天井を見上げる。

「おっと、余所見をするなど余裕ですね」

ユリシスがぶんと棍棒を振り上げた。

「何のために、あなた方を追い出したと。
屋敷の回路は少々、手直しさせていただきました」

「チッ」

「やはりあの電磁波か」

ひらりと交わしながらも、後退するしかできない自分な憤りがつのる。

――シャナさえいなければ…

フランススは考えた。

シャナはロボットだ。

最悪、代わりを作れないこともない。

確かに、今のシャナとは別物にはなる。

ロボットといっても、そこには蓄積した経験、環境が性格や能力に微妙な差異を与える。

特にお嬢様の作った人工知能は従来のそれとは異なる複雑で多様な成長とはを遂げるのだ。

意志をもち、時には主人の命令を拒否できるまでの人格を持つ――もちろん、主人を裏切ることとはできないが。

一方ユリシスは、主人の命令に絶対従順、自身の意志で行動することができないという一段階遅れた人工知能だ。

シャナはあのような拙い喋り方をしているが、潜在的な学習能力や成長速度はユリシスと比べものにならない程高いとも言える。

しかし、

お嬢様の代わりはいない。

我が社の損益を考えるなら、社長であるお嬢様に何か起こることが一番の避けるべき事態、それは火をみるより明らかだ。

この会社はお嬢様の頭脳だけで此処まで拡大し、維持できているといつても過言ではない。

一執事としてもここは迷わず主人の保身を優先すべきだ。

多少の犠牲はやむを得ない

しかし――

フランスは雪洞が口にこそ出さないが、自分を慕う屋敷の者をとて大切に思っていることを知っていた。彼等への愛情が、彼女の大きな動力であることも。

フランススの思考回路が更に高速で回転する。

「ーもしもここでユリシスを倒すことを第一に、シャナを捨てたら何が起こる。」

お嬢様は間違いなく数日、いや数カ月、いや下手したら1年はシヨツクによる心身の不調を来すだろう

それは会社の経営に計り知れない悪影響をもたらしかねない

それならユリシスがシャナに手をかける前に、シャナを救い出せば…

いやそれは無理だ、彼は俺の不審な動き一つで躊躇いなくシャナを壊すだろう

「いつそーか八か一度お嬢様を呼ぶか…」

フランススは終わりの見えない思考を止めた。

「など、」

愚問！！」

防戦一方だったフランススが突如地面を蹴りユリシスの懷に飛び込み
両腕を掴み骨が折れるほどの強さで締め上げた。

「貴様も倒して、シャナも助ける！」

フランススの怒鳴り声が響く。

「ぐっ……！」

目にも止まらぬ早さで武器ごと腕を捻りあげられ、
ユリシスが呻き声をあげる。

「シャナ、起きろ！！」

ユリシスの腕から解放され、落ちていくシャナに向かってフランス
スが叫んだ。

しかし…

「馬鹿が」

掴んだ腕はいつのまにか武器を持ち直し
棍棒の先端がフランスの手に当たる。

同時に強力な電流がフランスの体に流れ込んだ。

「ぐああああああ！！」

バチバチッという火花が体中に飛び散り、フランスがドサッと倒れる

「ふ…貴方には分かりです。

こんな古典的な方法に易々と乗ってしまうとは。

少々冷や汗をかかれましたがそれも私の慢心ゆえ。

あなたを買い被り過ぎていたようで」

ユリシスは容赦なくフランスの頭を蹴飛ばした。

フランススは動かない。

「この調子だと、わざわざあの男の力を借りなくても
そしてあんなよくわからないモノを使わなくても
雪洞・F・ケイマなんて瞬殺でしょう」

と、ユリシスが高笑いしたときだった

「それはどうかしらね」

ユリシスは一瞬の悪寒の後瞬時に体を振り向かせ

飛び込んできた光景に息を飲んだ。

――しまった！！

開かれた窓のそばで、

シヤナを抱えた雪洞が

風に髪をなびかせ悠然と立っていた。

騎士の鎧を被った大きな警備ロボットを3体
両脇とその背後に引き連れ

雪洞は人形のようにじっとそこに立っていた。

ユリシスを射竦める瞳からは、怒りも恐怖も感じられない。

――しまった人質を奪われたか

どくん、どくん、と心臓が脈うつのが聞こえる。

ユリシスの頭に、緊急事態発生、の文字が浮かんた。

――いや、しかし大丈夫だ

執事はしばらく動けまい、この少女だけなら他愛ない

次第にに静まる鼓動を確認しながら、ユリシスは不適な笑みを取り
戻した。

「ふっ…ここで雪洞・F・ケイマ様の登場とは、願ってもないです
ね。

元々、貴方に用があったのですから。

フランスさん、死なずに済んで、良かったですね」

足元に倒れるフランススを爪先で小突く。

雪洞を挑発するように、ユリシスはニヤリと笑った。

しかし雪洞は興味無さげにフランスを一瞥すると、彼女の腕で眠るシャナに向き直った。

「シャナ？ シャナ？」

- ふん、瀕死の執事には関心無しですか
随分肝が据わっている、さすがはKAGARI社長といったところ…

再び速まる鼓動を感じながらも、ユリシスは言葉を続けた。

「寝ているだけですよ。

少しばかり、深い深い眠りについて頂いております。

…いつ目覚めるかは、あなた次第になりましたが」

雪洞は何か考えるようにシャナを見つめると、

「そう」とだけ言って

傍らの警備ロボットに「シャナを彼女のベッドに」と命じた。

ガシャン、

と仰々しく頷いて、小さな幼女を抱き抱えたロボットが部屋を出ていく。

「…治療法を教えてもらわなくても、ご自分で治せると」

「私を誰だと思っているの？」

ようやく雪洞の表情に変化は起こる。
ひどく冷たい、微笑みになった。

そしてユリシスの左腕を指差すと、蔑むように言った。

「その手袋の下、擬似ニューロンを破壊する磁気が入っているわね。愛撫のごとに神経回路に作用させて、段階的にシステムダウンさせた」

ユリシスが目を見開く。

「だけどお生憎様、脳細胞の復元なんて私にとっちゃお茶のこさいよ。」

技術も設備も私は常に最先端なの。

一晩もあれば簡単に治せるわ」

抑揚の無い、しかし力強い声で雪洞がユリシスを追い込んでいく。

「ふ…それは大変失礼を。さすがは雪洞・F・ケイマ様」

ユリシスはぼとり、と手袋を落とした。

砂鉄が入っているかのような鈍い音が響く。

「ー惑わされるな、落ち着け

状況は明らかにこちらが有利なんだ

何体警備ロボットを連れて来ようが、フランス以外は敵ではない

「しかしこちらの、フランス様の方はいかがでしょう。

生物学で首席にもなられたことのあるアリエル様が開発なさった電磁気ですから、

暫くは痺れが残ると思われますよ。

しかしなんなら、それを内部から早急に打ち消す薬を…」

ユリシスの言葉を全て聞かずして、雪洞は倒れるフランスに声をかけた。

「だってよフランス、どうする？」

わずかに痙攣する体のまま、フランスが顔をあげる。

「恐れながらお嬢様、貴方様は馬鹿です。

来るなど申し上げた筈ですよ。私は何のために居るとお思いですか？飛んで火にいる夏の虫とはまさに…

私の努力をなんだと、くっ…」

端正な顔立ちが痛みで歪む。

しかしフランスは力を振り絞って弱々異しく立ちあがった。

そんなフランスを一瞥すると、雪洞はもう一体の警備ロボットに命じた。

「フランスを別室に」

「恐れながらお嬢様、私に逃げると申すのですか」

フランスが声をあげる。

「執事が主人を置いて逃げるなど、許されません！
私の存在意義を貴方は…」

そう言いかけた時だった。

フランススが、雪洞の顔を見て、はっとした。

「これは…」

つかつかと雪洞が歩み寄る。

「今の状況ではどの道役立たずよ。
さっさと連れて行きなさい」

「お、お嬢様!？」

雪洞はフランススを強く睨むと、思い切り腹を蹴飛ばした。

「うぐっ」

「さっきの仕返しよ」

雪洞が顎で合図をすると、
警備ロボットは倒れ込んだフランススの肩を持ちあげ
ずるずると引きずるように運んで行った。

残されたユリシスと雪洞が、しばしの沈黙の後視線を交わす。

ユリシスはごくりと唾を飲んだ。

「雪洞・F・ケイマ、何を考えてる？」

開かれたままのドアからかすかな風が吹き込み、
ユリスの赤い髪を撫でる。

それに促されるように

「邪魔者も去りましたところで、本題に入りましょう」
とドアノブに手をかけた。

すると雪洞がすつと近づき

「お客様に悪いですわ」と一足早くドアを閉めた。

部屋はついに、2人と一体の警備ロボットのみを残した密閉空間となった。

「さて、お話を伺いましょう」

雪洞がにこりと笑ってソファに座った。

どうぞ、とユリスをその向かいに座るよう促す。

ユリスも懸命に表情を整えて答える。

「本日は我が主人、アリエル様の託を預かって参りました」

「彼女はお元気？」

「ええ、お陰様で」

「最近、学校にいたところと違ってお会いする機会が減ったからさ
みしく思っていたのよ。でもテレビで見かける機会は増えものだから、
なんだか変化感じだわ。芸能活動も順調みたいね」

「はい」

「会社の経営と合わせて、二束の草鞋を履くなんて私には真似できないわ。相変わらずあの人は器用ね」

「ええ、アリエル様は実に多岐にわたる才能をお持ちでいらっしやいますから」

「そうね。カメラの前に立ちながら、カメラを人の家につけるなんてなかなかできないわ」

雪洞がにっこりと笑う。

「今回は結構頑張ったじゃない。私も少し冷や汗かかされたわ。あの規模の火事を起こすなんて、どうやったの？」

ユリスもつられて笑う。しかしどうしても、顔がひきつる。

「火事？なんのことでしょう、どこかでまた事件でも？」

「そうなの、ちょっと簞でね。ふふふ」

「簞で。それはまた、大変でございましたね。はははは」

人外の力を持ったロボットと、非力な人間の少女ではどちらが有利かなど火を見るより明らかだ。
それでも何故か、胸騒ぎが収まらない

それほどまでの、威圧感。

――面倒が起こる前に、早く終わらせてしまおう

ユリシスは表情を引き締めると、雪洞に向き直って話し始めた。

「雪洞・F・ケイマ様。単刀直入に申し上げます。

アリエル・アンダーザシーからのご提案になります。
簞の所有権を、わが社にお譲り頂きたい」

ユリシスはまっすぐに雪洞を見た。

弱冠18歳の少女は、眉一つ動かさず悠々とこちらを眺めている。

「それはまた、急ね」

「お譲り頂く、と言いましても、形だけのもの。
つまりお貸し頂くのは名義だけでございます。

ご存知の通り、わが社はこの二年で飛躍的な進歩を遂げて参りました。

市場の占有率、スポンサー獲得数は歴史上でも稀にみる速度で上昇していることは、世界経済アナリスト連盟からも公式に認められているのはすでにご存じかかと思えます。

ゆくゆくは、貴社に追隨できる唯一の企業となるだろうと社員一同自負しております」

「同感だわ」

「それもひとえに、我が社の総取締役であるアリエル・アンダーザシーの類稀なる人望の高さ、経営者としての才能ゆえでございます。現在わが社で働く人数は、全世界で約30万人。ここまで広い拠点、人材を各国に持つ企業もなかなかおりませんでしょう」

「まあ、もうそんなに大きくなったの」

「一方、貴社KAGARIの雇用者数は、どのくらいになりますでしょうか」

「実質正式な社員とは、私とフランススだけよ。強いていえばこの屋敷の者たちも含むかしら」

「そこでございます。」

これほどまで多大な影響を世界に及ぼしていらっしゃる企業を、それだけの人数で

むしろ雪洞・F・ケイマ様お一人の力で統括していらっしゃるのには驚愕以外の何物でもございません。

しかし、果たしてそれはいつまで存続可能なものでしょうか。

この度の訴訟問題、簞での不祥事、更には今後いつコントロール不可能な事態が起こるやも分かりません。

簞の利用者が増えるに連れ、そのシステムも同時に発展していくも

のと思われますが

それは同時に、潜在する危険性を高めるということでもございます。

つまり、今後の貴社の更なる発展を望むのであれば、これまでのようなワンマン経営はもはや限界では無いか、と
アリエル様は心配していらっしゃるのです」

「そうね。そろそろ一人でやるのも大変になってきたと思っていたところよ」

雪洞は足を組み直して言った。

ユリシスは身を乗り出して言葉を続ける。

「そこで、ここから、アリエル様の提案でございます。

繰り返しになりますが、お譲り頂くのはあくまで名義だけでございます。

実質は協同経営という形で参加して頂きます。

経営や雑多な実務は全てアリエルカンパニーの方でバックアップ致しますので、

雪洞様そのような余計なものに惑わされることなく、これまで以上の時間と労力を持って簞の発展に従事なさることができるのでございます」

「つまり、わが社のスポンサーになって下さると?」

「資金の提供に加え、人材も。

更にはフィジカル面のならず、開発におけるソフト面での協力もさせていただきます。

「

雪洞がくすりと笑って椅子に肘をかけた。

「そういうお話は、お断りしておりますの。簞は私の力だけで動かしていくわ」

「雪洞様が、他人との共同作業をお好みでないのはアリエル様もご存知でいらっしゃいます。」

しかし、今後もずっと雪洞・F・ケイマ様一人で経営を続けていくことが不可能なのは明らか。

そうになりましたときに、この世界で唯一その協力者となることのできるのはい

古くからの友人であり、雪洞・F・ケイマ様に劣らぬ知能を持つアリエル・アンダーザシーだけでございましょう」

「そうね。可能性だけで言えば、彼女が唯一の候補者になるかしら。0%か1%かの違いだけだけれど」

「代わりにこちらが求めているのはその名義だけ。」

それも、アリエルカンパニーという名前と、更に各プロモーションにアリエル様を起用して頂くことだけが、こちらの条件でござい

ます。着々とその人気を上昇させておりますアリエル様が全面に出て宣伝を行うことは、

更に貴社にとっても多大な利益となることと思われま

す。「彼女の人気は今、飛ぶ鳥を落とす勢いですものね」

「簞の開発から二年、起業から一年たった今こそがまさに、岐路でござい

ここで一つ、ご考慮頂けませんでしょうか。
決して悪い話ではないと思われます。世紀の天才少女二人が手と手を結ばない、これを世界の財産の無駄遣いと言わずしてなんでありましょうか」

カタカタカタン、と風に揺られた窓が鳴った。

二人は不気味な笑みを浮かべたまま、何も言わず見つめ合っていた。

雪洞は眉を少しあげ、再び足を組み直した。

「お断りしますわ」

そして、さも可笑しそうに声をあげて笑う。

「ここまでして、何を言いだすかと思えば、協働経営ですって？
笑っちゃうわね」

「…やはり考えては頂けませぬか」

「ごめんなさいね。アリエルにこう伝えて

『おとといいらっしゃい』って」

そうですか、と言ってユリシスは目を細めた。

「そういっだろうと思っておりました」

そうしてゆっくりと立ち上がる。

「まあ、もうお帰り？」

「まさか。実はもう一つ、お聞き頂きたいことがあるのです」

——残るは雪洞と、

私よりはるかに弱い一体の警備ロボットだけ

十分だ

いける

「残念です、雪洞・F・ケイマ」

ユリシスはそう言つと、耳に両手を当てた。

そしてゆっくりと、何かを口にする……

「貴方を、別の世界にお連れします……」

そのときだった。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。！！！！！！！！

雪洞が大きく目を見開く。

そして彼女の体から、けたたましい警戒音が鳴った。

はっ　としてユリシスが顔をあげると

パカッという音と共に、雪洞の右手が地に落ちた。

ユリシスは目を見開く。

そして人形の様にはかっとな開かれた口からは
小さなスピーカーが覗くの見えた。

「残念だったわね、ユリシス」

ぱつと振り返ると、ドアもとに立っていたあの大きな警備ロボット
から

聞き覚えのある声がした。

そしておもむろに、頭の鎧を自ら外した。

中から現れたのは、

踊るように解き放ていく、桜色の、長い髪――

――しまった！！！

ユリシスが思わず声をあげて後ずさった。
全身を凍てつくような悪寒がよぎる。

そしてもう一度、体が崩れかけた雪洞を見た。

――これは、偽物！

そうか、本体の雪洞・F・ケイマは警備ロボットの中から
この偽物を操り…

「正解」

鎧をまとったままの雪洞は、にやりと笑って腕をあげた。

その手には、銀色の回転レボルバーが握られている。

——やられた……！

予想外の展開に混乱したユリシスの思考回路は
正しい次の行動を算出すべく高速で情報処理していく。

それが一瞬の遅れを生じさせた。

直観を持たないロボットの、

致命的な欠陥。

「残念だったわね。遅いわ」

雪洞はその銃から

強力な神経麻酔針を数十本発射させた。

ドスドスドスッ！！

と、鈍い音が響く。

逃げ遅れた体に大きな針を突き刺さるのを感じたまま

ユリシスは目の前が真っ暗になった。

雪洞は足元に横たわるユリシスを見下ろすと、ふうっと息をついた。

腕のボタンを押すと、ぷしゅっと言う音と共に鎧が開く。
すっかり汗だくになった体が冷やされていく。

——さすがはアリエル、冷や汗がかせやがって…

「さてと、あんたにはまだ聞きたいことがあるの」

巨大な像でも一発で仕留められる量の麻酔薬を数本も撃ちこんだのだ
しばらくは動けないだろう、と

雪洞はポケットから電話機を取り出す。

「その前に、御迎えを頼まないかね…」

また返り討ちにあったと聞いたら、アリエルはどんな顔をするだろうか。

またあの整った顔立ちを醜くもゆがめるのだろうか

「今度はかりは逃がさないわ」

と、アリエル邸に繋ごうとした時だった。

「お待ちください」

顔をあげると、ドアにもたれかかってフランシスがこちらを見ていた。

「フランシス…」

雪洞は目を大きく開けた。

「何故、医務室から出させないように警備ロボットに命じていたはずよ…」

「ふ、あんな低レベルのロボットが私を阻むなどできません。

まあ、あいつは後で焼却炉にぶっこんでやりますがね」

フランシスは笑った。

「その体でどうやって…」

いくら知能が低いタイプでも、腕力だけならあなたにそこまで劣らないはずよ」

と言いかけて、雪洞は口をつぐんだ。

彼の首には、くっきりと円形の小さな跡があるのが見えた。それは、何かを刺した印。

ああ、と雪洞は瞬時に理解した。
恐らく、ドーピング剤を打ったのだ。

「フランス…あなた、またあの薬を使ったの」

フランスは、え？ という顔で雪洞を見た。

その薬は、人間で言うところノルアドレナリンにあたる神経伝達物質の分泌を促し

通常の数倍の速度で電気信号を体中に巡らせる。

すなわち、危険が迫ったという警報を無理やり発動させ

一時的に爆発的なパワーを引き出すのだ。

もちろんリスクも伴う。

効果が切れれば、細胞はかかった負荷の分だけ破壊が進むことになる。

「私の許可無く使うことは許していなかったはずよ」

「何をおっしゃるんですか」

フランスは笑いながら雪洞に近づいた。

「こんなときに使わなくてどうするんです。

しかし、驚きましたよ。

最初は、本当に生身のあなたが来たのかと焦ってしまいました。

あの偽物は、本物のあなたより5・6mほど背が高く声も高く
そして幾分目も大きく鼻も高く、美化されていましたからね。

おかげで気が付きました、あれはお嬢様の姿のみをかたどった操
作型ロボットであり

本当の貴女は鎧の中からあれを操っていたと。

ご丁寧に大型の警備ロボットに摸して、中から音が漏れるのを防
止してね。

だからこそ、私もわざわざ殴られるふりをしたのですから」

と、フランシスが口元の血を拭いながら

わずかに痙攣の残る手で雪洞の頬を伝う汗を拭おうと手を伸ばした。

しかし、

「そんなこと頼んでないわ！」

雪洞はフランシスの手を思い切りはねのけた。

「お嬢様……」

フランシスが、思わず顔をゆがめる。

「主人の命令は絶対でしょ！」

どうしてそんな勝手ことするの！」

言葉とは裏腹に、声がぐぐもる。

——まずい、泣きそうだ。

雪洞はそれを隠すように、俯いて自分の足を睨みつけた。

——これ以上あなたを

傷つけたくないのに

黙りこんでしまった雪洞の前で、フランシスは困惑する。

言いたいことは山ほどあった。

しかし、

ロボットである彼の存在意義は、主人の意思の通りに
主人の望むままに従うこと。

そこを突かれてしまえば、なすすべは無い。

フランシスは叱られた犬のように項垂れると、目を逸らして言った。

「申し訳ありません…」

嫌な沈黙が、二人の間に流れる。

先ほどまで窓を鳴らしていた風も
部屋の険悪な雰囲気を感じてか、いつの間にかどこかへ行ってしまった。

「お嬢様…？」

雪洞は下を向いたままである。

フランスはおそろおそろ、雪洞の髪に手を触れようと手を伸ばした。

その時だった。

ガタガタガタガタッ！！！！

何かがけたたましく、

固いものと固いものが、ぶつかりあうような音が響いた。

一気に静寂が破られ、
部屋の空気が暗転する。

ぱつと振り返ると、それが先ほど床に落とした電話機の
震動音と気付いた。

自動的に、通話が始められると機械で再現された
無機質な人間の声が響いた。

「——セバスチャン。

セバスチャン、何をなさっていますの？

そこに居るんでしょう？

あなたの信号が途絶えたから心配してかけてみたのですが

…まさか失敗しては、いらしゃいませんか？」

ガツン、と殴られたような衝撃で
血の気が一気に引いていく。

——…アリエル！

酷く冷たい声で喚く電話の向こう側で、
すっかり忘れ去られたユリシスが倒れているのが見える。

——しまった、こんなことしてる場合じゃ……！！

雪洞が慌てて駆け寄り
更に言葉をつづけようとする電話機に
手を伸ばした時だった。

雪洞が触れるより早く、それが叩き壊された。

「大丈夫です。アリエル様に被害が及びますので、これで…」

拳の主はユリシスであった。

「なっ…」

雪洞の予測をはるかに超えた、驚異的なスピードでユリシスは目を覚ました。

驚くと同時にフランスに抱き寄せられる。

「やはり、アリエル様の仰せの通りにしていて良かった」

ユリシスは立ち上がって言った。

「貴女の行動ぐらいアリエル様はお見通しですよ。

対睡眠薬のワクチンを、ここに来る前にアリエル様が施してくださいましたのです」

ユリシスは口角を思い切りあげて笑った。

——しかし、このワクチンをうつていても寝てしまうとは。

それにも関わらず、一時にしろ意識を失ってしまったという事実。

それがアリエルと雪洞の埋まらない頭脳の差を物語っていると気付く前に

彼は考えることをやめた。

「さあ、参りましょう」

ユリシスは手を広げた。

「お嬢様、下がって！」

フランシスが身構える。

「あいつ、何かをする気です」

全身で威嚇するフランシスを一瞥すると、
ユリシスはどこから出しているのか体の芯が震えるような低い声で
言った。

赤い髪が逆立ち、目の色も変わっていく。

「雪洞・F・ケイマ。

貴女は精神を遊離させた。

しかしそれは同時時間軸上であり単なる「コピー」。

アリエル様は手に入れたんだ。

偽物でもなく、
肉体も一緒に、
時間すら越えて

お前と簞を超える方法をなああ！！」

ビイイイイイイイッ！！！！！！！！

ずしんっ！！と巨大な鉛が乗ったような重圧がかかる。

一瞬なにが起こったのか分からなかった。

建物全体が震えている。

そうか、これは「音」

すなわち空気の振動。

それももの凄い高周波だ。

こんなものを聞いたら人間の脳などひとたまりも…

はっと気付くより早くフランスは反射的に雪洞を振り返った。

「痛い…頭が…」

雪洞は耳を必死に抑えていた。

何かが頭に入ってくる。

酷く痛い、勝手に脳内をかき乱される。

何故だろう、すごく痛くて悲しい。

だめだ、耐えられた無い、

助けて!!!

そう叫ぼうとした時だった。

ブツッ!!!!!!

爆音と共に全身を焼かれたような痛みが走った。

息を止めて、叫ぶ。

しかし、

自分の声が聞こえない。

突如投げ込まれた静寂の中、雪洞は痛みには耐えきれず倒れ込んだ。

ドサッと雪洞を抱きとめると、フランシスはユリシスを睨んだ。

咄嗟の判断だった。

脳内に影響が出る前に、フランスが雪洞の鼓膜を破ったのだ。

さすがに荒療治すぎる、

そう考える暇は無かった。

「SHDKR9000JIOLEJ138405DA1098…」

その音は、何かのコードであると気付いた。
それも、ものすごい速さで。

一秒当たり、約2000。

簞の精神輸送の方法は、脳内を一時肉体と切り離れた状態で動かす
ために
電気信号を送り続けること。

こいつも真似ごとをしようとしているのか？

「ぐあっ」

ついに悲鳴をあげたフランススの脳が、全身の力を彼から奪った。

雪洞を抱いたまま、背後に倒れていく。

——とにかくまずい、この部屋から出なければ!!

最後の力を振り絞ってドアに手をかけた。

その時だった。

ガシャン!!!!

廊下から、何かが割れる音がした。

開かれたドアの前で、顔面蒼白のシャーロットが立ち尽くしていた。

「シャーロット!!」

馬鹿かお前は、ここで何をしている!!!!

そして彼女の足元を見てフランスは
一瞬神経回路が痛みを感知しなくなるほど
視覚に集約された。

紅茶の海に浮かぶ真っ白なカップな破片の隣で

彼女の足は消えかかっていた。

「シャーロット…!」

フランススは叫ぶ。

しかし、時すでに遅し。

シャーロットは口元を手で押さえたまま
蠟人形のように動かない。

大きく開かれた鮮やかな青い瞳も
すでに焦点を失ったまま固まっている。

そしてシャーロットの身体は、砂が崩れ落ちるかのごとくサラサラ
と細かな粒子へ変わり

重力に逆らって拡散して行く。

膝から

胸へ

そして顔へと

音の無い世界で何かを叫ぶフランスを見ながら
雪洞はその光景を呆然と眺めていた。

全てがゆっくりと、何処か他の世界で起こっているように見える。

目の前で起こっているのが受け入れられなかった。

見たくない、

しかし、目が離せない。

やがて何かが爆発したように
部屋全体を光が覆う。

思わず目閉じた雪洞が次に目を開けたとき

シャーロットはそこに居なかった。

「チッ…」

ユリシスは喉元を抑えると、耳に当てていた震動遮断物を外した。

——どこまでも運の良い…

「シャーロット…ねえ…」

雪洞はふらふらと、シャーロットが立っていた筈の床をさする。

しかしそこにあるのは、彼女が持ってきたカップの破片だけである。

「いやあああ…！」

雪洞はその場に泣き崩れた。

「すみません、リディア様…」。

思わぬ邪魔が入り輸送に失敗しましたが、かくなる上は…はい」

ユリシスは胸元の無線機に手を添え何かを話している。

彼自身にも大きな負担がかかっているのだろう。

立っているのがやっとという様子で息を吐いていた。

フランスも膝に手をついて立ち上がると、ユリシスを睨みつけた。

「貴様、シャーロットを何をした」

「…」

「言わぬか…」。

質問を変えよう、彼女を何処へ送った!？」

「貴方としては満足でしょう。」

私は雪洞・F・ケイマを狙ったのですよ」

ユリシスは傷のついた頬を触り、真っ白な手袋についた血を見ると無気味に微笑んだ。

「あのコードはなんだ。」

彼女を簞に送ったのか!？」

「少し違いますね。」

あそこは簞のようで、簞ではないのです」

「どついう意味だ」

ユリシスはフランスに近づくと

「文字の通りですよ」

と囁いて、その横を通りすぎた。

「待てユリシス！」

ドアに手をかけたユリシスは、足元の雪洞を一瞥する。

「まあ…良いでしょう。」

ここまで手こずらせた褒美です。

受け取りなさい」

そう言ってユリシスは、何かをフランスに投げた。

受け取ってみると、それは小さな黒い破片である。

「きつと面白いものが見られますよ。」

…本番はこれからです」

そう言い残し、ユリシスは部屋を去った。

後を追おうと踏み出した足が崩れ、
フランスはその場に倒れこむ。

ユリシスが指を鳴らすと同時に、ようやく何かから解放されたのか

屋敷中のアラームがけたたましく鳴り始める。

「くそっ！」

フランスが床に拳を叩きつけているのが見える。

色を失いしんとした世界の中

雪洞はただ、涙が床に染み込んでいくのを眺めていた。

3 - 15 (後書き)

ユリシス『本番はこれからです』

ツキミ『やつとかよ!』

キワミ『おせえよ!!!!』

(切実)

「医療ロボット！早く！！」

ニコの怒鳴り声と走り回るメイドロボット達の足音

そしてシャナの泣声が屋敷中に響き渡っている。

「お、お嬢、お気を確かに」

恵永に抱えられ雪洞が、医療室へと運ばれて行った。

両腕に器具を取り付けたロボットが出迎え、
患者が医療用カプセルに収納されると同時に
医務室のドアが閉められた。

騒然とした空気の中、フランスは一人動かぬ体を引きずりながら
コンピューター室へと向かっていた。

コンピューターと言っても、超高度科学時代である23世紀では視
覚化され3次元に浮遊するデータそのものを示す。

ケイマ家のコンピューターを統御する人工知能は雪洞の思考回路を

基にしているため、
扱えるのは雪洞本人の他にフランススだけであった。

フランススが右手でセンサーに触れると、中央の大画面に篝のマークが現れる。

「コンニチワ。篝オーナーシステムキドウシマスカ」

「しなくていい。今日はこれを解析してほしい。」

フランススはガラスの破片のような黒いチップを端末に挿入した。

「オマチクダサイ。」

デングンをキラナイデクダサイ。

カイメイシュウリヨウマデ8分57秒……」

ふつつと息をつき、フランススは椅子に座った。

—これからどうするか。

ここまでの緊急事態は初めてだ。

いずれにせよ、このチップでアリエルが何を伝えようとしているのか

それが問題だ

「相変わらず無茶をするな、お前は。」

突然の声に驚いて振り向くと
白衣の男が入口に立っていた。

フランスはほっと息をつく。

「トムキンス様。」

いらっしやてついたのですか」

「いらっしやったじゃないだろう。」

社長の鼓膜を破った張本人が」

トムキンス（Tompkins）と呼ばれた男は世界医療工学会の
副理事長

即ち医者であった。

体の弱かった雪洞を小さいころから診てきた。

医者に似つかない粗暴な外見と裏腹に温かな内面を持ち合わせ、

雪洞が心を寄せる貴重な存在の一人でもあった。

フランスもこの男と居る時はセキュリティセンサーを緩めることができた。

カフェイン中毒者の彼はいつものように
コーヒーの入ったマグカップを持って部屋に入った。

「聴覚器官の振動を利用し、脳細胞に働きかける周波数でしたため
危険性が未知数でした。

命を優先した結果です。

お嬢様の容体はどうです？」

「なに、現代の技術を持つてすれば聴覚はすぐ回復するだろう。
開けられた穴も必要最小かつ綺麗だったからな。芸術的なほど。

おかげで縫合しやすかったぜ」

「問題は精神的ショックの方ですね」

「いや問題はお前の方だ。」

大丈夫なのか、体は」

「ええ。」

少し胸部と頭部の神経中枢をやられましたが」

「俺が診てやろうか？」

トムキンスはフランシスの隣に腰かけると、
飲むか？とコーヒーを差し出した。

「せっかくですが。」

私をメンテナンスできるのはお嬢様だけです、
彼女が回復しないことには」

「大変だな、ロボットも」

「これは？」

せわしなく大画面に表示される暗号を見て
トムキンスが尋ねた。

「アリエル様から頂きましたもので、現在解読中です」

「はあ、天才共のやることはいちいち手がこんでるね。

手紙を読むのにも一苦労だ。果たし状か？」

「ラブレターの類では無いかと思しますので、どちらかと言えば」

「ここ最近の騒ぎにはやはりアリエル嬢が絡んでいるのか？」

篝の人体影響については理事会でも度々問題になっていたから気になっただけだが、

ついに発生したそうじゃないか」

無精ひげをさすりながらトムキンスはため息をついた。

「女の嫉妬は怖いねえ。

学生時代の成績争いに始まり、研究結果の権利争い。

アリエル嬢はいつも社長のライバルだったからな。

それが篝の開発で先越されてからというもの、

あの手この手で社長の邪魔をしてきやがる。

世間ではあの美貌と話術でアイドル並みにもてはやされてるらしい

が、
俺はどうもいけ好かんね、あの女は。」

「それでもこれまでは、彼らからここまで実質的な被害を被ったことはありませんでした。

私どもの方がいつも上手うわてだったからです」

フランスはのど元の蝶ネクタイを外して息をついた。

「今回も、私の予想内で全てことは進んでいた筈でした。

それが、まさかいきなりこうも直接仕掛けてくるとは。

それもお嬢様を狙ったの物理的攻撃など。

あまりにも無謀で危険な懸けです。

見合う利益も不確定です。

さすがにシュミレーション外でした…とにかく私のミスです」

フランスは口をつぐみ画面を見つめた。

「安心したぜ。」

お前からミスなんて言葉が出てくるなんてよ。

完璧すぎも逆に不完全だぜ。

人間、どこかしら欠点があるから前に進めるんだ。

じゃなきゃ生きる面白みがねえってもんよ」

トムキンスはフランスの右手の傷を眺めながら言った。

「私はロボットです」

「…いや、まあそうなんだが。要はだな…」

フランスはふっと笑うとトムキンスを見た。

「ありがとうございます。」

なんだか胸部の辺りが軽くなりました。

これもメンテナンスの一種でしょうか」

トムキンスもにやりと笑った。

「そうさ。医者なめるんじゃないよ。」

まだまだ成長途中ってことさ。お前も社長も」

「カイサキカンリヨウシマシタ。」

二人ははっとして画面を振り返る。

少し和らいだはずの空気が一瞬にして張りつめられる。

それに伴い、部屋中に離散していた小画面が消え、中央画面に半透明な立体物が浮かび上がったかと思うと

設計図や数列を映した画像が部屋中に展開していく。

「これは…」

「なんだいこれは？」

「どっかの地図か？」

眉をつりあげるトムキンスの隣で

部屋中を埋め尽くす奇妙な図形達を見渡しながら
フランススが呟く。

「篝だ」

「あ？なんだと？どういうことだ？？」

「いや、全てが反転…している、どういうことだ、これは篝ではない？」

「

瞳の視覚情報を取り込んで、フランシスの情報解析モードが作動する。

トムキンスは残ったコーヒーを飲み干して、動かなくなったフランシスと拡大を続けるコンピューターをただ見つめる。

「新着メッセージ、一件、デス」

突如、無機質な声が部屋に響いた。

「ウイルス検出、ナシ。

ジドウテキニヒラキマス」

一瞬辺りが暗くなると、画面に女の顔が現れた。

アリエルだ。

アリエルはふわふわに巻かれたショートカットを少しゆらして画面の向こうから二人に微笑みかけた。

「うきげんよう。」

時間が無かったので、2次元で失礼しますわ。

今頃は差し上げたプレゼントを開けてくださったところかしら。」

メディアに向けるいつものほほ笑みより少し釣りあがった目を細め、

言葉を続ける。

「気にしていただけました？も

う賢い貴方がたならわかりかしら。

そう、これは【簞】であって【簞】では無い世界。

水面に映った篝火の影のごとく、

篝の形、

揺らぎ、

性質

全てを移しとったもの。

名前はまだありませんの。

何かいい案がありましたらつけてくださる？

ほーっほっほっ！」

華奢な白い手を口に当て、大層愉快と言った声で高らかに笑う。

トムキンスが思わず落としたマグカップの割れる音が

アリエルの笑い声の中で小さく響いた。

「相変わらず癪に障る方ね…」

背後からかすれた声がして振り返ると、
雪洞が壁に寄りかかってこちらを見ていた。

「雪洞様！ベッドに戻らないと！」

慌てて追いかけてきたニコラが
息を切らせて雪洞に声をかける。

「雪洞ちゃん…！」

歩き回るにはまだ早い。

悪いことは言わないから、寝てなさい」

「Dr・トムキンス、それは無理です。

目を閉じるとまだ、シャーロットが…」

雪洞は俯くと頬に影を落とす。

「…そうか…」。

下がってくれ」

トムキンスはニコラに手で合図する。

「だけど…」

「私がついている。

大丈夫だ」

「…わかりました」

ニコラが去るのと同時に
フランシスが雪洞に駆け寄って体を支えた。

「お嬢様、聴覚が戻られたんですね」

「当たり前でしょ、Dr・トムキンスは世界一の名医なんだから。

まだ少し聞こえは悪いのだけれどね」

雪洞は顔をあげると力無く笑う。

「世界一は言い過ぎだ。

完治には少し時間がかかるからな、安静にしておきなさい」

諭すトムキンスを無視して、雪洞が画面に近寄った。

「…これは？」

フランスとトムキンスは顔を見合わせる。

「ユリシスが残したチップに入っていたものです。

篝の設計図に非常によく似ていますが…」

お嬢様、何かご存知で？

と言いかけて、フランスは口をつぐんだ。

雪洞の目は、大きく開かれその瞳が震えるように揺れていた。

何か恐ろしいものを見たかのように、口元を抑えてる手の隙間からひゅっひゅっと乱れた呼吸が漏れる。

暗い部屋に浮かぶ人工的な緑光に照らされていても分かる、

真っ青な顔色。

「おい、どうした？」

大丈夫か？」

トムキンスが慌てて駆け寄り、首と手首に指をあてる。

「お嬢様!？」

「これは…陽炎…」
かげろふ

雪洞は、かすれた声で呟いた。

「えっ…?」

「…どこで手に入れた!？」

今まで見たどのときよりも恐ろしい剣幕で、
雪洞はフランスに詰め寄った。

突如襟を掴まれたフランススが、苦しそうに声をあげる。

「ユリシスがよこしたチップに入っていたのです!!」

「ユリシスが!？」

嘘つかないで！」

「嘘を言っただうするのですか！」

抵抗もできず締め上げられるままのフランススがぐつと声を詰まらせる。

「落ち着け雪洞ちゃん！」

あまり興奮すると、傷口がまた開く！」

トムキンスに背後から押されながらも、顔面蒼白な雪洞は視線を画面から離さない。

怒りなのか恐怖なのか、火照った体からはかすかな震えが伝わってくる。

「…大丈夫だから。」

「落ち着きなさい」

いつも精神病棟の患者にそうするように、トムキンスはなるべく静かな声でゆっくりと雪洞を宥める。

「彼は嘘なんてついてないよ」

「そう…なの？」

顔が今度は、思い切り歪む。

何かに、絶望したように――

フランスは乱れた襟元を直しながら、こほんと咳をして言った。
彼の神経回路も著しく乱れているのが、自分でもわかる。

「私の推測ですが、恐らくこれは、アリエル様御自身が開発された
簗の偽物。」

そして、シャーロットが送られた場所かと…」

「シャーロットが？」

雪洞が初めてしっかりとフランスを見た。

「はい。多大なリスクを追いながらのお嬢様への直接攻撃、『別の世界に連れていく』というユリスの言動から、彼らが何らかの手段でお嬢様をどこかへ輸送しようとしたことは確かです。

肉体の輸送とは既成理論を越えていますが、消滅したというよりは何処かへ移動したと行った方がまだ頷けることを考慮すればその行き先は簞のような異次元空間と仮定することも十分可能。

そして本来の狙いが失敗したとなれば、再びお嬢様をこの別世界に送ろうと次の手段を当然打たなければならない。

となれば、いつそ手の打ちを見せ…つまり、シャーロットの居場所を明らかにし

お嬢様をおびき寄せる餌にした方が合理的との判断故の行動でしょう。

以上のことから、これはシャーロットが居ると思われる場所の説明書かと思われます」

頭の中にある情報を一気に吐き出すと、フランシスは大きくため息をついた。

彼の視線の先にある雪洞の瞳が閉じられているのは執事の言葉を聞いて故なのか

彼女の思考がその遙か先を行っているからなのか。

「…ほんとね、

正解よフランス」

雪洞はゆっくりと目を開いて、フランスを見つめた。

そして椅子に座って足を組むと

重々しい口調でついに話し始めた。

「簀は失敗作なの。

元々私は、身体ごと他空間に輸送するシステムを創ろうとしていたの。

簀は、その研究の過程で出来たもの。

脳内エネルギーの発見を受けて始めた研究だけれど私にとっては、陽炎開発のための1ステップに過ぎなかった」

雪洞は天井を見あげ、フツと笑った。

「こんなものを創りたかったんじゃない…そう思った。

それでも、かすかであつても私の道を照らしてくれるものにようやく出会えたの。

だから、篝火。

【篝—KAGARII—】というのは、そんな情けない意味なのよ」

フランススの頭を殴られたような衝撃が襲った。

—なんだそれは。

聞いていないぞ。

【篝】の意味とは、昔人々が追った夢への道筋を再び照らす灯のことでは無かったのか。

そしてなんだって、肉体の輸送…？

これまでと話が違いすぎる。

篝の最大のメリットとは、肉体の放棄そのものだ。精神だけの世界ゆえに、自由度も異なれば現実のものでなくとも、

可能性が生じるのだ。

それが肉体も伴った異次元輸送となれば
それは現実世界となんら変わらないじゃないか。

お嬢様のなさりたかったこととは

一体何なんだ。

錯綜する情報の渦に半ば意識を失いかけながら
フランスはトムキンスの顔を見た。

トムキンスは眉を潜め、重く真つすぐな眼差しで雪洞の横顔を見ている。

「簞が出来てから何年も、陽炎の発明のために色んなことをしたわ。
言いたくないことも、あなたは聞かない方がいいことも。

それでも結局、完成はしなかったの。完璧なものは、ね」

「お待ちください」

フランスは額に手を当て、頭から懸命に考えを絞り取るように言った。

「輸送先はこの世界のどこですか、それとも簞の様な異次元ですか。

肉体の輸送とは、分子レベルまで分解し超光速で移動させるということですか。

万が一それが可能となったとしても、形質をもたないエネルギーと異なり

分子同士の衝突はどうなさるのですか。

精神が行けば肉体も、というのは短絡的すぎませんか。それは話がまた異なるでしょう」

お嬢様ほどの人が、それが分からないのですか。

・違う、そんなことじゃない俺が聞きたいのは。

フランススは、顔をあげて雪洞を見た。

「陽炎とやらを作るメリットとはなんですか」

雪洞はフランススと目線を合わせなかった。

そして淡々と、言葉を続ける。

質問には答えなかった。

「一度だけ、それが成功したことがあったの。」

無我夢中で…いくつもの相互作用が起こって偶然起こった物質の輸送よ。

その時のコードが、これ」

そういつて空間に浮かぶ無機質な図形達を指差した。

「不規則な上昇気流によって生じる陽炎のように、

刹那的に立ち上った世界。

私はこの不安定なモノを【陽炎・KAGEROU】と名付けた」

「…つまり、一応物質の輸送理論は確立されたということですね」

雪洞は少女は首を横に振った。

「成功と言える代物では無かったわ。

確かに物質の輸送には成功した跡が残っていたのだけど…
それがどこへ行ったのか、分からなくなってしまったの」

雪洞は今にも泣きだしそうな顔で唇をかみしめた。

心なしか潤んでいる瞳には、何が映し出されているのか
フランススには分からなかった。

「輸送先が分からないなど…

もう一度、同じ手順を踏まれても駄目だったというのですか？

科学的に確立され得る手法なら、それでもなんらかの手がかりが…

ましてやお嬢様ほどの方が一度掴みかけたものを失うなど…」

雪洞は黙って首を振った。

そこには大切な何かを無くしてすっかり頂垂れた子供のような
少女の姿があった。

昨夜見た怖い夢を思い出して
泣きべそをかいている子供のようでもあった。

驚くでも訝しむでもなく、
フランスよりよっぽど冷静に話を聞いていたトムキンスが
そっと雪洞の肩に手を置く。

そして雪洞の悲痛な想いを写し取るように
少しばかり顔を歪ませた。

「…少し休んだ方が良い」

雪洞はさすがのようにトムキンスを見あげる。

そんな彼女の横顔を振り向かせるかのように
フランスは言った。

「お嬢様、あなたは…」

あなたは陽炎に、一体何を送ったのですか？」

どうしてそんな言葉が口から出たのか咄嗟に分からなかった。
しかしその時、雪洞は何かに刺されたように体を強張らせた。

ぐるりと世界を縦断するように目が泳ぐ。

しかしそれと同時に

ピシッ！！

突如、フランススの頭を激痛が襲った。
全身が痺れるほどの痛みだった。

そして絵具を混ぜたパレットのような画像が
渦を巻いて目前で旋回していく。

頭の中に突如現れた濁流が咆哮し
幻覚なのか幻聴なのか、視覚も聴覚もあらゆるものが
回り始めた。

——なんだこれは…

痛い！！！！

「ぐ…あ…」

フランススは今にも弾けそうな頭を必死で抑えた。

何かが自分の中から溢れ出ようとしている。

——出したら、死んでしまう!!

フランスは訳も分からず、それを必死で抑えた。

歪んでいく視界の中でぼんやりと、雪洞が駆け寄ってくるのが見える。

「フランス!! どうしたの!？」

慌ててフランスの肩を掴み、瞳の色を確認する。

——濃淡を繰り返している…

交感神経系がパニックになっているわ

雪洞は咄嗟にトムキンスを見た。

「ドクター! フランスが!!」

そつよ、私を庇ってユリスから攻撃を受けていたのに…」

陽炎にすっかり気をとられて

あるうことか彼の体を気遣う余裕すら失っていた自分に
叫びだしたいほどの怒りがこみ上げる。

「今すぐ直しに行かないと!」

走りだそうとした雪洞の手を掴み、フランシスは唸るように声をあげた。

「…大丈夫です。大したことは御座いません。

それよりお嬢様、現状の解析を…」

「嘘をつくな、中枢神経回路がやられているのだろっ」

フランシスに肩を貸しながら、トムキンスが反論する。

「やっぱり…」

雪洞の顔から見る見る血の気が失せて行く。

「フランシス!!こんなことしてる暇は無いわ、治療します!」

「い、今からで御座いますか?」

「今しなくていつするのよ!?!」

「いや、しかし…」

フランスはトムキンスを見た。

そんなことをしている余裕はありません、と目で訴える。

トムキンスはすぐ近くで喘ぐ青年の端正な顔立ちを苦虫を潰しながら見つめたあと

雪洞に目を向けた。

すっかり取り乱して慌てている彼女自身も

顔色が十分芳しくない。

重心もぐらついている、心身の緊張から足に力が入っていないのが分かる。

医者が普通の人間の体を直すのでさえ、全気力と体力がそぎ落とされる。

それがましてや、確かなセオリーも確立されていない超高性能ロボットの治療となると

雪洞にどれだけ心身の負担がかかるかは想像に難くない

しかし…

「…雪洞ちゃん。」

その身体ではろくなパフォーマンスができない。

少し落ち着いて、私の出す薬で体力を回復してからにしない。」

「馬鹿を言わ無ないで！」

雪洞はトムキンスを睨むと、自分を落ち着かせるように一呼吸置いて今度は正面からトムキンスを見据えた。

「ろくでなくても、やります」

「これはドクターストップだぞ」

「ドクター。」

フランススが力を発揮できない今、このケイマ邸は無防備な状態に等しいのです。

そんな時に何かあったら、ケイマ邸は終わりです」

「先程の攻撃から時間はたっておりません。」

彼らが動くのはまだ先かと……」

「フランス、本当に頭がいかれちゃったのね。

いつもの合理的かつ効率的に仕事が進むような補助プログラムはどこに行ったの？」

雪洞が諭すような声で、フランスの頬に手を添えた。
触られた箇所から痛みが走る。

感覚神経が過敏になっているようだ。

「うつ……」

「雪洞ちゃん。

私もフランスも、君のことが心配なんだ」

「わかってます。

でも、やりたいんです。

やらなきゃいけないんです」

自分を見つめる雪洞の強い瞳を見て、トムキンスは目を細めた。

先ほどまでの絶望に打ちひしがれていた顔から
ようやく少し、生気を取り戻したものになった。

——強く、大きくなったな。

あのか弱かった少女が…。

「わかったよ、許可しよう。

ただし条件がある。施術には補助ロボットを同行させること。
万が一倒れたときに備えて、医療ロボットも施術室に数台配置させ
る。俺もすぐそばで待機する。

そして五時間以上の作業の継続は許さない」

「はい!!」

——また貴方は、人の助言を聞かずに無茶を…

そう言いかけた時、それまで張っていた緊張の糸が切れたかのように
ずしんと重たい疲労が体に伸しかかった。

すぐに手配させます、ドクターフランシスをそのまま連れてきて…
と、雪洞の声が次第に遠ざかって行く。

トムキンスの腕が自分の体に回されるのを感じながら

フランスはゆっくりと、意識を失った。

薄緑色の部屋は数十の電灯に照らされている。

光の注ぐ先には半透明のカプセルと
それに寄り添う少女の姿だけがあった。

ケイマ邸のどの部屋より入念にセキュリティがかけられたこの部屋
こそが、
超高度機能人工知能型人工生命体ロボット、別名フランスス専用整
備室である。

寒々しい静寂の中、雪洞は横たわるフランススを見つめていた。

「傷つけてばかりでごめんね…」

雪洞の指は、頬に触れて傷跡をなぞる。

フランススは人形のように冷たかった。

トムキンスは落ち着かない様子で、慌ただしくコーヒーカップを口に運んだ。

視線は明日の医療学会で発表する資料に注がれているが、内容が頭に入っているかは定かではない。

それはニコラにすら分かった。

「先生…飲みすぎです」

恵永は恐る恐る、19杯目のコーヒーを差し出す。

「やはりうまいな、君の入れる珈琲は。」

世界中飛び回ったがここで飲むのが一番だよ」

トムキンスは資料から目を離さずにカップを受け取る。

恵永とシャナは目を合わせて肩をすくめた。

「ねえトムキンスさん、雪洞様が治療室にこもってからもう4時間だよ。」

これじゃ雪洞様が倒れちゃうよ!」

ニコラが苛立たしげにつぶやく。

「だから俺がこうして待っているんだろう、明日は久々の総会だっ
ていうのに。」

雪洞ちゃんに何かあったが倒れたらすぐに
俺が駆け付けなきゃいけないからな」

「何かあったらってなんだよ！」

思わず立ち上がったニコラを慌てて恵永が抑える。

逆上した猫のように毛を逆立たせているニコラを一瞥し、
トムキンスは珈琲を飲んだ。

「うまい」

シヤナがやれやれと首を振った。

「こんなことになるなんて…」

俺たちがユリスさんを入れたばかりに」

ニコが泣きそうな声で呟いた。

お前のせいじゃないさ、と恵永がニコラの頭に手を置く。

「紅茶だって、シャーロットじゃなくて俺が持って行けば良かったん
だ」

ニコラに持って行かれたら、また割られちゃうもの！

と、最後に見たシャーロットの顔は、

相変わらず少し口を尖らせて片眉をあげて怒って見せながらも

そこには弟のようにニコラを可愛がる彼女の愛情がにじみ出ていたことも

今さらながら分かっていた。

しよぼくれるニコラに笑いかけるシャーロットの顔が思い出され、手に爪がくい込むほどの力が入る。

「雪洞様まで倒れたら、もともこもないのに…」。

唯一の僕の居場所が、なくなるのに。

雪洞様はフィニステールさんのことしか考えてない…」

「それは違うよニコ」

恵永は少年の栗毛をなでながら言った。

トムキンスは何も言わずに資料をめくっている。

「恵永にはわからないんだよ、独りの世界は見たことがある人にしかわからないもの」

「そうかもしれない」。

でも、そうじゃないかもしれないよ」

恵永は続けた。

「今はただ待とう」

「ねえじーじ、ぼんぼりたんはどうしてお兄様を作ったの？」

シヤナがトムキンスの空のカップをのぞきこみながら
ふと思い出したように尋ねた。

じーじと呼ばれたトムキンスは、特に気にとめた様子もなくコーヒ
ーを口に運ぶ。

「んん？」

「シヤナは、コドクシ…カイから頼まれたんでしょ。

でも兄さまは？」

シヤナは顔をあげてトムキンスを見つめる。

「俺も聞いたことない、というか考えたこともなかったけど」

「あ、私もです。」

…そういえば、昔ケイマ家にゆかりのある客人がお見えになったとき、

フランスさんの顔を見てたいそう驚かれていたことがありました。

フランスさんは、ただの執事用ロボットではないのですか？」

ニコラと恵永もトムキンスを見た。

一同の視線を横目で受け止めると、トムキンスはきよとした顔で

「そうだなあ、作りたかったからじゃないのか」

と答えた。

「なんだ、おじさんも知らないの？」

「そ、そうですよね。」

雪洞様ほどのお忙しい方なら、執事の一人や二人必要ですしね」

ニコと恵永の溜息が響く一方で、

シヤナはトムキンスを食い入るように見つめている。

ピピツという音とともに、スカイブルーの瞳が大きく見開かれ

「嘘！知ってる！」

シヤナはぶつつと口を膨らませた。

「じーじのケチ！顔に知ってるって書いてある！」

トムキンスは苦笑して

「おうおう、女の勘は怖いねえ」

と呟いた。

「カンじゃない、ドクシンジュツ！

大人っていつもそうよね！」

「シャナ、また変な言葉を覚えて…」

「トムキンスさん、知ってるの？」

「教えてよ！」

ニコラも身を乗り出す。

するとトムキンスはとぼけた様子で

「君たち、こういうデリケートな問題は他人が軽々しく口にしちゃいけないんだよ」

と答えると、そそくさと資料を片づけ立ちあがった。

「いつも医療界の裏事情軽々しく口にしてくせに……」

ニコラをあしらうように手をふる

トムキンスはドアに向かって歩きだした。

が、走ってきたシャナが足にしがみつ

「いやいや！家族は隠し事しちゃだめなの！

ぼんぼりたん言ってたもん！」

「シャナ……」

頑として動かない少女を見つめると、トムキンスは屈んで

「ごめんよ。

でもな、大人は矛盾した感情も持つ生き物なんだ」

と困ったように微笑んだ。

シャナの目に涙が浮かぶ。

「ま、お前も大きくなったらわかるさ。

大人の深さも、珈琲の上手さもな」

感慨深けに無精ひげをさすりながら、シャナをなでようと手を伸ばした時

「あ、まずい」

とニコラが呟いた。

ん？

とトムキンスが振り返った次の瞬間

「うわーーーーーん！！！」

つんざくような泣き声が部屋中に響き渡った。

シャナの声だ。

そしてそれを合図に、部屋中の磁気を含む家具という家具が全て宙に浮かび旋回し始めた。

「わあああああ！シャナ、ストップストップ！」

ニコラが叫ぶ。

「お皿が！！東洋の特注工芸品が！！！」

数十万の皿が砕けるとともに、恵永の血の気も散っていく。

「し、シャナがやってるのか！？やめなさい！」

「うわーーーーーん！！！」

抱きかかえようとするトムキンスの手を振り払い、シャナはさらに泣き続ける。

テーブルに骨董品、花瓶に絵画と部屋中の装飾品が集まって渦をまき始めた。

「おじさんもう嘘でもなんでもいいから話してよ！！！」

戸棚を抑えながらニコも怒鳴る。

「それはできない！」

「なんで！！？」

トムキンスも叫んだ。

「俺は理系だからだ！！」

雪洞ちゃん、早く帰ってこいーーーー！！！」

ロタは一人砂漠の真ん中に立っていた。

あたりを見渡すと、そこには茶色い砂がどこまでも広がっている。

遠くのところどころに灰色のものが見えた。

目を凝らすと、昔教科書で見たような
旧式の建物。

確か21世紀ごろに都市に連立された
『コウソウビル』と言う名前だっただろうか。

23世紀の美しい外観のそれとは程遠い
コンクリートの塊であるそれは、

少なくともそこに街があることを意味している。

「ここは… 簗？」

シャーロットはぼやけた頭を振ると、

風の吹く方向へ歩き始めた。

どれくらいの時間が経っただろう。

口は背中で息をしながら、一向に終わりの見えない砂漠を歩き続ける。

「暑い…」

汗でぐつしよりと重くなったメイド用のエプロンを脱ぎ捨て、シャーロットはふうっと息をついた。

「溶けそう…ああ、汗と埃でぐちゃぐちゃ。

これは帰ったらはやく洗濯しないと」

自分に言い聞かせるように、帰ったらとシャーロットはもう一度呟いた。

「大丈夫、きつとお嬢様が助けてくれる。

それまでに私に出来ることをしなくっちゃ」

「アリエル様が恐らく絡んでいて、おまけにこの感じだと…ここは
簀よね？」

でも身体の感触はある。おかしいなあ…」

シャーロットは屋敷内の家事を一任されるだけあって、
ある意味ケイマ邸の誰よりしっかりした娘だった。

おまけに気丈で、明るい。

「何か歌でも歌おうかな…」

折れそうな心を立て直すように、シャーロットは声を出す。

「らん、らんらんらん…」

しかしいつまでたっても、砂漠の終わりは見えてこない。

簀なら身体の負担は擬似的なものである。

しかしどうだろう、この張り付くような気だるさ、あがる吐息、
徐々に動かなくなる手足。

まるで本当の身体みたいだ。

ここは、どこ？

「あっ！！！！」

呆けていた瞬間、シャーロットは足元を砂地にとられ前に倒れた。

・転ぶ・・・！！

思わず目を瞑ったその瞬間、

ふわっ　とした甘い香りが口を包んだ。

次に来るはずの衝撃も、無い。

代わりに感じるのは暖かい何かと、

聞きなれたはずの――

「大丈夫？」

シャーロットはうつすらと目を開けると、声の主を見た。

ぼんやりとした視界の中で、銀色の髪がなびいている。

「フランスス…さん？」

まさか、こんなところに。

いや…違うわ、目の色が違う。

「あなたは…」

そこまで言いかけて、シャーロットは力尽きたように眠りに落ちた。

青年はふつと微笑んで立ち上がると、

少女を抱えてゆつくりと歩き始めた。

「ようこそ、陽炎へ」

4・5（後書き）

イントロクイズ

折れそうな心を立て直すように、シャーロットは声を出す。

「らん、らんらんらんらんらん

らん、らんらんらん

ヒント：オウム

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2741x/>

TEN-ROBO.-天才少女とロボット執事-

2011年12月2日18時53分発行